

千歳市

オリイカ2遺跡(3)

—一般国道 337 号千歳市新千歳空港関連工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成 21 年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

千歳市

オリイカ2遺跡(3)

—一般国道 337 号千歳市新千歳空港関連工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書—



平成19年度調査状況(南西から)



平成20年度調査状況(北東から)



Ⅲ層Ⅴ群土器出土状況1(北から)



Ⅲ層Ⅴ群土器出土状況2(北から)



S B-1 旧石器出土状況(北から)



S B-2 旧石器出土状況(東から)



復原土器



旧石器

例 言

1. 本書は、一般国道337号千歳市新千歳空港関連工事に伴い、財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成19・20年度に実施した、千歳市オリカ2遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書（北埋調報第267集）である。
2. 本遺跡は、同工事原因により平成14（2002）年度（B地区）及び平成16（2004）年度（A・C地区）に、当センターが発掘調査を実施しており、それぞれ『千歳市オリカ2遺跡』（北埋調報189集 2003年）、『千歳市オリカ2遺跡（2）』（北埋調報221集 2005年）を刊行している。本書はそれに続く三冊目となる報告書である。
3. 本書の執筆は三浦正人、鎌田望、末光正卓が行い、編集は末光が行った。文責者については文末に丸括弧で氏名を記した。
4. 現場での写真撮影は、平成19年度：鎌田望、平成20年度：末光正卓が、報告書掲載遺物の写真撮影は越田雅司が担当した。
5. 包含層出土の玉2点の岩石学的分析を下記の機関に委託した。
アースサイエンス株式会社
6. 調査・報告にあたり、下記の諸機関及び各位のご指導・ご協力をいただいた。（順不同・敬称略）
北海道教育庁生涯学習部文化・スポーツ課、千歳市教育委員会埋蔵文化財センター、
恵庭市郷土資料館、苫小牧市博物館、厚真町教育委員会
千歳市教育委員会埋蔵文化財センター：田村俊之、高橋 理、豊田宏良、松田淳子
恵庭市郷土資料館：上屋真一、松谷純一、森 秀之、長町章弘
苫小牧市博物館：赤石慎三
厚真町教育委員会：乾 哲也、奈良智法、山田和史
千歳市総務部市史編さん担当：大谷敏三

記号等の説明

- 確認された遺構については、次の要領で略号を付し本文及び図表中において用いた。
 - *Ⅲ層で確認された遺構は「U」、V層より下位で確認されたものは「L」をそれぞれ頭に付した。
 - *遺構は次の遺構略号を用い、ハイフンで番号とつないだ。
土坑：P Tピット：TP 焼土：F 土器（破片）集中：PS
フレイク・チップ集中：FC 旧石器ブロック：SB
- 実測図・拓影図の縮尺は、原則として次のとおりでスケールを付けてある。
遺構 1：40 復原土器 1：4 破片土器 1：3 土製品 1：2
削片・細石刃 1：1 旧石器・剥片石器・磨製石器 1：2 礫石器 1：3
- 遺構図・地形図等の方位は「真北」を示し、数値は「標高」（単位m）を表す。グリッドの基軸線は真北に対し28° 55′ 18″ 東偏する。
- 本文及び図表中で遺構の規模については次の要領で示した。一部破壊されているものは現存する計測値を（丸括弧）を用いて示した。
土坑・Tピット：「確認面の長径×短径/床面・坑底面の長径×短径/確認面からの最大深（m）」
遺物集中：「長径×短径（m）」
擬似焼土：「長径×短径/最大厚（m）」
- 土層の表記は、基本層序については「ローマ数字（大文字）」で、遺構覆土等の部分的な層位については「アラビア数字」で示した。攪乱層・試掘坑の出土遺物はすべて「I層」とし、風倒木痕内の層位については「F層」とまとめたが、層位がV層に特定できる場合は「FV層」と表記した。
- 土層及び土器・岩石の色調の表記に『新版標準土色帖』（小山・竹原 1967）を、土層の観察に『土壌調査ハンドブック』（ペドロジスト懇談会 1984）を参考にした。

目 次

例言

記号等の説明

目次

図目次

表目次

写真図版目次

I章 緒 言

1 調査要項	1
2 調査体制	1
3 調査の経緯	1
(1) 一般国道337号新千歳空港関連工事	
(2) 柏台1遺跡とその後の試掘調査	
(3) 平成13年度以降の中央地区の発掘調査	
(4) オルイカ2遺跡の調査・報告の経緯	
4 調査結果の概要	8

II章 遺跡の立地と周辺の遺跡

1 遺跡の立地と環境	9
(1) 位置と地名	
(2) 周辺の地形・地質・環境	
2 周辺の遺跡	16

III章 調査の方法

1 調査の方法	19
(1) グリッドの設定	
(2) 発掘調査の方法	
(3) 一次整理の方法	
2 基本層序	24
3 整理の方法	30
(1) 土器	
(2) 石器類	
(3) 遺物と記録類の保管	
4 遺物の分類	31
(1) 土器	
(2) 石器類	

IV章 遺構と出土遺物

1 概 要	35
2 土 坑	35
LP-1・2・3・4	

3	Tピット	37
	TP-1・2	
4	土器(破片)集中	40
	UPS-1・LPS-1	
5	フレイク・チップ集中	40
	LFC-1	
6	旧石器ブロック	40
	SB-1・2・3	
7	擬似焼土	45
8	道跡	45
	Ⅲ層上面の道跡	
	現代の道跡	
9	出土遺物	47
	(1) 土器	
	(2) 剥片石器群	
	(3) 旧石器群	
V章 包含層出土の遺物		
1	概要	59
2	土器	77
	(1) 復原土器	
	(2) 破片土器	
	(3) 土製品等	
2	石器類	96
	(1) 旧石器群	
	(2) 剥片石器群	
	(3) 磨製石器群	
	(4) 礫石器群	
	(5) 石製品	
VI章 自然科学的分析		
	石器及び玉類の岩石学的分析(千歳市オルイカ2遺跡)報告書 平成20年3月	
	アースサイエンス株式会社	113
VII章 まとめ		
1	調査成果の概要	119
	(1) 遺構	
	(2) 土器	
	(3) 石器類	
	(4) 遺跡の性格について	

写真図版

引用参考文献

報告書抄録

目 次

図1 遺跡の位置(新千歳空港関連工事道路用地内の遺跡)	2	図30 包含層出土遺物分布図(2)	63
図2 道央圏連絡道路計画路線図(北海道開発局『道央圏 連絡道路2002事業概要』より)	4	図31 包含層出土遺物分布図(3)	64
図3 松浦武四郎が描画したヲサツトウ周辺河川図	10	図32 包含層出土遺物分布図(4)	65
図4 明治期の長都沼周辺地形図	12	図33 包含層出土遺物分布図(5)	66
図5 周辺の遺跡	14	図34 包含層出土遺物分布図(6)	67
図6 グリッド設定図	19	図35 包含層出土遺物分布図(7)	68
図7 オルイカ2遺跡現況図	21	図36 包含層出土遺物分布図(8)	69
図8 遺構位置図及びⅢ層上面地形測量図	22	図37 包含層出土遺物分布図(9)	70
図9 Ⅲ層上面地形測量図及び擬似焼土UF-1・遺跡・ 土層断面図作図位置図	23	図38 包含層出土遺物分布図(10)	71
図10 V層上面地形測量図及び擬似焼土・TP-2位置図	23	図39 包含層出土遺物分布図(11)	72
図11 基本層序柱状図	25	図40 包含層出土遺物分布図(12)	73
図12 メインセクション(調査区東側壁45~29)(1)	27	図41 包含層出土遺物分布図(13)	74
図13 メインセクション(調査区東側壁29~15)(2)	28	図42 包含層出土遺物分布図(14)	75
図14 メインセクション(26区)(3)	29	図43 包含層出土遺物分布図(15)	76
図15 LP-1・2	36	図44 包含層出土の復原土器(1)	78
図16 LP-3・4	38	図45 包含層出土の復原土器(2)	79
図17 TP-1・LFC-1	39	図46 包含層出土の復原土器(3)	81
図18 UPS-1・LPS-1	41	図47 包含層出土の復原土器(4)	82
図19 SB-1	42	図48 包含層出土の復原土器(5)	84
図20 SB-2	43	図49 包含層出土の復原土器(6)	85
図21 SB-3	44	図50 包含層出土の復原土器(7)	86
図22 Ⅲ層上面の遺跡	46	図51 包含層出土の復原土器(8)	87
図23 現代の遺跡	47	図52 包含層出土の破片土器(1)	89
図24 UPS-1・LPS-1・LFC-1出土の遺物	48	図53 包含層出土の破片土器(2)	90
図25 SB-1出土の石器	49	図54 包含層出土の破片土器(3)	91
図26 SB-2出土の石器	50	図55 包含層出土の破片土器(4)	92
図27 SB-3出土の石器	50	図56 包含層出土の破片土器(5)	93
図28 SB・包含層出土の削片・細石刃	51	図57 包含層出土の破片土器(6)	94
図29 包含層出土遺物分布図(1)	62	図58 包含層出土の破片土器(7)・土製品等	95
		図59 包含層出土の旧石器(1)	97
		図60 包含層出土の旧石器(2)	98
		図61 包含層出土の剥片石器(1)	99
		図62 包含層出土の剥片石器(2)	100
		図63 包含層出土の磨製・礫石器(1)	102
		図64 包含層出土の礫石器(2)・石製品	103

表 目 次

表1 検出遺構一覧表	8	表43 P-29区出土復原土器観察表	106
表2 遺物出土点数一覧表	8	表44 L-28区出土復原土器観察表	106
表3 周辺の遺跡一覧表	15	表45 O-25区出土復原土器観察表	106
表4 測量基準杭一覧表	20	表46 O-27区出土復原土器観察表	106
表5 基本層序一覧表	26	表47 P-19区出土復原土器観察表	106
表6 現代の遺跡土層一覧表	26	表48 O-29区出土復原土器観察表	106
表7 土坑一覧表	52	表49 M-29区出土復原土器観察表	106
表8 Tピット一覧表	52	表50 M-29区出土復原土器観察表	107
表9 土器(破片)集中一覧表	52	表51 R-23区出土復原土器観察表	107
表10 フレイク・チップ集中一覧表	52	表52 N-23区出土復原土器観察表	107
表11 旧石器ブロッカー一覧表	52	表53 O-28区出土復原土器観察表	107
表12 擬似焼土一覧表	53	表54 J-27区出土復原土器観察表	107
表13 道跡一覧表	54	表55 P-21区出土復原土器観察表	107
表14 土器(破片)集中出土土器点数表	54	表56 N-28区出土復原土器観察表	107
表15 LFC-1出土土器点数表	54	表57 S-26区出土復原土器観察表	107
表16 LFC-1出土土器類点数表	54	表58 N-24区出土復原土器観察表	108
表17 SB出土土器類点数表	55	表59 J-20区出土復原土器観察表	108
表18 UPS-1出土復原土器観察表	56	表60 H-30区出土復原土器観察表	108
表19 LPS-1出土復原土器観察表	56	表61 N-25区出土復原土器観察表	108
表20 LFC-1出土剥片石器群観察表	56	表62 G-38区出土復原土器観察表	108
表21 SB出土旧石器群観察表(1)	57	表63 M-28区出土復原土器観察表	108
表22 SB出土旧石器群観察表(2)	57	表64 J-20区出土復原土器観察表	108
表23 SB出土旧石器群観察表(3)	57	表65 T-30区出土復原土器観察表	108
表24 包含層出土土器点数表	60	表66 L-29区出土復原土器観察表	109
表25 包含層出土土器類点数表	61	表67 包含層出土破片土器観察表	109・110
表26 N-28区出土復原土器観察表	104	表68 包含層出土土製品等観察表	110
表27 P-21区出土復原土器観察表	104	表69 包含層出土旧石器群観察表	111
表28 R-19区出土復原土器観察表	104	表70 包含層出土剥片石器群観察表	111
表29 P-27区出土復原土器観察表	104	表71 包含層出土磨製石器群観察表	111
表30 M-26区出土復原土器観察表	104	表72 包含層出土礫石器群観察表	111
表31 O-28区出土復原土器観察表	104	表73 包含層出土土製品観察表	111
表32 P-21区出土復原土器観察表	104	表74 岩石分類体系表	112
表33 S-18区出土復原土器観察表	104		
表34 N-28区出土復原土器観察表	105		
表35 P-27区出土復原土器観察表	105		
表36 P-29区出土復原土器観察表	105		
表37 Q-28区出土復原土器観察表	105		
表38 O-28区出土復原土器観察表	105		
表39 N-24区出土復原土器観察表	105		
表40 J-25区出土復原土器観察表	105		
表41 L-27区出土復原土器観察表	105		
表42 N-28区出土復原土器観察表	106		

目 次

自然科学的分析

「石器及び玉類の岩石学的分析(千歳市オリカ2遺跡)

報告書 平成20年3月 アースサイエンス株式会社

オリカ2遺跡分析試料一覧

表1-1 オリカ2遺跡出土の玉の内眼鑑定

表2-1 各元素の測定条件

表2-2 オリカ2遺跡出土の玉の全岩化学組成

表3-1 オリカ2-1の鉱物分析値

写真図版目次

カラー図版1	平成19年度調査状況（南西から） 平成20年度調査状況（北東から） Ⅲ層V群土器出土状況1（北から） Ⅲ層V群土器出土状況2（北から） S B-1 旧石器出土状況（北から） S B-2 旧石器出土状況（東から）	
カラー図版2	復原土器 旧石器	
Ⅵ章 自然科学的分析		
「石器及び玉類の岩石学的分析（千歳市オレイカ2 遺跡）報告書」平成20年3月	アースサイエンス社	
図1-1	オレイカ2 遺跡出土の玉 モノクロ図版	
図版1	平成19年度調査状況（南西から） 平成20年度調査状況（南東から） 平成19年度調査区完掘状況（西から） 平成20年度調査区完掘状況（北東から） 基本層序（U-21区 西北から）	
図版2	L P-1 土層断面（南西から） L P-1 完掘状況（南西から） L P-2 土層断面（南西から） L P-2 完掘状況（南西から） L P-3 土層断面（西から） L P-3 完掘状況（西から）	
図版3	L P-4 土層断面（西南から） L P-4 完掘状況（西から） T P-1 土層断面（南東から） T P-1 完掘状況（南東から） U P S-1（東から） L F C-1（南西から）	
図版4	S B-1（東から） S B-2（北東から） S B-3（北東から） 台石出土状況（北から） Ⅲ層上面の遺跡（西北から） 現代の遺跡（南東から）	
図版5	U P S-1 出土の復原土器 L P S-1 出土の復原土器 L F C-1 出土の石器類	
図版6	S B・包含層出土の旧石器群（削片・細石刃は1/1）	
図版7	N-28区出土の復原土器 P-21区出土の復原土器 R-19区出土の復原土器 P-27区出土の復原土器 M-26区出土の復原土器	
図版8	O-28区出土の復原土器 P-21区出土の復原土器	
図版9	S-18区出土の復原土器 N-28区出土の復原土器 P-27区出土の復原土器 P-29区出土の復原土器 Q-28区出土の復原土器 O-28区出土の復原土器 N-24区出土の復原土器 J-25区出土の復原土器 L-27区出土の復原土器	
図版10	N-28区出土の復原土器 P-29区出土の復原土器 L-28区出土の復原土器 O-25区出土の復原土器 O-27区出土の復原土器 P-19区出土の復原土器	
図版11	O-29区出土の復原土器 M-29区出土の復原土器 M-29区出土の復原土器 R-23区出土の復原土器 N-23区出土の復原土器 O-28区出土の復原土器	
図版12	J-27区出土の復原土器 P-21区出土の復原土器 L-29区出土の復原土器	
図版13	N-28区出土の復原土器 S-26区出土の復原土器 N-24区出土の復原土器 J-20区出土の復原土器 H-30区出土の復原土器	
図版14	N-25区出土の復原土器 G-38区出土の復原土器 M-28区出土の復原土器 J-20区出土の復原土器 T-30区出土の復原土器	
図版15	包含層出土の破片土器（1） 包含層出土の破片土器（2）	
図版16	包含層出土の破片土器（3） 包含層出土の破片土器（4）	
図版17	包含層出土の破片土器（5） 包含層出土の破片土器（6）	
図版18	包含層出土の破片土器（7） 包含層出土の土製品等	
図版19	包含層出土の旧石器群 包含層出土の剥片石器群（1）	
図版20	包含層出土の剥片石器群（2） 包含層出土の磨製・礫石器群（1）	
図版21	包含層出土の礫石器群（2）・石製	

I 章 緒 言

1 調査要項

事業名：一般国道337号線新千歳空港関連工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委託者：国土交通省北海道開発局札幌開発建設部

遺跡名：オリイカ2遺跡（北海道教育委員会登録番号 A-03-280）

平成19年度

所在地：千歳市中央395-64外，1196-6外

調査面積：4,200㎡

調査期間：平成19年4月1日～平成20年3月31日（現地調査5月17日～9月12日）

平成20年度

所在地：千歳市中央395-21・67・69・75～79・87・89・90・92

調査面積：3,220㎡

調査期間：平成20年4月1日～平成21年3月31日（現地調査8月20日～10月15日）

平成21年度

整理作業：平成21年4月1日～平成22年3月31日

2 調査体制

第1調査部長 越田 賢一郎

平成19年度発掘担当者 第3調査課長 三浦 正人

同 主 査 鎌田 望

平成20年度発掘担当者 第2調査課長 三浦 正人

同 主 任 末光 正卓

平成21年度整理作業 第2調査課長 三浦 正人

同 主 任 末光 正卓

3 調査の経緯

(1) 一般国道337号新千歳空港関連工事

この調査の原因である一般国道337号新千歳空港関連工事は、北海道開発局札幌開発建設部が実施している地域高規格道路「道央圏連絡道路」計画の一環である。道央圏連絡道路（一般国道337号）は道央都市圏の新しい交通・物流ルートとなる4車線道路で、新千歳空港を起点とし、北海道横断自動車道千歳東IC、北海道縦貫自動車道江別東IC、重要港湾石狩湾新港、北海道横断自動車道銭函ICを結ぶ延長約80kmの半環状道路である（図2）。市町村としては千歳市、長沼町、南幌町、江別市、当別町、札幌市、石狩市、小樽市を連結している。事業は新千歳空港関連・泉郷道路・長沼南幌道路・美原バイパス・美原道路・当別バイパスの6区間に分けられている。「新千歳空港関連」事業は新千歳空港と北海道横断自動車道千歳東ICを結ぶ9.2km区間で、平成元年度に事業化された。このうち新千歳空港から千歳市街地への2.5kmのほか、昭和55年度に事業化された当別バイパス（当別町～小樽市）23.8kmが平成15年度までに部分供用され、平成16年3月26日には石狩川を渡河する美原大橋を含む美原バイパス3.9kmが2車線で暫定供用されている。



図1 遺跡の位置 (新千歳空港関連工事道路用地内の遺跡)

平成2(1990)年12月札幌開発建設部は千歳市教育委員会を經由して北海道教育委員会(以下、道教委)あてに、国道337号根志越道路整備工事に伴う千歳市柏台から同市中央までの路線内における埋蔵文化財保護のための事前協議書を提出した。協議を受けた道教委は平成3年6月、路線内の遺跡所在確認調査を実施した。その結果、周知の祝梅川・祝梅川矢島・祝梅川山田・祝梅川上田・アンカリトー6・アンカリトー7・キウス13号周堤墓(のちのオルイカ1遺跡)・キウス5遺跡と未登載の仮称祝梅砂丘遺跡(のちの柏台1遺跡)・仮称キウス7・8・9・10遺跡の12箇所、対象面積299,000㎡、全計画路線の半分程度について範囲確認調査が必要と判断、同年7月道教委から札幌開発建設部へ回答された。

平成7(1995)年5月、事業名の変更等により、再度事前協議書が札幌開発建設部から道教委に提出された。ここで事業名が一般国道337号千歳市新千歳空港関連工事となり、事業地の面積約828,000㎡、工期は平成8年4月1日から平成12年12月15日、埋蔵文化財包蔵地保護については、現状保存は困難なため範囲確認調査(試掘)を希望する旨協議された。

当事業用地内で範囲確認調査(試掘)の結果、発掘調査が必要と判断された遺跡は、空港にほど近い柏台1遺跡、寿～祝梅地区の梅川4遺跡・祝梅川小野遺跡・梅川1遺跡・梅川2遺跡・祝梅川上田遺跡・アンカリトー9遺跡・アンカリトー7遺跡、中央地区のオルイカ1遺跡・オルイカ2遺跡・チブニー1遺跡・チブニー2遺跡・キウス9遺跡・キウス5遺跡の計14遺跡である。ここでは端緒となった柏台1遺跡と、当報告のオルイカ2遺跡を含む中央地区の遺跡の6遺跡の試掘と発掘調査を概観しておく。

(2) 柏台1遺跡とその後の試掘調査

平成7年11月と平成8年5月、道教委は当事業地内で初の範囲確認調査を千歳市柏台地区の仮称祝梅砂丘遺跡とした包蔵地で実施した。その結果、地表下約4mにある恵庭A降下軽石層(En-a)直下の風成堆積物中から、旧石器時代の遺物である黒曜石製剥片石器類が検出された。範囲や工法など遺跡の取り扱いについて協議が行われ、工事前の発掘調査を実施することとなった。柏台1遺跡として登載されたこの遺跡は、平成9(1997)・10年に(財)北海道埋蔵文化財センター(以下、センター)が越田賢一郎・福井淳一を担当者として6,300㎡の発掘調査を実施、En-a直下に広がる疎林樹木痕とEn-a下位の火山灰質シルト層から約32,000点の旧石器時代遺物を検出した。遺物は15ヶ所の集中域に分かれ、13ヶ所で炉跡、琥珀玉も1点確認できた。(北埋調報138集)

その後、用地買収の遅延などにより、事業地内の埋蔵文化財関係調査は途絶えていた。以降の中央地区の範囲確認調査は以下のとおりである(平成21年3月現在)。

- 平成12(2000)年6月 仮称チブニー川左岸遺跡(平成3年所在確認調査:仮称キウス8)実施。4,800㎡について調査必要と判断。チブニー1遺跡と呼称。
- 平成13年5月 チブニー川の右岸(平成3年所在確認調査:仮称キウス9)の一部実施。2,500㎡について調査必要と判断。チブニー2遺跡と呼称。
- 平成13年9月 キウス9遺跡(平成3年所在確認調査:仮称キウス10)南半部実施。
- 平成13年10月 キウス13号周堤墓と周辺を試掘。周堤墓とされていた部分は耕作等の削平による高まりの残存と判明したため、遺物の得られた範囲をもってオルイカ1遺跡と名称変更し、3,900㎡の調査必要区域を設定した。
- 平成13年9月・11月 オルイカ1遺跡の北東400mにある**オルイカ2遺跡**(平成3年所在確認調査:

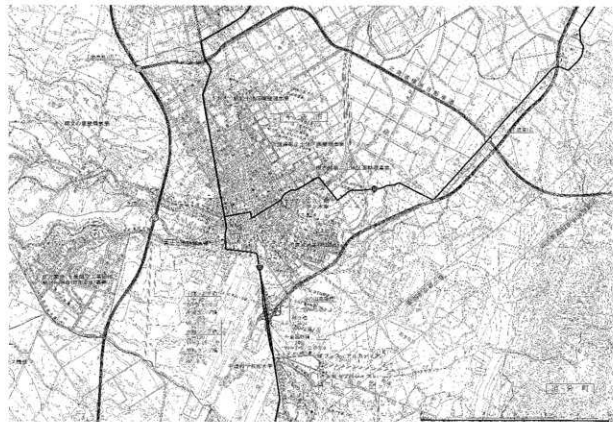
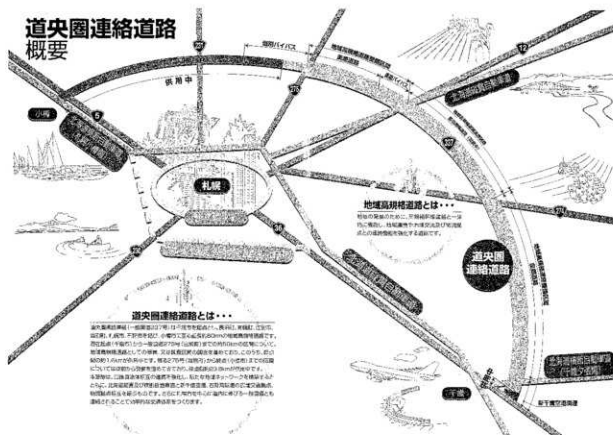


図2 道央圏連絡道路計画路線図(北海道開発局「道央圏連絡道路2002事業概要」より)

仮称キウス7)実施。9月は確認調査範囲の中央を通る市道祝梅第2道路の北側、11月は南側が対象。樽前c 降下軽石層より上位の焼骨片の多量検出と縄文期の土器石器から、アイヌ文化期の集落跡と縄文期の遺物包含地と目される約9,000㎡について調査が必要と判断。

- 平成14年6月 オルイカ1遺跡の現オルイカ川右岸確認調査未了地について実施。1,600㎡の調査必要範囲が確定。
- 平成14年7～8月・10月 キウス5遺跡で実施。旧河川部の低地と台地部を合わせた約15,000㎡の調査必要範囲が確定した。西側に試掘未了部分あり。
- 平成14年10月 チブニー2遺跡の北半部実施。
- 平成15年10月 チブニー2遺跡の確認調査未了地(市道協和中央線の両側)実施。遺物の出土等により遺構確認を含めて約15,000㎡の追加確定。
- 同 キウス9遺跡(平成3年所在確認調査:仮称キウス10)北半部(キウス川左岸部未了)実施。擦文期の堅穴と思われる凹みや擦文土器・縄文土器石器を確認。16,500㎡については調査が必要と判断。800㎡判断保留。
- 平成17年5月 キウス9遺跡北半部のうち未了であった7,700㎡実施。同上の結果を得、保留800㎡も含めて25,000㎡で発掘調査が必要と判断。
- 平成17年11月 **オルイカ2遺跡**と南長沼用水を挟んだ隣接地約13,000㎡のうち土地買収の済んだ約10,000㎡で実施。**オルイカ2遺跡**の延長として試掘未了区に調査対象が広がる可能性があり、判断保留。
- 平成18年10月 **オルイカ2遺跡**の試掘未了区約2,700㎡(未買収約450㎡含む)で実施。前年度の試掘調査と合わせて、調査必要な範囲約7,500㎡はほぼ確定。
- 平成19年10月 キウス5遺跡の西側部分、現国道337号に接続する試掘未了区約2,000㎡で実施。散漫な遺物包含層ではあるが、確定区域からの連続性で約1,200㎡が要発掘調査となった。14年度からの保留部分が解消され、キウス5遺跡の試掘も完了。

(3) 平成13年度以降の中央地区の発掘調査

以上の範囲確認調査から発掘調査が必要と判断された遺跡は、平成13年度から(財)北海道埋蔵文化財センターが、札幌開発建設部札幌新道建設事務所(平成16年度から千歳道路事務所)の工事計画に則って以下のごとく発掘調査を実施している(平成21年度現在)。

- ◇平成13年度 チブニー1遺跡 4,360㎡ 担当者:佐川俊一・笠原典 主に縄文後・晩期・擦文期・アイヌ期の土器・石器・鉄製品 報告書:北理調報173集
- ◇同 チブニー2遺跡 450㎡ 担当者:山中文雄 主に縄文晩期の遺物 報告書:北理調報173集
- ◇平成14年度 オルイカ1遺跡 5,460㎡ 担当者:佐川俊一・末光正卓 縄文後期の住居跡・後期晩期の土器石器・アイヌ期の平地住居跡など 報告書:北理調報188集
- ◇同 **オルイカ2遺跡** 3,230㎡ 担当者:和泉田毅・阿部明義 旧石器ブロック・縄文中期晩期の土器石器・アイヌ期の平地住居跡(集落)など 報告書:北理調報189集
- ◇平成15年度 オルイカ1遺跡 1,600㎡ 担当者:菊池慈人・末光正卓 主に縄文後期の遺物 報告書:北理調報206集
- ◇同 チブニー2遺跡 2,000㎡ 担当者:皆川洋一・広田良成 縄文中期の住居跡と遺物・擦文期の墓と鉄製品・アイヌ期の平地住居跡と鉄製品・青磁碗など 報告書:北理調報207集

- ◇同 キウス5遺跡 5,000m²(低地4,200m²・台地800m²) 担当者:三浦正人 縄文中期の住居跡と遺物・旧河道部で縄文期と近世の木製品・低位部に近世の畑跡 報告書:旧河道部と低位部は北埋調報251集・台地部は未報告、調査年報16参照
- ◇平成16年度 オルイカ2遺跡 6,500m²→5,500m²に変更 担当者:阿部明義・広田良成 旧石器ブロック・縄文中期晩期の土器石器・アイヌ期の平地住居跡(集落)など 報告書:北埋調報221集
- ◇同 チブニー2遺跡 14,700m²→13,400m²に変更 担当者:皆川洋一・菊池慈人・佐藤剛 縄文晩期・擦文期の墓・主に縄文晩期の遺物 報告書:北埋調報225集
- ◇同 キウス5遺跡 1,056m² 担当者:皆川洋一・菊池慈人 主に縄文晩期・擦文期の遺物 報告書:未報告、調査年報17参照
- ◇平成17年度 キウス9遺跡 17,000m²→17,044m²に変更 担当者:三浦正人・皆川洋一・菊池慈人・新家水奈・愛場和人・阿部明義・広田良成 石刃鏃70点・縄文早期前期晩期の遺構遺物・擦文期前期の住居と鍛冶遺構(集落)・アイヌ期の平地住居跡など 報告書:北埋調報252集
- ◇同 チブニー2遺跡 1,300m² 担当者:皆川洋一・菊池慈人 旧石器や縄文晩期の遺物など 報告書:北埋調報225集
- ◇平成18年度 キウス9遺跡 7,956m² 担当者:三浦正人・菊池慈人・愛場和人・袖岡淳子・末光正卓・広田良成 石刃鏃22点・縄文晩期および擦文期前期の遺物など 報告書:北埋調報252集
- ◇同 キウス5遺跡 3,200m²(低地1,280m²・台地1,920m²) 担当者:三浦正人・菊池慈人・愛場和人・袖岡淳子・末光正卓・広田良成 旧石器ブロック・縄文中期の遺構(住居・土坑・焼土列)遺物・擦文期前期の住居群・低位部に近世の畑跡・旧河道部で近世の木製品など 報告書:旧河道部と低位部は北埋調報251集・台地部は未報告、調査年報19参照
- ◇平成19年度 キウス5遺跡 6,100m² 担当者:三浦正人・愛場和人・末光正卓・広田良成 旧石器ブロック・縄文中期の遺構(住居・土坑・焼土列・杭穴)と遺物・擦文期の住居群 報告書:未報告、調査年報20参照
- ◇同 オルイカ2遺跡 4,200m² 担当者:三浦正人・鎌田望 縄文晩期の遺物 報告書:北埋調報267集(本報告書)
- ◇平成20年度 オルイカ2遺跡 3,220m² 担当者:三浦正人・末光正卓 旧石器ブロック・縄文晩期の遺物 報告書:北埋調報267集(本報告書)
- ◇同 キウス5遺跡 721m² 担当者:三浦正人・愛場和人 擦文期の住居群と遺物 報告書:未報告、調査年報21参照
- ◇平成21年度 キウス5遺跡 3,068m² 旧石器ブロック・縄文中期の遺構(住居・土坑・焼土列・杭穴)と遺物・擦文期の住居群と遺物を予想 担当者:三浦正人・越田雅司・愛場和人・広田良成 報告書:未報告、調査年報22参照

(4) オルイカ2遺跡の調査・報告の経緯

これらのうち、当報告のオルイカ2遺跡の調査に至る経緯について詳述する。オルイカ2遺跡は千歳市中央地区の南部に所在する(図1)。馬追丘陵南端部裾部を水源とし陸上自衛隊東千歳駐屯地内の緩斜面を開削し、南東から北西に向かって流れるオルイカ川の北側平坦部に広がる遺跡である。現国道337号が千歳市街方面から中央地区に向かって大きく左カーブを描くその東側に位置するため、当国

道建設工事の計画では、新国道の本線車道部分とともに市道祝梅第2道路（本線の側道及び現国道接続部分）整備工事が行われることになっており、また、南長沼用水と交差することから、用水上に架かる橋脚工事も計画されていた。

前掲した平成13年9月には確認調査範囲の中央を東西の走る市道の北側、11月には南側を対象として範囲確認調査が行われた。第1黒色土層からの多量の焼骨片の検出と、縄文期の土器石器から、アイヌ文化期の集落跡と縄文期の遺物包含地と目される約9,000㎡について調査が必要と判断された。この範囲は南長沼用水の南側の部分で、北側には遺跡名未定の用地未買収部分が範囲確認調査未了部約13,000㎡として残されていた。

札幌開発建設部は道教委に対し、工事の優先度から南西にあるオルイカ1遺跡約7,000㎡とオルイカ2遺跡の本線車道部分と市道祝梅第2道路との交差部分のカルバート工事予定地の600㎡を含む5,100㎡を、平成14年度に発掘調査するよう要望した。ただし、オルイカ1遺跡には範囲確認調査未了部があり、オルイカ2遺跡の進行には未定要素があった。

事業委託を受けた当センターは平成14年5月から発掘調査に取りかかった。まず優先度のより高いオルイカ1遺跡を調査体制全体で取り組み事態の進展を待った。しかし状況が打開できないまま6月上旬にはオルイカ2遺跡の調査準備を開始、24日には併行して調査を開始した。調査の進展につれ、予想より広い範囲でのアイヌ文化期平地住居の展開や旧石器の発見があり、14年度は結果的に調査面積3,230㎡とし、残りは次年度以降の扱いとなった。範囲中央部を調査したため、残りは南北に分断された形状になった。この14年度調査の報告は、平成15年3月に『千歳市オルイカ2遺跡 北埋調報189』として刊行した。

確定している調査範囲の残り5,500㎡は、工事工程上1年置いた平成16年度に調査する運びとなった。5月から10月の調査で、南長沼用水側では旧石器ブロックが、南側ではアイヌ文化期集落の続きが検出された。この16年度調査の報告は、平成17年12月に『千歳市オルイカ2遺跡（2） 北埋調報221』として刊行した。14・16年にわたる調査成果はアイヌ文化期集落では、平地住居跡9軒・建物跡5棟・焼土や灰集中62ヶ所・杭列4列などを検出し、金属製品91点・ガラス玉8点や錘石・漆器膜片・骨角器・炭化材・炭化種子・獣骨骨・貝殻などが伴った。縄文時代では中期の堅穴7軒や土坑27基・Tピット11基のほか焼土列や焼土群を検出し、早期6,296点・中期15,527点・晩期11,649点など早期～縄文期の土器36,701点を、石器類では定形的石器1,181点・玉類10点を含む65,355点発見した。旧石器時代では細石刃石器群（ブロック）4ヶ所を検出し、3,033点の石器を確認した。擦文期を除いた各時期に渡る資料豊かな調査となった。

平成17年度には南長沼用水を挟んで北側の用地買収が進み、11月に約10,000㎡を対象に範囲確認調査が行われた。樽前c降下軽石層の上下に縄文晩期の包含層が確認され、遺跡名はオルイカ2遺跡とすることとなった。未買収地（試掘未了区）との関係から約3,280㎡は要発掘調査、約2,540㎡は判断保留となった。

平成18年度には試掘未了区約2,700㎡（未買収地約450㎡を内部に包括）で範囲確認調査実施。希薄ながら一部で遺物包含層が確認され、判断保留からの転換も含め、要発掘調査は7,420㎡と確定した。

この確定を踏まえ札幌開発建設部は道教委に対し、平成20年度までの発掘調査終了を要請した。南長沼用水に架かる橋脚工事の優先度と北側の未買収地の存在から、南長沼用水側の4,200㎡（うち910㎡は第II黒色土層のみ対象）を平成19年度に、平成20年度に残りの3,220㎡の第II黒色土層を発掘調査することで合意。事業委託を受けた当センターは平成19年5月17日からの4ヶ月と平成20年8月20日からの2ヶ月間で発掘調査を遂行した。19年度後半から21年度で整理作業を進めて調査報告書（本書）

4 調査結果の概要

刊行の運びとなった。

この調査地区は平成14・16年の調査区と比較し、時期や内容に大きな差があり、同一遺跡の報告としての意味は薄い。別な遺跡と捉えるのが妥当かも知れない。

(三浦正人)

4 調査結果の概要 (図7・8 表1・2)

本報告における調査区は、平成19年度調査の南西側部分から平成20年度調査の北東側部分へ、Ⅲ層のみを調査する部分(860㎡)、Ⅲ～Ⅵ層を対象とする部分(2,430㎡)、Ⅴ～Ⅵ層のみを調査対象とする部分(910+3,220㎡)に区分けされる(図7)。南側は南長沼用水を挟んで平成14・16年度の調査区(A・B・C地区)で、北方向へ約650mに「チブニー1遺跡」(北埋調報173)がある。

確認された遺構は、土坑(LP)4基、Tピット(TP)1基、土器(破片)集中(PS)2ヶ所、フレイク・チップ集中(FC)1ヶ所、旧石器ブロック(SB)3ヶ所である。他に擬似焼土(UF・LF)46ヶ所、道跡2条を調査した。

遺物は、土器は17,822点出土した。Ⅲ層(黒色土層)からの出土が圧倒的に多く、縄文時代晩期後半のタンネトウ式である。他、Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ群が少量出土した。

石器類は出土総点数3,364点で、うち86点が旧石器である。彫器(BU)、細石刃(MB)、細石刃削片(MSP)、石刃(BL)、削器(SS)、搔器(ES)、円形搔器(RS)等がある。

剥片石器群は、石鏃、石槍・ナイフ、つまみ付きナイフ、スクレイパー等があり、多くが黒曜石製である。磨製石器群は磨製石斧、礫石器群は、たたき石、砥石、台石等がある。また、タルク岩(滑石)製の玉類も出土している。

(末光正卓)

表1 検出遺構一覧表

調査年度/遺構名	土坑		土器(破片)集中		フレイク・チップ集中 LFC	旧石器 ブロック SB	合計	擬似 焼土 F	道跡		合計
	P	TP	UPS	LPS					Ⅲ層上面	現代	
	2007(平成19)年度	4	1			1		6			46
2008(平成20)年度			1	1		3	5			1	6
合計	4	1	1	1	1	3	11	46	1	1	59

表2 遺物出土点数一覧表

調査年度/出土地点・遺物	遺構		包含層		合計	
	土器	石器類	土器	石器類	土器	石器類
2007(平成19)年度	3	2,537	17,518	643	17,521	3,180
2008(平成20)年度	150	55	151	129	301	184
合計	153	2,592	17,669	772	17,822	3,364
	2,745		18,441		21,186	

II章 遺跡の立地と周辺の遺跡

1 遺跡の立地と環境

(1) 位置と地名

オルイカ2遺跡は千歳市の市街地から北東約6km、中央地区の南部に位置し、現国道337号と新国道が最も近接する部分の馬追丘陵側に所在する。同時に調査を行っていたオルイカ1遺跡は南西約400mの距離にある(図1)。

遺跡名の「オルイカ」とは、『北海道蝦夷語地名解』(永田方正1891)によればアイヌ語の「Oruika」、「川尻ノ橋」の意であるとされ、また「ちとせ地名散歩」(長見義三 1976)では「オルイカ」を中央地区の原名とし「o-ruika 川口・橋」と解している。もともとは、「o-ru-ika:川尻・道・越える」であろう。地名由来のオルイカ川は、遺跡から東方約2kmの馬追丘陵の裾部を水源とし、陸上自衛隊東千歳駐屯地内の緩斜面を南及び西に開析し、丘陵端部から南東～北西に向かって流れている。その先は、明治29(1896)年発行の北海道製菓五万分之一図「長都」などによると、かつては現国道337号と交叉した後、国道と併行して北流し(現在の第十五号排水川)、丸子山の西側を流れ、チブエ(チブニ川)・キウシ(キウス川)などの流れを集め、イカベツ(イカベツ川)を通じてオサツト(長都沼)に注いでいた。前掲書で長見は、イカベツ川に注ぐところに丸木橋があったものと想像する。また、永田前掲書では、「オルイカ」項の直後に「ポロルイカ:大橋(本川)」「ポソノオルイカ:小橋(支川)」とあり、「オルイカ:川尻ノ橋」の下に「オルイカ川ハ「キウシ」川ヨリモ大ナリ」と注釈があることから、キウス川の合流部(小橋)とイカベツ川への合流部(大橋)に通路があったとみられる。イカベツ川は長都沼と馬追沼をつなぐ川で、千歳市と長沼町の境界となっており、古くは東蝦夷地と西蝦夷地の境であった。現在の道道のイカベツ川の橋は、その名残が国境橋と名付けられている。

地名「オルイカ」の初出は、松浦武四郎が安政3(1856)年の蝦夷地廻遊、安政4年の東西蝦夷山川地理取調御用の際に手控として残した「石狩・テシホ・クスリ外十二所川々取調帳」(『武四郎蝦夷地紀行』所収 秋葉実解説 1988 北海道出版企画センター)にある。長都沼(マサツトウ)に流入する多くの河川のうち千歳川(シコツブト)に並んで西からシユクハイ・アンカリトウ・ウリウカ・ユーナイとある。この「ウリウカ」が「オルイカ」川であろう(図3)。

安政4年の調査記録である「丁巳東西蝦夷山川地理取調日誌」(第十五巻由宇発利日誌巻の一)には、長都沼を舟で横断した際の記載がある。江別川(千歳川下流)から長都沼に入り東岸へ向かう途中に南にシコツブトを、東に「シユクハイトを眺め過ぎ」沼の北東隅に至った。「しばし掻行」して「アガリト ウエノタ 等蘆荻の生繁りたるノタ也。此間行ま、タン子エンルン 長く出たるのた也。此処を廻りてしばし行や マライトウ 周囲凡三里半余。是も(長都沼と)同じく水あさくして其周り蘆荻原也。東の方へはヲロイカツ並タケヌツ等云川口を…」とあり、馬追沼(マライトウ)に注ぐ川に「ヲロイカツ」が登場している。また「同」(第十六巻由宇発利日誌巻の二)には、六日後逆に馬追沼から千歳へ陸行で向かう様子の記載がある。「ユーナイ 此処ウリウカの左りの沢、(略)同じく榊原しばし行て八丁 ケ子ブチ(略)行こと三丁計にして ウリウカ 小川一ツ有、巾五六間、砂川にて浅し。こへて谷地を式丁計行て平地しばし行。此辺より惣て土地は低く赤楊・柳原のみ也。過て キユウシ 小川、巾三間計。過て谷地を五丁計行てまた木原少し過 タン子エンルン 此処木原の岬に成り居て、マライ沼え差出たる岬也。其上をこへ行に凡一里計にて アガリト 小川也。此川巾三間計、こへて同じく谷地を行。此川もシユクハイえ落るなり。(略)しばし行て シユクバイ 川



この図は、(上)松浦武二郎『石狩・テシホ・クスリ外十二所川々取調帳』

(『武蔵館新刊地誌』牧葉実解編 1988 北海道出版企画センター 所収)中の図

(下)同、『東西蝦夷山川地理取調 五』

(『アイヌ語地名資料集(河川) 東西蝦夷山川地理取調』1988 草風館 所収)の図を

部分複製したものである。

図3 松浦武二郎が描画したヲサツウ周辺河川図

端え出り。此川中十間計、末流シユクハイといえる少しの沼有り。其沼の口マヲイ沼え下るよし也。…」とある。「ウリウカ」という幅5～6間の小川がオルイカ川であろう。武四郎の様々な記述を読むと、当時は長都沼の北東の広がりか馬追沼と認識されていたようである。「ヲロイカツ」・「ウリウカ」と二つの表現があるが、オルイカ川は馬追沼に注いでいる表現であるから、いくつかの川名や地名の並びなどからみて二つは同じ川で、オルイカ川は南から沼の東縁を北上し、現在の千歳市泉郷あたりで長都沼に流入していたと推測できる。

前出の手控等を編輯した安政6年刊行の『東西蝦夷山川地理取調図 五』では、「ヲサツトウ」の北東の大きな入江が「マヲイトウ」、その南側で南東に湾入するのが「アンガリトウ」とされ、「ウリウカ」はマヲイトウとアンガリトウを分ける岬状の突出に名が書かれている。あるいは臨のアンガリトウに注ぐ小河川を示すのかもしれない(図3)。

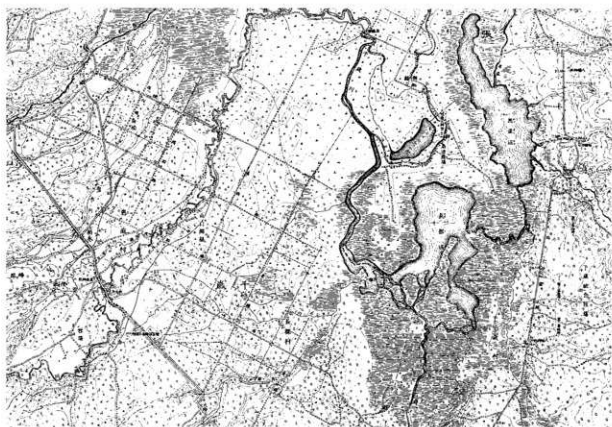
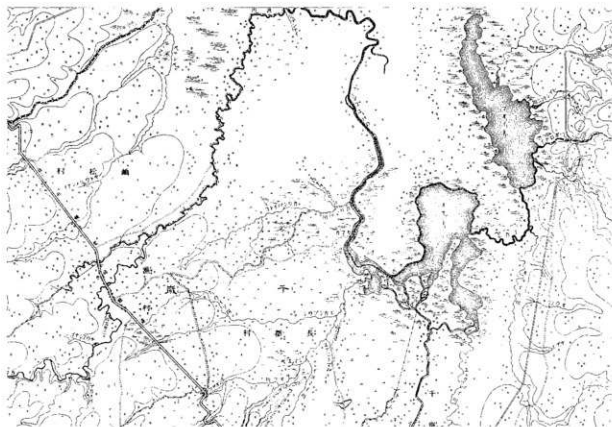
後の地図には、明治29(1896)年陸地測量部製版の「北海道製五万分一図」[長都]では長都沼の東に「オルイカ川」とある。明治43年改版の『漁』でも「ケヌフチ」の南西に「オルイカ川」とあり、その南約3.5kmに「オルイカ」と地区名として示されている(図4)。この地区名「オルイカ」は当遺跡の所在地域と重なるが、松浦武四郎の示した「ヲロイカツ」・「ウリウカ」は河川名が第一義なので、その川尻(川口)こそが「オルイカ」であったと思われる。同じ地名でも150年前とは距離にして約4kmの隔たりがあることがわかる。

(2) 周辺の地形・地質・環境

遺跡後背の馬追丘陵は、北から栗山町・長沼町・由仁町・千歳市・安平町(旧追分町と旧早來町)と、南北延長約30kmにおよんで隆起している標高150m前後の連なりで、273mの馬追山を最高地点とする。オルイカ2遺跡の北東方約3kmには標高約100mのコムカラ峠があり、峠の西北西下にキウス川の源流がある。キウス川——コムカラ峠のルートは、丘陵を横断して石狩低地帯と夕張方面や道東部を結ぶ道のひとつとして早くから開けていたようである。

一方、丘陵西側に広がる石狩低地帯は、支笏火山が形成した火砕岩台地によって千歳市南部を分水界とし、日本海側と太平洋側に分かたれている。このうち当遺跡が面する日本海側の南東部は、分水界近くまで低平で、遺跡付近から望める千歳市祝梅・根志越・中央・泉郷地区や恵庭市漁太地区、長沼町は、古くはトメ沼・長都沼(ヲサツトウ)や馬追沼(マヲイトウ)・ボンユーバリ沼・菱沼(イコクシ沼)・チカプセトシ沼・鶴沼などの沼があり、周辺には低湿地が広がっていた。蛇行の著しい千歳川・祝梅川・剣淵川(ケヌフチ川)・漁川・夕張川やそれらの小支流と馬追丘陵からの小河川も流入し、多雨や融雪期には広範囲で冠水する湛水地帯であった。オルイカ川もこの低湿地帯の東縁を集水して沼に向かう一支流である。往時は遺跡やコムカラ峠から西を眺めれば、低地帯手前には水を湛えた沼が広がり、遠くに樽前山・恵庭岳・漁岳・空沼岳・札幌岳・無意根山・手稲山など標高1000～1500m級の山々が連なる眺めであった。

オルイカ2遺跡の現地表面の標高は12～18mで、西へ向う緩斜面となっている。この緩斜面は基盤が数層のテフラ(火山灰)で覆われて形成されており、上部に幾分の土壌の発達が見られる。周辺の状況を見ると、まず32,000年ほど前の支笏カルデラ起源の降下軽石 Spfa2と Spfa1が堆積し、これらを軽石流堆積物 Spfa1の薄層と Spfa1の風成二次堆積物が覆っている。Spfa2はクッタラ火山起源の Kt-b 1とのみかたもある。この Spfa1の風成二次堆積物の中間ほどに、約28,000年前とされる羊蹄第3軽石・スコリア層 Yo.Ps-3が点在する。この上を厚さ1.5～2mと厚く覆うのが約13,000年前の恵庭岳起源の降下軽石 En-a (En-P)である。さらに直上にこの風化ローム層である En-L が20～30cm堆積している。



この図は、(上) 陸地測量部、明治 29 年製版の仮製五万分の一地形図、札幌第七号「長都」
(下) 同、明治 42 年部分修正測、43 年改版の仮製五万分の一地形図、札幌第七号「進」を
1/100,000 に縮小・部分複製したものである。

図 4 明治期の長都沼周辺地形図

この上は厚さ5～10cmの暗褐色粘質腐植土（漸移層）、5～15cmの黒色粘質腐植土（第II黒色土層）とあり、これをおよそ2,500年前の樽前山起源の降下岩片 Ta-c 1 が約10cm厚で覆っている。この上に10～15cmの黒色粘質腐植土（第I黒色土層）が発達する。この腐植土層中には10世紀前葉の白頭山起源の B-Tm の薄層が窪みなどに点在する。第I黒色土層を厚さ30～50cmで覆うのが1739年降下の Ta-a（樽前山起源の降下軽石）で約10枚のフォールユニットで成っている。

遺跡の南西～北西方面には、Spfa1の風成二次堆積物を母材とする内陸古砂丘である千歳古砂丘が砂丘列として存在する。後期旧石器以降の遺跡が立地し、後期旧石器でも古いものは丸子山遺跡のように砂丘下でも確認される。

道路用地になる以前には、北東側は宅地の周りに広葉樹林が広がっており、南西側は畑地および荒地・湿地になっていた。明治43年陸地測量部改版の「北海道製菓五万分一図」[漁]では、遺跡付近は闊葉樹林が広がり一部がオルイカ川河畔の湿地帯になっている様子が見られる。周辺の樹木は落葉広葉樹が主体で、未開墾部や川縁では林となっていた。コナラ・ヤチダモ・オニグルミ・クリ・ヤマグワ・コクワ・ホオノキ・タラノキ・ヤマブドウ・ヤナギなどがみられた。また千歳森林組合による植林で、マツやイチイ主体の人工林も広く分布する。『千歳市史』（1969）などによれば開拓前のオルイカ川流域は熊笹と大木の密林であったといい、現在でも当時を彷彿とさせる情景が中央八幡神社周辺に残っている。神社は明治30（1897）年に八幡宮手留伊賀（おるい）神社として建立された。調査中、林辺ではエゾリスやノネズミ・アオダイショウ・シマヘビなどが目視された。上空には常にトンビ・ノスリ・オオタカが飛翔旋回していた。オルイカ川では現在魚影等は確認できないが、低地帯の長都沼には、ワカサギ・フナ・コイ・エビなどが生息していた。また水鳥も多く、キジ・ガン・カモ・ハクチョウ・ツルなどが飛来生息していた。長都沼と連結する千歳川水系はサケの上る川で、ウグイなどの魚も大量に生息している。

千歳市の「中央」という地名は、昭和初期にも使用されていたようであるが、市域の中央であるという意味の「中の里」という原案（1984『千歳市農業協同組合史』）と、長都沼の東岸地帯の中央の意味（長見義三掲書）から、昭和26（1951）年に大字廃止字名改正で確定されたと考えられる。それ以前は、キウス・チブニー・オルイカという三字により中央地区が構成されていた。掲書『農協史』や『千歳市史』（1969）によれば中央地区の開拓は、明治22（1880）年着工、23年（24年？）竣工の千歳由仁道路（由仁街道）の開削に始まるという。この道路は幅2間・延長5里33町16間におよび、岩見沢千歳間道路の一部として敷設された。現在の国道337号線の前身である。大正5年頃にはオルイカ川や長都沼周辺が開墾され、漁場が設けられたという。

『郷土史ケヌフチ物語』（1992）によれば、中央地区を南北に縦貫する農業水利の南長沼用水は、明治45年に長沼村議会で建議書が議決され、大正11年南長沼土功組合が発足、同14年に着工し、千歳川蘭越頭首工からの幹線水路33,000mが竣工したのは昭和2（1927）年であった。用水は市道祝梅第2道路沿いに陸上自衛隊東千歳駐屯地の周縁を北上し、オルイカ2遺跡手前で一度地下にもぐる。そして遺跡内で再び地上に出てくる。つまり、オルイカ2遺跡は南長沼用水工事時に一部が破壊されていることになる。また同書によると、由仁街道は昭和11年、石狩東部における北海道第七師団と東北第八師団の対抗大演習の際、砂利敷きの道路に改修されたという。

前述した遺跡眼前の低湿地帯は、現在は、治水と土地改良等を目的とした昭和26～44年（1951～1969）の国営灌漑排水事業やその後の圃場整備事業・土地改良事業によって、沼や低地の干拓・埋め立て、河川や水路の整備・直線化が行われ、地下と表層の水位が低下し、水田や畑地として利用されている。現在のオルイカ川はこれらの事業により、現国道337号との交叉部付近（オルイカ1遺跡付近）から西

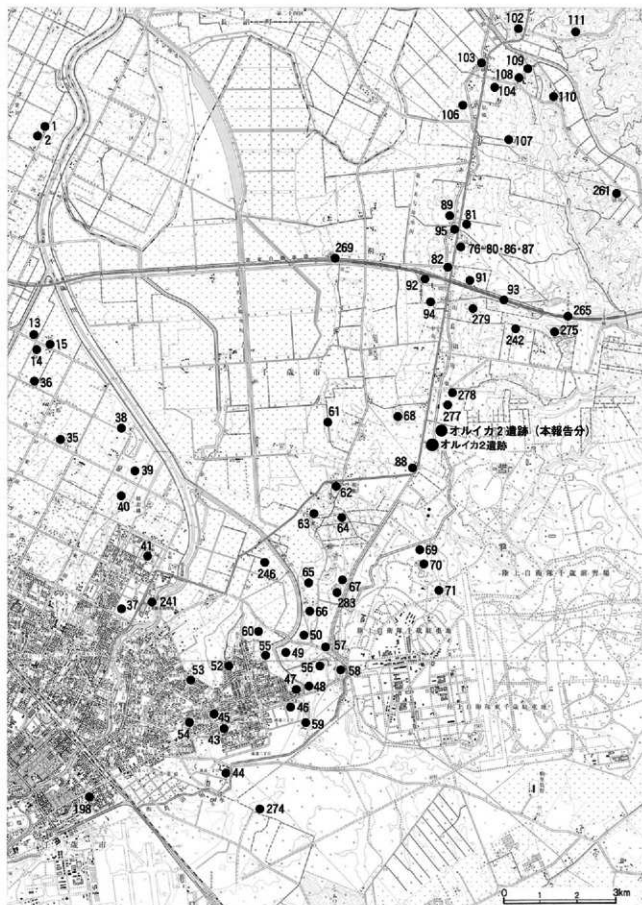


図5 周辺の遺跡

表3 周辺の遺跡一覧表

No.	遺跡名	種別	詳細	備考
1	カシノ	集落跡	縄文	未知のチャレンジに於ける南関東地域に広がる集落の一例であったという。【千歳遺跡】P116-124】
2	黒加のチャレンジ	チャレンジ	アイヌ文化	1965年大畑光夫、石川謙雄著【千歳遺跡】P116-124】(図録:参加)
13	オヤツ1	集落跡	縄文、アイヌ文化	保安区内166軒の集落。(図録:編纂)
14	オヤツ2	集落跡	旧石炭、縄文、弥生、アイヌ文化	1942-1994年追跡調査。1997-1998年千歳市教育委員会 縄文時代生活文化施設。縄文・弥生・縄文時代の生活文化施設。縄文・アイヌ文化の土壌・木製品。(図録:編纂)
15	オヤツ3	集落跡	縄文	保安区内166軒。集落1区。(図録:編纂)
26	鶴	遺跡発見地	縄文後期、アイヌ文化	チャントウ土器出土
28	鶴のチャレンジ	チャレンジ	アイヌ文化	1911年。1966年調査【千歳遺跡】P121-124】(図録:編纂)
37	水塚	集落跡	縄文中・後期、縄文、弥生、アイヌ文化	1966年石塚。1976年・1981・1984・1992年調査報告書。縄文中期-後期-縄文後期式住居跡、アイヌ文化 居住跡、縄文後期土壌層、埋蔵品。アイヌ文化期土坑墓、縄文後期の遺構 562。縄文後期土壌層と統合。(図録:編纂)編纂)
39	トメト田1	集落跡	縄文	縄文式住居跡
40	トメト田2	集落跡	縄文	縄文式住居跡
41	トメト田3	集落跡	縄文、アイヌ文化	2002年千歳市教育委員会。(図録:編纂)編纂)
42	藤原1	集落跡	縄文	縄文式住居跡
43	藤原上層	遺跡発見地	旧石器	かつて1961年発見されたが、現在は草花化されて遺構
44	藤原下層	遺跡発見地	旧石器	1972-1973年調査。縄文 藤原村生活文化センター
45	熊鷹三島山B	集落跡	縄文中・後期、縄文、弥生、アイヌ文化	1977年千歳市教育委員会 縄文後期式住居跡3軒
46	熊鷹川	集落跡	縄文後期、縄文、弥生、アイヌ文化	アイヌ文化期ワシントンゴビ出土
47	熊鷹川中野	遺跡発見地	縄文後・後期、縄文、弥生	チャントウ土器出土
48	熊鷹川小野	遺跡発見地	縄文後・後期	一部Eh-600号まで埋められている。2003年追跡調査センター調査
49	熊鷹川池田	遺跡発見地	縄文中・後期、縄文、弥生	1967年調査。1999年千歳市教育委員会 縄文式住居跡2軒
50	熊鷹川上層	遺跡発見地	弥生、アイヌ文化	2006-2008年追跡調査 アイヌ文化期住居跡-縄文式住居跡
52	メオシ田1	遺跡発見地	縄文中・後期、弥生	縄文。(図録:編纂)5
53	メオシ田2	集落跡	旧石器-縄文早期-縄文	1985年千歳市教育委員会 縄文式住居を含むブロッコはか
54	メオシ田3	集落跡	縄文	縄文式住居跡
55	牧野宮	集落跡	縄文、アイヌ文化	1973年石川謙雄著。縄文式住居跡4軒。鉄製品・土坑(土器遺構)出土
56	梅川1	遺跡発見地	縄文	縄文式住居跡
57	梅川2	遺跡発見地	縄文中・後期、縄文、アイヌ文化	2008年追跡調査 アイヌ文化期住居跡。(図録:編纂)
58	梅川3	遺跡発見地	縄文中・後期、縄文、アイヌ文化	1985年千歳市教育委員会 縄文式住居跡1軒。遺跡1区(アイヌ文化期土器含む)
59	梅川4	土坑墓群	縄文早期-後期、縄文、弥生、アイヌ文化	2009-2008年千歳市教育委員会 アイヌ文化期土坑墓・石塚群 2006-2008年追跡調査 縄文式住居跡2軒。(図録:編纂)
60	メムセ	集落跡	縄文	縄文式住居跡が1軒みられたという
61	アンカリト1	遺跡発見地	縄文後期	Eh-600号の上層部分まで埋められている
62	アンカリト2	集落跡	縄文後・後・後期、縄文、弥生	縄文式住居跡が1軒みられた
63	アンカリト3	土器	縄文後期、縄文、弥生	鉄製品出土
64	アンカリト4	遺跡発見地	縄文後期	縄文式住居跡
65	アンカリト5	集落跡	縄文中・後期、縄文、弥生	縦向き住居跡で9軒の集落跡の跡が観察される
66	アンカリト6	集落跡	縄文中・後期、縄文、弥生	縦向き住居跡で2軒、南に1軒の集落跡がみられる
67	アンカリト7	集落跡	縄文、弥生、アイヌ文化	2008年追跡調査 縄文式住居を含むブロッコアイヌ文化期住居跡1軒。土壌とEh-600
68	芋山	集落跡	旧石器、縄文	1980-1992年追跡調査報告書 縄文時代生活文化施設(ブロッコ)遺構群。縄文後・縄文式住居跡 古石器 縄文
69	K系墓群1	集落跡	縄文	南長沼本郷に集落跡がみられたという
70	K系墓群2	遺跡発見地	縄文後・後期、縄文	鉄製品が出土したという
71	ピロニクスタミア	集落跡	縄文	オホノボリ遺跡発見地 縄文式住居跡がみられたという
76	キウス1号墳跡±跡	回廊墓	縄文後期	1964年大畑光夫、石川謙雄著。牛久保遺跡。第1区。1979年追跡調査
77	キウス2号墳跡±跡	回廊墓	縄文後期	1965年大畑光夫、石川謙雄著。配石のある土坑墓。全長。1979年追跡調査
78	キウス3号墳跡±跡	回廊墓	縄文後期	1979年追跡調査
79	キウス4号墳跡±跡	回廊墓	縄文後期	1965年大畑光夫、石川謙雄著。西側に1区をもち、1979年追跡調査
80	キウス5号墳跡±跡	回廊墓	縄文後期	西側に1区をもち、1979年追跡調査
81	キウス6号墳跡±跡	回廊墓	縄文後期	1979年追跡調査
82	キウス7号墳跡±跡	回廊墓	縄文後期	1964年追跡調査。調査報告書
84	キウス8号墳跡±跡	回廊墓	縄文後期	全壊?1967年追跡調査記録簿により1968年春撤去済
85	キウス9号墳跡±跡	回廊墓	縄文後期	全壊?1967年追跡調査記録簿により1968年春撤去済
86	キウス10号墳跡±跡	回廊墓	縄文後期	記録簿等からみられる。1979年追跡調査
87	キウス11号墳跡±跡	回廊墓	縄文後期	2号。3号墳跡に隣接している墓跡がみられる。1979年追跡調査
88	キウス12号墳跡±跡	回廊墓	縄文後期	2002-2000年追跡調査(図録:キウス13号墳跡)
89	キウス1	集落跡	縄文中・後・後期、アイヌ文化	マラソン跡の遺構が2ヵ所あったという。1964年大畑光夫、石川謙雄著。住居1軒
90	キウス2	回廊墓	縄文後期	転写ミスによるツリマラー
91	キウス3	遺跡発見地	縄文	1967-1966-1968年追跡調査記録簿。1968年追跡調査報告書
92	キウス4	回廊墓、集落跡	縄文早期-中・後期、弥生、縄文	縄文早期-中・後期住居跡。埋蔵品。土器出土。本館遺構
93	キウス5	集落跡、墓 埋葬施設遺跡	縄文中・後期、縄文、弥生、アイヌ文化	1994-1996年追跡調査。1997年追跡調査報告書(調査報告:埋葬施設) 埋葬施設 土坑(土器) 埋蔵品 アイヌ文化期の遺構・木製品 2003-2004-2007-2008-2009年追跡調査記録簿(型別)住居跡のブロッコ、縄文式住居跡群、土坑群、土器出土、小柱穴、縄文後期、追跡調査
94	キウス田	遺跡発見地	縄文後期	縄文式住居跡
95	中央島	遺跡発見地	縄文後・後期	モウロ右石塚群
102	ケオアのチャレンジ	チャレンジ	アイヌ文化	1935年原田 昭。追跡調査報告書 熊鷹川内 縄文式
103	トシナイ1	遺跡発見地	アイヌ文化	縄文式住居跡
104	トシナイ2	遺跡発見地	縄文後・後期	縄文式住居跡
105	イカベツ1	遺跡発見地	縄文	縄文式
107	イカベツ2	遺跡発見地	縄文後・後・後期、縄文	縄文式、空焚式、チャントウ土器
108	カネフチ1	遺跡発見地	縄文早期	中石器式
109	カネフチ2	遺跡発見地	縄文後期	縄文式住居跡
110	カネフチ3	遺跡発見地	縄文後・後期	縄文式住居跡
111	カネフチ4	遺跡発見地	縄文中期	縄文式住居跡
108	マヤ川丸木舟	遺跡発見地	アイヌ文化	丸木舟(長さ約7.3m、幅約0.5m)
241	藤原1	集落跡	縄文	丸木舟(長さ約7m、幅約0.6m)
242	キウス6	遺跡発見地	縄文後期	縄文式住居跡
243	アンカリト8	遺跡発見地	縄文後期	チャントウ土器
244	キウス7	集落跡	縄文後期、弥生	コブクロ式、空焚式、縄文式、縄文式住居跡1軒
245	キウス7	集落跡	旧石器、縄文、中・後・後期、縄文、弥生、アイヌ文化	1960-1968年追跡調査報告書 縄文式住居跡、縄文、後期-縄文式住居跡、縄文、後期-縄文式住居跡ほか
246	キウス7-1	遺跡発見地、墓	縄文早期-中・後・後期、アイヌ文化	1960年追跡調査報告書 アイヌ文化期土坑墓1区
247	キウス7-2	遺跡発見地	旧石器	1997-1998年追跡調査報告書 縄文式住居を含む住居群、中石器-コブクロ式、赤色顔料関連遺構
275	キウス8	遺跡発見地	縄文中・後期	一帯調査
276	トアニー1	遺跡発見地	縄文後・後期、縄文、アイヌ文化	2003年追跡調査報告書 土坑、下ビッコ、アイヌ文化期土器、集石
277	トアニー2	遺跡発見地	縄文後・後期、縄文、アイヌ文化	2001-2003-2005年追跡調査 縄文式住居跡、土坑墓、アイヌ文化期住居跡、青銅器、鉄器
278	キウス9	遺跡発見地	縄文早期-後・後期、縄文、アイヌ文化	2003-2006年追跡調査報告書 縄文式住居跡、石塚群
283	アンカリト9	遺跡発見地	旧石器、縄文、後・後期	2008年追跡調査報告書 古石器 旧石器 縄文後期 縄文後期 縄文後期

方の第十四号排水川に向かって流れており、かつての自然流路の位置とはかけ離れた流路となっている。

(三浦正人)

2 周辺の遺跡

平成21年度現在、千歳市内には285ヶ所の遺跡が登録されている。この市域は、新千歳空港建設工事、北海道横断自動車道建設工事、国道337号建設工事等の開発が多く、これらの工事用地内に存在する遺跡について、緊急発掘調査が数多く行われている。

本遺跡の周辺に位置する遺跡について、位置図(図5)及び一覧表(表3)をもとに、緊急発掘調査が行なわれた周辺の遺跡を中心に、時代ごとにその概要を記述する。なお、位置図・表・本文中の丸括弧内の数字は、北海道教育委員会登録番号(A-03-番号)である。

旧石器時代

古砂丘に立地する丸子山遺跡(68)では恵庭a降下軽石層の上下から遺物が出土している。下層は約2万年前と推定され、黒曜石製のスクレイパーの他は定型的なものに乏しい。上層は忍路子型細石刃核を伴う石器群である。祝梅川上田遺跡(50)ではブロックが5ヶ所検出され、湧別技法・峠下技法・忍路子型の細石刃剥離技法の細石刃石器群や細石刃核(平成20年度調査分は未報告)。キウス9遺跡(279)では少量ながら広野型細石刃核を伴うブロックが確認されている。またキウス5遺跡(93)の平成18・19・21年度調査区(未報告)および北海道横断自動車道用地内のC地区・キウス7遺跡(265)・アンカリトー7遺跡(67)でも細石刃石器群が出土している。

縄文時代

早期:北海道横断自動車道用地内のキウス5遺跡からは、晩式土器や東釧路Ⅲ式・コッタロ式期の竪穴式住居跡が検出され、貝殻条痕文土器やこの時期の遺物が多数出土している。キウス7遺跡からもコッタロ式期の竪穴式住居跡と土坑墓がみついている。キウス4遺跡(92)では東釧路Ⅲ～Ⅳ式期の竪穴式住居跡が検出されている。また、キウス4遺跡・キウス5遺跡の平成18年度調査区・キウス9遺跡からは、石刃鏃が出土しており、キウス9遺跡では92点と比較的まとまった点数が包含層から出土している。

前期:網文式期の竪穴式住居跡が、キウス4遺跡の低位段丘面とキウス5遺跡で検出されている。また、キウス4遺跡では花積下層式・静内中野式期の土器が出土している。

中期:オリイカ2遺跡(280)A・B・C地区では、天神山式期の竪穴式住居跡がみついている。キウス5遺跡(平成18・19・21年度調査区 未報告)では萩ヶ岡式・柏木川式期の竪穴式住居跡・土坑・焼土列・小杭穴列が多数みついている。

後期:余市式・タブロブ式期の竪穴式住居跡や土坑が、キウス4遺跡・キウス5遺跡A地区・キウス7遺跡・オリイカ1遺跡(88)等で確認されている。手稲式・ホッケマ式期は、キウス5遺跡A地区・キウス7遺跡で竪穴式住居跡や埋甕等が検出されている。堂林式期は、キウス4遺跡で周堤墓が多数確認されており、近くには国指定史跡のキウス周堤墓群がある。キウス4遺跡では同時期の住居跡・掘立柱建物跡・盛土遺構・道跡・水場遺構等が確認され、大量の遺物が出土している。

晩期:キウス5遺跡A地区・キウス7遺跡・梅川4遺跡(59)でタンネトウL式期の土坑墓が多数確認されている。

続縄文時代

キウス5遺跡とキウス7遺跡で、大舟部式期の竪穴式住居跡や後北C、D式期の土坑が検出されている。

擦文文化期

末広遺跡(37)では100軒以上の竪穴式住居跡・鍛冶遺構・土坑が検出されている。丸子山遺跡において8世紀頃と推測される集落跡が確認されている。キウス9遺跡では、8世紀後半の集落跡と鍛冶遺構が確認されている。キウス5遺跡(平成18・19・20・21年度調査区 未報告)では、対岸のキウス9遺跡とほぼ同時期の竪穴式住居跡が数軒検出されており、A地区では鋳先を伴う可能性のある土坑墓が検出された。このほか、祝梅の遺跡群(46~55)、梅川の遺跡群(56~59)、トメト川の遺跡群(38~40)、アンカリトーの遺跡群(62~67)等、この時期の遺跡は多い。

アイヌ文化期

オリイカ2遺跡A・B・C地区・キウス9遺跡・アンカリトー7遺跡・チブニー2遺跡(278)・祝梅川上田遺跡・梅川2遺跡(57)・梅川4遺跡等で平地式住居跡や建物跡等が検出されている。祝梅川上田遺跡では中世末~近世初頭頃の50軒を超える平地式建物跡が調査されている(平成20年度調査分は未報告)。キウス5遺跡では太刀が副葬された土坑墓がみついている。キウス7遺跡では遺跡や柱跡群が検出され、ガラス玉等も出土している。また、キウス5遺跡低位部では、畑跡が確認されている。

近現代

アンカリトー9遺跡(283)では、旧日本軍千歳海軍航空隊の施設(昭和14年~20年)と考えられる掩体壕が調査され、キウス4遺跡・キウス5遺跡等では炭窯跡がみついている。

(末光正卓)

Ⅲ章 調査の方法

1 調査の方法

(1) グリッドの設定 (図6)

平成14・16年度調査区(A・B・C地区)は、平成14年度に調査されたオルイカ1遺跡(北埋調報188)に設定したグリッドを延長させて設けたものであるため、平成19・20年度の調査では、建設予定道路のセンターライン上の点「SP8700」と「SP8800」を基準にグリッドを設定し直した。

両者を直線で結んだ「基軸線」を設けMラインとし、「SP8700」でMラインと直交する線を20ラインとした。Mラインと東西方向に平行する線を4mごとに設定し、D～Vのラインを設けた、同様に20ラインと南北方向に平行して4mごとに区切り、アラビア数字で表記した。南西側から北東側へと数値が大きくなる。

以上の手順で、調査区全体に4m四方の「グリッド」を割り付けた。各グリッドはアルファベットのラインと数字のラインの交点を四つ有し、各交点の表記は、そのアルファベットと数字をハイフンでつないだ記号とした。この交点のうち「西側の交点」の表記をそのグリッドの名称と定めた。

従って、平成14・16年度調査区のグリッドとは一致しない。その他、測量基準杭のデータを表4にまとめた。なお、基軸線は真北より $28^{\circ}55'18''$ 東偏する。

(2) 発掘調査の方法

本遺跡は、図7 ①～⑧)に示すように区分けされる。以下その内容を記述する。

①は平成14年度調査区(北埋調報189)、②・③は平成17年度調査区(北埋調報221)で、④は道教委

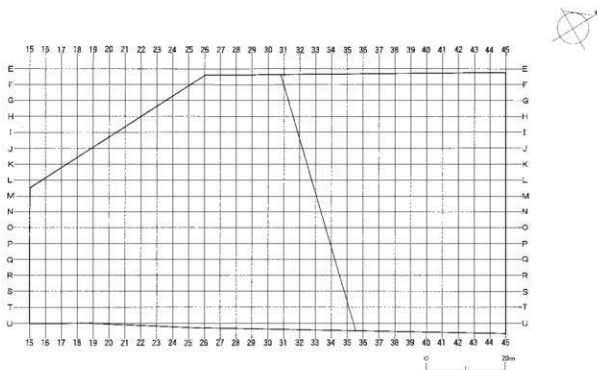


図6 グリッド設定図

表4 測量基準杭一覧表

杭名等	グリッド杭等	世界測地系			
		平面直角座標 (X II 座標系)		地理座標	
		X (m)	Y (m)	北緯	東経
S P 8700	M-20杭	-126186.326	-43943.422	42° 51' 46"	141° 42' 43"
S P 8800	M-45杭	-126098.970	-43894.772	42° 51' 49"	141° 42' 46"
杭名等	グリッド杭等	日本測地系			
		平面直角座標 (X II 座標系)		地理座標	
		X (m)	Y (m)	北緯	東経
S P 8700	M-20杭	-126449.813	-43646.752	42° 51' 37"	141° 42' 57"
S P 8800	M-45杭	-126362.456	-43588.102	42° 51' 40"	141° 42' 59"
杭名等	種類	標高 (m)	備考		
一等水準点7321	一等水準点	14.7010	(与点) 千歳市中央1064番地6		
H 5-304	三級基準点	17.130	既設		
H19N O.1	三級基準点	16.127	H19年度新設		
H19N O.2	三級基準点	18.009	H19年度新設		
H20T 1	三級基準点	16.378	H20年度新設		
H20T 2	三級基準点	17.866	H20年度新設		
H20T 3	三級基準点	16.465	H20年度新設		

による範囲確認調査や⑤の調査の結果、発掘調査不要となった部分である。

本報告書で記載するのは⑤～⑧である。平成19年度調査区は⑤・⑥・⑦で、⑤はⅢ層のみ調査、⑥はⅢ～Ⅴ層の調査、⑦はⅤ・Ⅵ層のみ調査部分である。平成20年度調査区は⑧でⅤ・Ⅵ層のみ調査部分である。

建設機械による表土除去作業は、平成19年度は⑤・⑥はⅠ層・Ⅱ層、⑦についてはⅢ・Ⅳ層まで除去し、前者はⅢ層上面、後者はⅤ層上面を露出させた。平成20年度は⑦同様にⅤ層上面までを除去した。

その後、グリッド杭を設置し人力による調査を開始した。露出面を清掃し、遺跡全体の内容を調査の早い段階で把握することを目的とする「25%調査」を行い、遺構の有無・遺物の出土点数を確認しながら調査を展開した。

包含層調査は、移植ゴテ等を用い数cmずつ掘り下げ遺構や遺物の存在を確認しながら行った。地形測量図は進行状況に合わせて作成した。Ⅲ層上面地形測量図は、南西側から30ラインまでの部分を作成し(図9)、Ⅴ・Ⅵ層上面地形測量図は調査区全体について作成した(図8・10)。

遺構は確認された順に番号を付し調査した。なお、この番号は先に報告した二冊の報告書(北埋調報189・221)の遺構番号とは連番とせず、別に付した。旧石器ブロックが存在するグリッド付近はⅥ2層まで掘り下げ、旧石器の有無について確認調査を行った。

(3) 一次整理の方法

一次整理は、平成19年度は現地で行い、平成20年度は現地では水洗までを完了させ現場作業終了後の11月から整理作業所で行った。

遺物の一次整理は次のように行った。

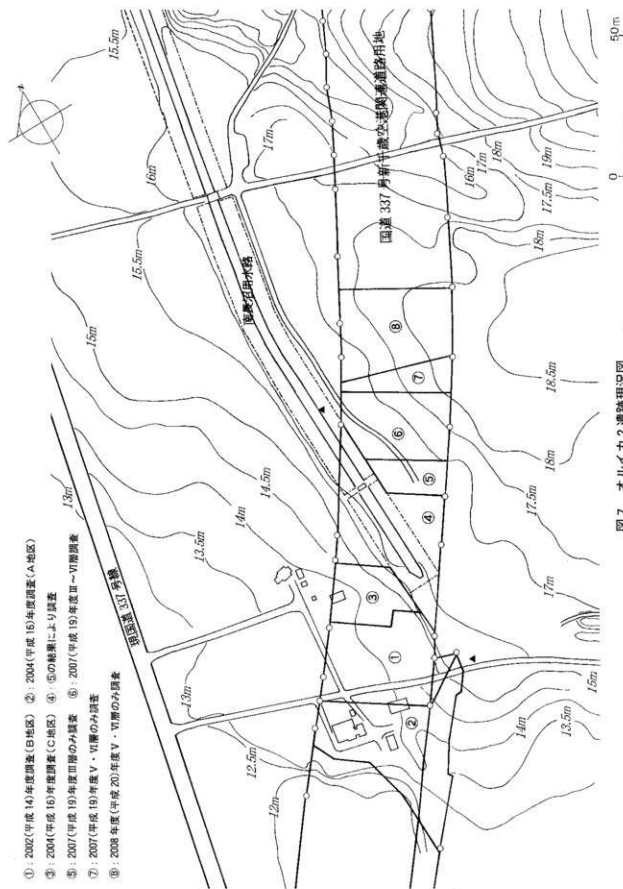


図7 オルイカ2運動状況図

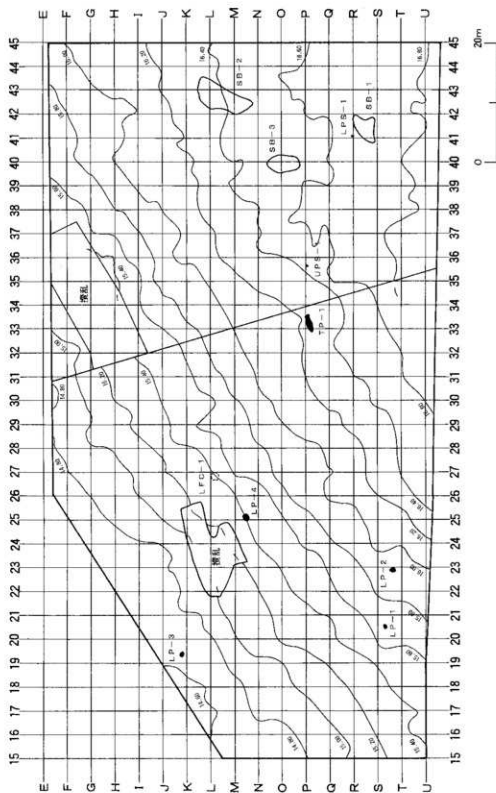


図 8 遺構位置図及び瓦層上面地形測量図

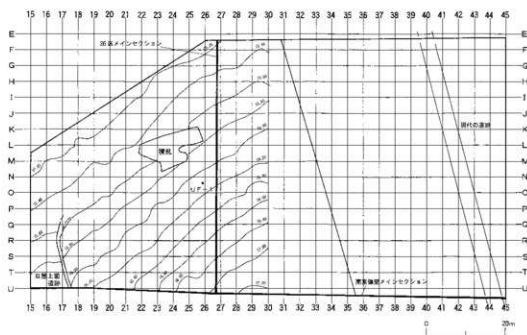


図9 Ⅲ層上面地形測量図及び擬似焼土UF-1・道跡・土層断面図作成図位置図

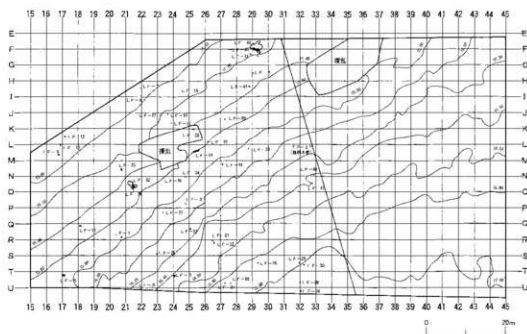


図10 V層上面地形測量図及び擬似焼土・TP-2位置図

遺物の取り上げは「遺跡名・出土地点（遺構名・グリッド）・層位・遺物種別・遺物番号（出土位置記録のもの）・取り上げ日」の情報をビニール袋に記し、これに出土遺物を収納し取り上げた。袋ごとに「水洗台帳」に登録し一次整理作業の流れを管理した。遺物は「水洗」・「乾燥」・「分類」といった作業を日付順に進めた。分類は本章4節の「遺物分類基準」・表74の「岩石分類体系表」に基づいて行った。次に、出土地点・層位・遺物名等の遺物個別の情報を記録した「遺物カード」を作成し、遺物とともにチェック付ビニール袋に収納した。これら個々の遺物は、出土地点あるいは遺物種別ごとにコンテナに仮収納した。また、遺物カードの記載事項をまとめた一覧表を作成した。この表は手書きで作成していったものを、パソコンを用いExcel文書にした（「遺物登録台帳」）。

土器は接合作業のため、遺物カードの情報の一部を直接遺物に注記した。注記の内容は「オ2（オルイカ2遺跡の略号）・出土地点・層位・遺物番号」である。原則的にはすべてを注記の対象としたが、小破片等の記入スペースが無いものは行っていない。なお、遺物番号は、平成19年度はすべての遺物に付し、平成20年度は出土地点を計測した遺物についてのみ付した。

2 基本層序

土層の観察は『土壌調査ハンドブック』（ペドロジスト懇談会 1984）・『新版標準土色帖』（小山・竹原 1967）を参考に必要な観察項目を設け行った。

基本層序は「基本層序柱状図」（図11）及び「基本層序一覧表」（表5）にまとめた。

【Ⅰ層：現地表土等】

地表土や攪乱、現代の遺跡の覆土である。T a - a を含む部分は攪乱されている。

【Ⅱ層：樽前 a 降下軽石層（T a - a）】

1739年に噴出した樽前山の火山噴出物から構成される層で、粒径の違いからフォールユニットとして大きく三つに分けられる（A～C群）。A群は層も厚く粗粒、B・C群は細粒で火山灰・砂が主である。

【Ⅲ層：黒色土層（第Ⅰ黒色土層）】

縄文時代及び縄文時代晩期の遺物が出土している。下位部分はT a - c 軽石・スコリアの混入がみられる部分がある。

【Ⅳ層：樽前 c 降下軽石・スコリア層（T a - c）】

縄文時代晩期後半頃（2,550±50y B. P. 北理調報134）に降下した樽前山の火山噴出物（軽石・スコリア）から構成される層である。Ⅱ層とは対照的で、粒径のまとまりはなく粗粒でランダムにみられる。にぶい黄褐色を呈する層をⅣ1層、下位のⅣ層と混じるものをⅣ2層とし色調の違いで分層した。

【Ⅴ層：黒色土層（第Ⅱ黒色土層）】

縄文時代晩期以前の遺物を包含する層である。上位のT a - c 軽石が混入する部分をⅤ1層とし、これの混ざらない下位部分をⅤ2層とした。Ⅴ層と表記しているものは通常Ⅴ2層を示す。

【Ⅵ層：漸移層】

上位の黒色土層と下位のⅦ層の間に位置し色調等の漸变的な変化がみられる。

【Ⅶ層：黄褐色風化ローム層】

いわゆる「恵庭のローム層」と呼ばれているもので、上位部分をⅦ1層とし、下位部分はE n - a 軽石の含有量が多く、硬く締まるのでⅦ2層と分層した。前者がいわゆる「ソフトローム」、後者が「ハードローム」である。Ⅶ層と表記したものは通常Ⅶ1層を示す。

【Ⅷ層：恵庭 a 降下軽石で構成される層（E n - a）】

約12,000～17,000年前に降下した恵庭岳の火山噴出物（軽石）から構成される層である。

オリイカ2遺跡基本層序

I	層	・現地表土
II	A群	火山礫(軽石)主体 樽前 a 火山砂～火山灰主体 降下 軽石層
	B群	
	C群	
層	層	・火山砂主体
III	層	・黒色土層 (遺物包含層)
IV 1	層	・樽前 c 降下軽石・スコリア層
IV 2	層	
V 1	層	・黒色土層 (遺物包含層)
V 2	層	
VI	層	・漸移層 (遺物包含層)
VII 1	層	・黄褐色風化ローム層
VII 2	層	・軽石混じり黄褐色風化ローム層
VIII	層	・恵庭 a 降下軽石層

—————	：	画	然
—————	：	明	瞭
- - - - -	：	判	然
.....	：	漸	変

図11 基本層序柱状図

表5 基本層序一覧表

層名	名称	層厚 (m)	層序	砂・シルト・粘土				礫 (長径 2mm以上)				備考		
				野外土性	色調 マンセル表色系	粘着性	堅密度	種類	混入割合 面積割合	粒径 (mm)	形状		風化の 程度	
I層	埋地黄土	平均: 5	自然	砂状土	黒色 (10YR2/2)他	中	堅	Ta-a 軽石	50%以上	平均: 2 最大: 4	角~亜角礫	未風化	遺跡の主体的覆土 上に砂礫の混じる部分あり	
II層	A群	平均: 15	自然	砂 + 粘土	[火山礫主体 火山砂 + 火山礫主体 火山砂主体 + 火山砂主体]	*	*	Ta-a 軽石	(少量)	平均: 30	角~亜角礫	未風化	粗粒 [Ta-a]	
	B群	平均: 8	自然							最大: 10	角~亜角礫	未風化		細粒
	C群	平均: 8	自然							無		中粒		
III層	黒色土層	平均: 10	明瞭~自然	壤土	黒褐色 (10YR2/2)他	強	堅	Ta-c 軽石・ スコリア	20%	平均: 2 最大: 4	亜角礫	未風化	第I黒色土層	
IV層	M1層	平均: 8	明瞭	砂土~砂状土	に濃い黄褐色 (10YR5/2)	弱	堅	Ta-c 軽石・ スコリア	90%以上	平均: 3	亜角~ 亜角礫	半風化	[Ta-c]	
	N2層	平均: 8	自然							黒褐色 (10YR2/2)他	平均: 3 最大: 5			亜角~ 亜角礫
V層	V1層	平均: 10	明瞭~自然	壤土~砂状土	黒色 (10YR2/1)他	強	堅	Ta-c 軽石・ スコリア	15%	平均: 2 最大: 3	亜角~ 亜角礫	半風化	第II黒色土層	
	V2層	平均: 10	漸変	壤土	無									
VI層	薄砂層	平均: 16	漸変	壤土~短状土	黄褐色 (10YR4/4)他	軟~堅	堅	En-a 軽石	4%	平均: 5 最大: 8	亜角礫	風化		
VII層	VI1層	平均: 8	自然~漸変	壤土~短状土	明黄褐色 (10YR5/6)他	強	堅	En-a 軽石	5~30%	平均: 7	亜角~ 亜角礫	風化	[意匠のローム層]	
	VI2層	*	自然	壤土	中	堅	En-a 軽石	40%	平均: 8 最大: 12	亜角礫				
VIII層	意匠a層下 軽石層	*	*	砂土	黄褐色 (7.5YR7/8)	なし	やぶら しう	En-a 軽石	90%以上	最大: 100 平均: 20	最大~ 角礫	風化	[En-a]	

表6 現代の道跡土層一覧表

調査区東44~45付近												
層名	名称	層序	砂・シルト・粘土				礫 (長径 2mm以上)				備考	
			野外土性	色調 マンセル表色系	粘着性	堅密度	種類	混入割合 面積割合	粒径 (mm)	形状		風化の 程度
1	道跡埋土	自然	砂~砂状土	黒褐色 (10YR2/2)	なし	すこぶる堅	Ta-a 軽石	90%以上	平均: 10 最大: 30	角~亜角礫	未風化	I層埋地表土とII層の混じる層
2	WB1層	自然	II層 (IIA層・IIC層) 主体の二次堆積層で、I層が混じる層								II層 中~細粒	
3	IIA+心層	自然	火山礫主体 火山砂	*	*	*	Ta-a 軽石	(主体)	平均: 30	角~亜角礫	未風化	IIA層に炭化物が50%程度混じる層
4	WB2層	自然	II層 (IIA層・IIC層) 主体の二次堆積層で、I層の混じりがWB1層より少ない層								II層 中~細粒	
IIIa	II層の二次堆積層											
Va	V層の二次堆積層											
IIIb	III層主体 土層	明瞭	壤土~短状土	黒色 (10YR1/1)	強~中	堅~ すこぶる堅	Ta-a 軽石	20%	平均: 10 最大: 20	角~亜角礫	未風化	44~43付近

調査区西49~40付近												
層名	名称	層序	砂・シルト・粘土				礫 (長径 2mm以上)				備考	
			野外土性	色調 マンセル表色系	粘着性	堅密度	種類	混入割合 面積割合	粒径 (mm)	形状		風化の 程度
1	道跡埋土	自然	砂~砂状土	黒褐色 (10YR2/2)	なし	すこぶる堅	Ta-a 軽石	90%以上	平均: 10 最大: 30	角~亜角礫	未風化	I層埋地表土とII層の混じる層
2	BB層	自然	I層中に、III・V・IIV層のブロックを含む層									

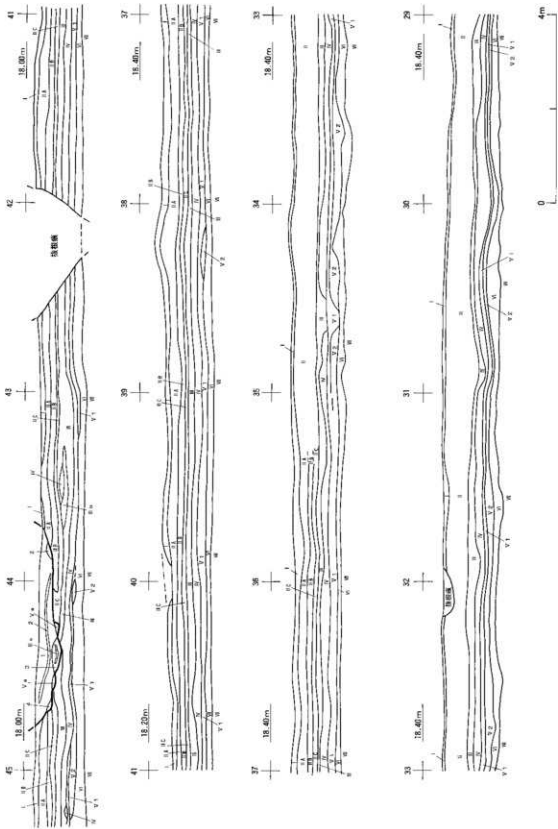


図12 メインセクション (調査区東側壁45~29) (1)

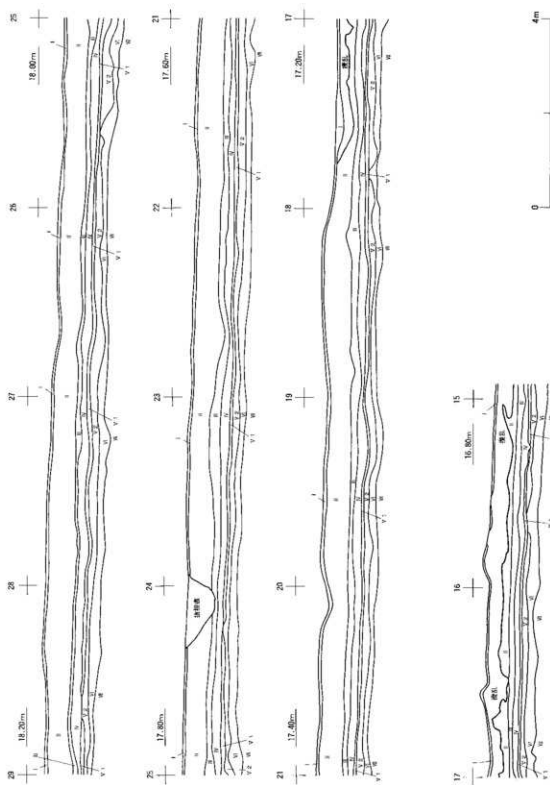


図13 メインセクション (調査区東側壁29~15) (2)

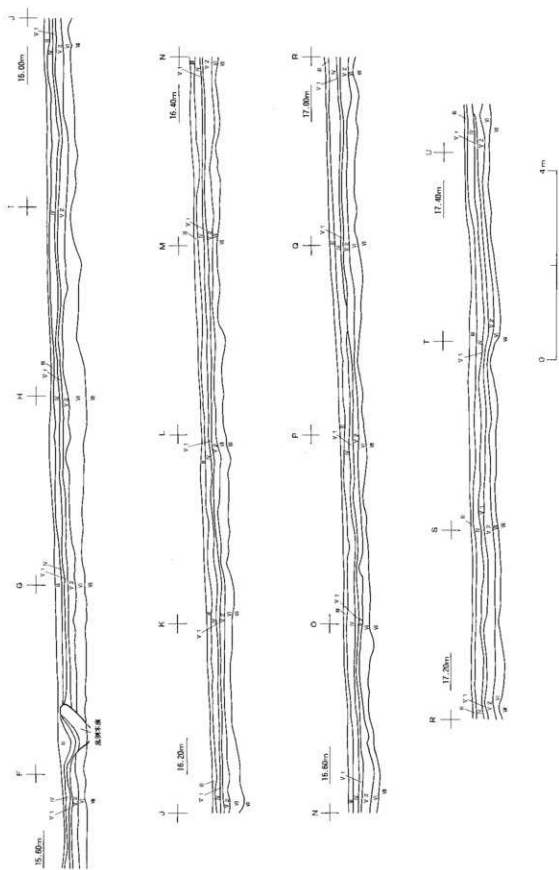


図14 メインセクション (26区) (3)

*土層断面図の説明

土層断面図は調査区の南東側壁（「東壁」と呼称）と、26区内の27ライン付近の北西～南東方向に設定したベルトの南面を実測した。風倒木痕が多く認められたが省略して記載した。

・調査区東側壁（図12・13 表6 図版1）

15～18ライン付近はⅡ層まで攪乱が及んでいる。また、43～45ライン付近には「現代の道跡」があり図示した。覆土は現地表土とⅡ層が主体であり、Ⅰ～Ⅲ層まで切られている。

・26区内27ライン付近ベルト（図14）

概ね整然とした層序が認められる。

3 整理の方法

(1) 土器

一次整理が完了した後は、当センターの整理作業所で報告書作成のための本格的な整理作業（二次整理）を行った。

土器の接合作業は、遺構出土のものから着手した。同時期（同群）の破片に未分類のものを加え、「磨耗」・「小破片」を除いて行った。遺構内での接合、遺構が位置するグリッド、及びそこに位置する別の遺構の土器との接合を行い、順次、周辺グリッドへと接合できる破片を探すように進めた。包含層出土のものについても同様に行い、グリッドを越えて作業することも行った。また「小破片」は、ある程度の大きさになった個体と、同一と予想されるもののみを試みた。

最終的に接合した破片の集まり具合を把握し、復原可能なものとそれ以外のものに分類した。前者は復原作業を行い、立面及び必要な部位の実測図を作成しすべて掲載した。後者は特徴が認識しやすい口縁部や底部の破片、大きな破片となったもの、グリッドや層位を超えた接合関係の情報を示せるもの等を主に抽出し、拓影図と垂直方向の断面図を組み合わせ掲載した。なお掲載土器はすべて観察表を作成した。

また、以上の作業と並行して集計作業等も行い、その結果を出土点数表や出土分布図としてV章に掲載した。

(2) 石器類

石器類は接合作業を行っていない。報告書に掲載する石器は、各群から残存状態が「完形」・「準完形」のものを中心に器種や形態の多様性を示せることを考慮し選出し、実測図・観察表を作成し掲載した。

また、これらの作業と並行して集計作業等も行い、その結果を出土点数表や出土分布図としてV章に掲載した。

(3) 遺物と記録類の保管

遺物は北海道教育委員会の管轄の元、北海道立埋蔵文化財センターにおいて保存される。

整理作業の完了した遺物は次のように収納した。

土器と石器類ごとに「掲載」・「未掲載」に分け、さらに、それぞれ「遺構出土」・「包含層出土」に分けた。「掲載」のものは、報告書掲載の図・番号を明記し収納した。「未掲載」のものは、「遺構出土」のものは遺構ごとに収納した。「包含層」出土遺物は、土器は出土グリッド・出土層位・時期分類・残存状態による分類に従い、石器類は器種・残存状態による分類別にまとめ、出土グリッド・出土層位ご

とに収納した。さらに、これら内容を表記した「遺物収納台帳」を作成した。

記録類については「現場関係図面類」・「遺物図面類」・「写真類」・「遺物の台帳類」がある。

現場関係図面類は、現場で作成した「原図」とこれを浄書した「素図」、遺物図面類は「復原土器立面実測図」・「破片土器断面実測図」・「復原及び破片土器拓影図」・「石器類実測図」がある。それぞれ種類ごとに通し番号を付し Excel 文書で「図面台帳」を作成した。また、素図と遺物図面類は報告書掲載の図・番号を記入した。

「写真類」は現場で撮影した「現場写真」、報告書に掲載のためスタジオで撮影した「遺物写真」がある。これらについても、通し番号を付し Excel 文書形式の「写真フィルム台帳」を作成した。

原則として、これらすべての記録類は北海道立埋蔵文化財センターにて保管される。

また、「遺物関係の台帳」は、一次整理作業を管理する「水洗台帳」・手書きの「遺物登録台帳」・Excel 文書の「遺物登録台帳」があり、さらに二次整理作業を管理する「土器の接合台帳」・「土器の拓本台帳」・「石器の一覧表」等がある。これらのうち Excel 形式の「遺物登録台帳」を保管し、これ以外の記録類は原則として破棄する。

4 遺物の分類

(1) 土器

土器は、次の三つの分類基準を用いて分類した。

* 「時期分類基準」

「I群」：縄文時代早期

- a 類；貝殻文・条痕文・沈線文を有する土器群
- b 類；東銅路式系土器群

「II群」：縄文時代前期

- a 類；縄文尖底土器群
- b 類；円筒土器下層式及びそれに伴う土器群

「III群」：縄文時代中期

- a 類；円筒土器上層式・サイベ沢Ⅶ式・萩ヶ岡1・萩ヶ岡2式に相当する土器群
- b 類；萩ヶ岡3式（天神山式）・柏木川式・北筒式に相当する土器群

「IV群」：縄文時代後期

- a 類；余市式（伊達山式・タブコブ式）、入江式に相当する土器群
- b 類；ウサクマイC式・手稲式・ホッケマ式に相当する土器群
- c 類；堂林式・三ツ谷式・御殿山式に相当する土器群

「V群」：縄文時代晩期

- a 類；大洞B・BC式及びそれに伴う土器群
- b 類；大洞C1・C2式及びそれに伴う土器群
- c 類；大洞A・A'式及びそれに伴う土器群

「VI群」：純縄文時代に属するもの

「VII群」：擦文時代に属するもの

「未分類」：時期が判断できないもの

「再生土製品」：土器破片を二次的に加工し意図的な形態に成形したと判断されるもの

「土製品」

* 「破片部位の分類基準」

土器破片の部位について次の分類基準を用いた。

- 「口縁部」：口唇部が残存している破片
- 「底部」：底面が残存している破片
- 「胴部」：口縁部・底部破片以外のもの
- 「不明・その他」：明確に部位を特定できないもの、剥落した貼付部分等

* 「残存状態に関する分類基準」

土器破片の残存状態は、次の分類基準による。

- 「良好」：破片の表裏面及び割れ口ともに良好な状態のもの
 - 「剥離」：破片の表裏面のいずれか、あるいは両面が約1/2以上剥離・剥落している状態のもの
 - 「磨耗」：破片が磨耗（特に割れ口）している状態のもの
 - 「小破片」：大きさが長径2cm程度以下の小さな破片
- 補足：「磨耗」は割れ口が接合に耐えられない形状で、さらに文様等が消滅しかける等、資料として報告書で提示しにくいものである。
- 「小破片」は小さいもので、接合復原に影響が無い上に、破片資料として報告書で提示しにくいものである。

(2) 石器類

石器は、次の二つの分類基準を用いて分類した。

* 「器種分類基準」

旧石器時代の石器群

0 旧石器群（石材：黒曜石、頁岩等）

器種の表記は、英訳略号を用いた。

- MB：細石刃（Micro Blade）
- MC：細石刃核（Micro Core）
- MSP：削片（Micro Core Spall）
- BL：石刃（Blade）
- BU：彫器（Burin）
- SS：削器（Side Scraper）
- ES：搔器（End Scraper）
- RS：円形搔器（Round Scraper）
- RF：二次加工のある剥片（Retouched Flake）
- FK：剥片（Flake）
- PB：礫（Pebble）

縄文時代の石器群

I 剥片石器群（石材：黒曜石、頁岩等）

- 「石鏃」
- 「石槍・ナイフ」
- 「石錐」

「つまみ付きナイフ（石匙）」

「スクレイパー」

「U・Rフレイク」

補足：「U・Rフレイク」は定型的な形態を有さないが、人為的な加工・使用痕を有するものである。Uは「utilized」・Rは「retouched」の略で、両者を一括した。

「石核」

「フレイク・チップ（剥片・碎片）」

「原石」

II 磨製石器群（石材：泥岩、片岩、蛇紋岩等）

「磨製石斧」

「原石」

III 礫石器群

「たたき石」

「すり石」

「石錘」

「砥石」

「台石・石皿」

IV 石製品

「玉」

V 自然礫

「加工・使用痕のある礫」：被熱の痕跡があるものも含む

「自然礫」

* 「残存状態に関する分類基準」

石器類の残存状態は、次の基準を用いて分類した。

旧石器・剥片・磨製石器群

「完形」：残存表面積が90%程度以上のもの

「準完形」：「完形」と「半形」の中間～やや完形に近いもの

「半形」：残存表面積が50%程度のもの

「片」：残存表面積が50%程度以下のもの

礫石器群・自然礫

「完形」：大きな割れ口がないもの、またあっても機能部が損なわれていないもの

「準完形」：割れ口を有し、完形の状態を想定でき、残存表面積が75%程度のもの

「半形」：割れ口を有し、完形の状態を想定でき、残存表面積が50%程度のもの

「片」：割れ口を有し、完形の状態を想定し難く、残存表面積が50%程度以下のもの

補足：自然礫は割れ口のないものを「完形」、あるものを「片」とし二区分とした。

* 「石材」の略号について

石材の特定については、表74の「岩石分類体系表」をもとに行い、遺物カードや遺物登録台帳には次の略号で表記した。

* 火成岩

・火山噴出物

軽石：P u m (Pumice) 浮岩 スコリア：S c o (Scoria) 岩滓

・溶岩

溶岩：L a v (Lava)

・火山岩

黒曜石(岩)：O b s (Obsidian)

流紋岩：R h y (Rhyolite) 安山岩：A n d (Andesite) 玄武岩：B a s (Basalt)

・深成岩

花崗岩：G r a (Granite) 閃緑岩：D i o (Diorite) 斑糲岩：G a b (Gabbro)

* 堆積岩

・火山砕屑岩

火山礫凝灰岩：L t u (Lapilli Tuff) 凝灰岩：T u f (Tuff)

・砕屑岩

礫岩：C o n (Conglomerate) 砂岩：S a n (Sandstone)

泥岩：M u d (Mudstone) 緑色泥岩：G r. M u d (Green Mudstone)

頁岩：S h a (Shale) チャート：C h e (Chert) 粘板岩：S l a (Slate)

* 変成岩

片岩：S c h (Schist) 片麻岩：G n s (Gneiss) ホルンフェルス：H o r (Hornfels)

* 超塩基性岩

蛇紋岩：S e r (Serpentinite) 橄欖岩：P e r (Peridotite)

* 鉱物

滑石：T a l (Talc)

(末光正卓)

IV章 遺構と出土遺物

1 概要 (図8・9・10 表1)

2ヶ年度の調査で確認した遺構は、土坑4基(LP-1~4)、Tピット1基(TP-1)、土器(破片)集中2ヶ所(UPS-1・LPS-1)、フレイク・チップ集中1ヶ所(LFC-1)、旧石器ブロック3ヶ所(SB-1~3)である。これら以外に擬似焼土46ヶ所と道跡2条も調査した。

土坑は、いずれも平面が楕円形を呈し浅いものである。TP-1は浅いので、「掘りかけのTピット」と推測される。なお『調査年報20』(財)北海道埋蔵文化財センター 2008で、「TP-2」と報告したものは、平成20年度の調査で風倒木痕内に堆積した長楕円形の黒色土であると判明した。

土器(破片)集中は、UPS-1は風倒木痕内のⅢ層でV群土器がまどまっていた。LPS-1は比較的大きなV群の土器破片が単体で出土したものである。フレイク・チップ集中はV1~V2層でまどまっていたもので、水洗選別手法も用いて遺物を回収した。旧石器ブロックは、いずれも10~20点程度の遺物が散在的に出土した。

また『調査年報20』(前掲)で報告された「焼土」UF-1・LF-1~45は千歳市梅川4遺跡(北埋調報253)で調査・報告された「擬似焼土」であると判断した。Ⅲ層上面の道跡は調査区南側部分で確認され、現代の道跡は北側部分の現地表面(I層)が筋状に緩やかに凹んでいる状況がみられた。

(末光正卓)

2 土坑

LP-1 (図15 表7 図版2)

位置：S-20区 検出層位：V2層上位 標高：15.6~15.8m

平面形：楕円形 規模：0.92×0.78/0.55×0.42/0.23m

調査：V2層上位の調査中にIV層(Ta-c)の落ち込みを検出した。半截して底と壁を確認した。土層は、下層がV層土とVI層土が混じる暗褐色土、上層がV層土主体の黒褐色土であり、この凹みにTa-cが堆積していた。

坑底・壁：坑底の平面形は円形に近い。壁の立ち上がりは緩やかで南西部分は皿状に近い。

遺物：出土していない。

時期：検出層位及び周辺の遺物出土状況から縄文時代晩期後葉と考えられる。

LP-2 (図15 表7 図版2)

位置：S-22区 検出層位：V2層上位 標高：15.9~16.1m

平面形：不整な楕円形 規模：0.96×0.81/0.57×0.45/0.35m

調査：V2層上位の調査中に暗褐色土の広がる面で、黒褐色土の落ち込みを検出した。半截して底と壁を確認した。土層は、下層がV層土とVI層土が混じる暗褐色土、上層がV層土主体の黒褐色土である。

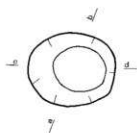
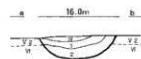
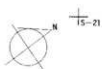
坑底・壁：坑底の平面形は不整形である。壁の立ち上がりは緩やかで皿状を呈する。

遺物：出土していない。

時期：検出層位及び周辺の遺物出土状況から縄文時代晩期後葉と考えられる。

2 土坑

15-20



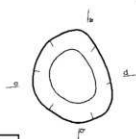
図番号	層位名称	野外地質	地質		層厚	粘着性	圧縮率	層の存在状況	層の存在割合
			地質	圧縮率					
1	表土層	粘土	粘着性	0.50	0.5	中	2~10cm程度	1層まで	V>IV層
2	表土層	粘土	粘着性	0.50	0.5	中	2~10cm程度	1層まで	V<IV層

17-20

17-21

15-22

15-23



図番号	層位名称	野外地質	地質		層厚	粘着性	圧縮率	層の存在状況	層の存在割合
			地質	圧縮率					
1	表土層	粘土	粘着性	0.50	0.5	中	=	V>IV層	
2	表土層	粘土	粘着性	0.50	0.5	中	2~10cm程度	1層まで	V<IV層

17-22

17-23



図15 LP-1・2

LP-3 (図16 表7 図版2)

位置：J-19区 検出層位：V2層中位 標高：14.6~14.8m

平面形：楕円形 規模：0.92×0.88/0.64×0.55/0.14m

調査：V2層中位の調査中にT a-c 混じりの黒褐色土の落ち込みを検出した。半截して底と壁を確認した。土層は、下層がV層土主体の暗褐色土、上層がT a-c とV層・VI層土が混じる黒褐色土である。

坑底・壁：坑底の平面形は楕円形である。壁の立ち上がりは緩やかで、西南側はより緩やかに立ち上がる。掘り込みはV2層中～上位で土坑上部の凹みにはV1層が堆積していた。

遺物：出土していない。

時期：検出層位及び周辺の遺物出土状況から縄文時代晩期後葉と考えられる。

LP-4 (図16 表7 図版3)

位置：M-24・25区 検出層位：V2層中位 標高：15.2~16.0m

平面形：卵形 規模：(1.23) × (1.08) / (0.96) × (0.88) / 0.32m

調査：道教委による範囲確認調査の試掘坑内の土を除去したところ、北東端に黒色土の落ち込みを検出した。試掘坑に沿って土層観察用のベルトを設け、「T」の字状にトレンチを入れVII層上面まで掘り下げた。黒色土の輪郭を確認したが土層断面が不明瞭であったので、もう1本トレンチを入れこれにより底と壁を確認した。土坑の南東側には木根痕があり、土坑の一部は木根痕にかかって構築されている。構築面はV2層上～中位で、上部の凹みにはV1層が堆積していた。

坑底・壁：坑底の平面形は卵形で底面には凹凸がある。北西～北～東側の壁の立ち上がりは明瞭で、壁の立ち上がりは緩やかである。

遺物：出土していない。

時期：構築層位及び周辺の遺物出土状況から縄文時代晩期後葉と考えられる。(録田 望)

3 Tピット

TP-1 (図17 表8 図版3)

位置：P-32・33区 検出層位：VII層上面 標高：16.0~16.3m

平面形：不整な長楕円形 規模：3.03×0.89/2.89×0.46/0.24m

調査：調査最終面であるVII層上面で溝状の暗褐色土の落ち込みを検出した。半截したところ底と壁を確認した。覆土は四つに分層され最下層はVII層(E n-a)主体の黄褐色土である。南東側の一部にはVII層土主体の褐色土、その上位にVII層土とE n-aが混じるV層土が堆積する。上部の凹みはV層主体の極暗褐色土である。

坑底・壁：坑底の平面形は一部が括れた不整な長楕円形を呈し、底面には凹凸がある。壁の立ち上がりは明瞭である。土坑の形態から掘りかけのTピットの可能性がある。

遺物：出土していない。

時期：掘りかけのTピットであるとすれば、石狩低地帯から東側の山岳地帯にかけてのTピットの構築時期を考慮に入れると、縄文時代中期後半から後期初頭と推定する。

(録田)

TP-2 (図10 表8)

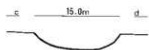
L-32区で、両年度調査区の境界に位置する。平成19年度に掘りかけのTピットの可能性があり調

2 土坑

├J-19

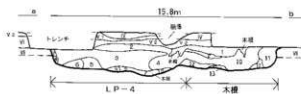
├U-20

LP-3							
図番号	層位名称	野外土性	地質 名称	層厚	粘着性	塑性指数	層の所在具合
1	掘上1層	粘土	アールホム赤色土	約20cm	粘	約	1A-掘上1層
2	掘上2層	粘土	アールホム赤色土	約20cm	粘	約	1B-掘上2層



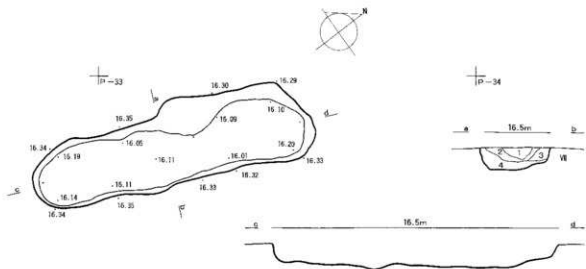
├K-19

├K-20



LP-3							
図番号	層位名称	野外土性	地質 名称	層厚	粘着性	塑性指数	層の所在具合
1	掘上1層	粘土	アールホム赤色土	約20cm	粘	約	1A-掘上1層
2	掘上2層	粘土	アールホム赤色土	約20cm	粘	約	1B-掘上2層
3	掘上3層	粘土	アールホム赤色土	約20cm	粘	約	1C-掘上3層
4	掘上4層	粘土	アールホム赤色土	約20cm	粘	約	1D-掘上4層
5	掘上5層	粘土	アールホム赤色土	約20cm	粘	約	1E-掘上5層
6	掘上6層	粘土	アールホム赤色土	約20cm	粘	約	1F-掘上6層
7	掘上7層	粘土	アールホム赤色土	約20cm	粘	約	1G-掘上7層
8	掘上8層	粘土	アールホム赤色土	約20cm	粘	約	1H-掘上8層
9	掘上9層	粘土	アールホム赤色土	約20cm	粘	約	1I-掘上9層
10	掘上10層	粘土	アールホム赤色土	約20cm	粘	約	1J-掘上10層
11	掘上11層	粘土	アールホム赤色土	約20cm	粘	約	1K-掘上11層
12	掘上12層	粘土	アールホム赤色土	約20cm	粘	約	1L-掘上12層
13	掘上13層	粘土	アールホム赤色土	約20cm	粘	約	1M-掘上13層

図16 LP-3・4



TP土層説明

図番号	層位名称	野外土性	分類		層厚	粘着性	量物産	層の存在状況	層の存在割合
			色名	Yンセルモット					
1	灰土層	灰土	水色	2.0250/3	0.05	弱	0	2~10mm ² 以上 ⁺ 粘土 ⁺	V3層位
2	赤土層	赤土	赤色	2.0250/3	0.05	弱	0	2~10mm ² 以上 ⁺ 粘土 ⁺	V3層位
3	赤土層	赤土	赤色	2.0250/3	0.05	弱	0	2~10mm ² 以上 ⁺ 粘土 ⁺	V3層位
4	赤土層	赤土	赤色	2.0250/3	0.05	弱	0	2~10mm ² 以上 ⁺ 粘土 ⁺	V3層位

図番号	層位名称	野外土性	分類		層厚	粘着性	量物産	層の存在状況	層の存在割合
			色名	Yンセルモット					
1	灰土層	灰土	水色	2.0250/3	0.05	弱	0	2~10mm ² 以上 ⁺ 粘土 ⁺	V3層位
2	赤土層	赤土	赤色	2.0250/3	0.05	弱	0	2~10mm ² 以上 ⁺ 粘土 ⁺	V3層位
3	赤土層	赤土	赤色	2.0250/3	0.05	弱	0	2~10mm ² 以上 ⁺ 粘土 ⁺	V3層位
4	赤土層	赤土	赤色	2.0250/3	0.05	弱	0	2~10mm ² 以上 ⁺ 粘土 ⁺	V3層位

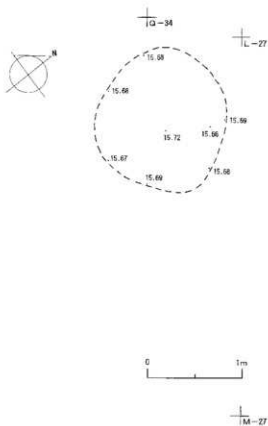


図17 TP-1・LFC-1

査されたが、平成20年度の調査で風倒木痕と判明した。

(末光)

4 土器(破片)集中

UPS-1 (図18・24 表9・14・15 図版3・5)

位置: R-35区 検出層位: FⅢ層(風倒木痕内Ⅲ層) 標高: 16.6~16.9m

規模: 0.38×0.32m

調査: V層の包含層調査中、風倒木痕が認められ周囲と高さを含わせるように掘り進めた。この風倒木痕に堆積しているⅢ層中で、土器破片のまとまりが認められたので土器集中と認定した。出土状況を記録後、遺物を取り上げた。まとまりには遺物番号を付し小破片は層上げした。本来はⅢ層の遺物であるので、遺構略号にはUを付した。

遺物・時期: 同一個体のV群c類(縄文時代後期後葉)で、鉢形土器1個体を復原した(図24-1)。

LPS-1 (図18・24 表9・14・16 図版5)

位置: R-41区 検出層位: FV層(風倒木痕内V層) 標高: 16.8m

規模: 0.15×0.13m

調査: V層の包含層調査中、風倒木痕が認められ周囲と高さを含わせるように掘り進めた。この風倒木痕内のV層中で、比較的大きな土器破片が認められ土器集中と認定した。出土状況を記録し遺物番号を付して取り上げた。西側部分は範囲確認調査の試掘坑があり、ここからも同一個体の破片が出土している。

遺物・時期: 同一個体のV群c類(縄文時代後期後葉)で浅鉢形土器1個体復原した(図24-2)。

(末光)

5 フレイク・チップ集中

LFC-1 (図17・24 表10・15・16・20 図版3)

位置: L-26区 検出層位: V1層 標高: 15.7m

平面形: 楕円形 規模: 1.47×1.36m

調査: IV層(Ta-c)直下のV1層の調査中に、フレイク等が多く出土する部分があった。その範囲と標高を記録して遺物を取り上げながらV1層を掘り下げた。V2層の調査の際にその部分のV2層土を採取して水洗選別を行い、遺物を回収した。その下位のVI層からは遺物の出土はない。

遺物: 遺物は2,540点出土した。V1層からはV群c類と考えられる土器3点(一次分類では未分類)と石器類が1,414点(石鏃1点・スクレイパー4点を含む)出土した。水洗選別を行ったV2層からは、石器類1,123点(石鏃6点・スクレイパー8点を含む)が出土した。

時期: 検出層位と周辺の遺物出土状況から縄文時代晩期後葉であろう。

(鎌田)

6 旧石器ブロック

SB-1 (図19・25・28 表11・17・21・22・23 図版4・6)

位置: Q-40・41区 検出層位: V-VII・FV層 標高: 16.5~16.8m

規模: 約4.8×約3.7m

調査: 包含層調査中旧石器が出土した。遺物が集中して出土すると予想し、周囲の包含層をVII2層上面まで掘り下げた。集中域はなく散在的な出土で、出土地点を計測し取り上げた。

←P-35へ



↑P-36



↓Q-36へ

遺物番号	遺物名称				層位	標高 (m)	直径	備考
	土器 (形名)	土器 (器種)	陶器 (器種)	点数				
1	土器	V形	鍋形	1	F層層	16.67	●	
2	土器	V形	鍋形	1	F層層	16.94	●	
3	土器	V形	鍋形	1	F層層	16.67	●	
4	土器	V形	鍋形	1	F層層	16.66	●	
5	土器	V形	鍋形	1	F層層	16.67	●	



↑R-41

試掘坑 (B開穴)



→R-42へ

遺物番号	遺物名称				層位	標高 (m)	直径	備考
	土器 (形名)	土器 (器種)	陶器 (器種)	点数				
1	土器	V形	鍋形	1	F層層	16.77	●	

↓S-41へ

0 0.5m

図18 UPS-1・LPS-1

遺物・時期：旧石器が21点出土した。細石刃 (MB)、細石刃核削片 (MSP)、石刃 (BL)、影器 (BU)、搔器 (ES) があり、伴うと考えられる磨製石斧やたたく石も出土した。



G-41

• 1

• 2

• 3

• 21

• 4

• 17

• 5

• 6

• 20

• 7

• 16

• 15

• 14

• 8

• 13

• 9

• 10

• 12

• 19

• 11

• 18

R-42

R-41

SB-1		点検小區		標高 (m)	傾斜 (°)	備考
探検	調査	調査	調査			
1	U-2	F.S.	15.5	15.5	15.5	
2	U-2	F.S.	15.5	15.5	15.5	
3	U-2	F.S.	15.5	15.5	15.5	
4	U-2	F.S.	15.5	15.5	15.5	
5	U-2	F.S.	15.5	15.5	15.5	
6	U-2	F.S.	15.5	15.5	15.5	
7	U-2	F.S.	15.5	15.5	15.5	
8	U-2	F.S.	15.5	15.5	15.5	
9	U-2	F.S.	15.5	15.5	15.5	
10	U-2	F.S.	15.5	15.5	15.5	
11	U-2	F.S.	15.5	15.5	15.5	
12	U-2	F.S.	15.5	15.5	15.5	
13	U-2	F.S.	15.5	15.5	15.5	
14	U-2	F.S.	15.5	15.5	15.5	
15	U-2	F.S.	15.5	15.5	15.5	
16	U-2	F.S.	15.5	15.5	15.5	
17	U-2	F.S.	15.5	15.5	15.5	
18	U-2	F.S.	15.5	15.5	15.5	
19	U-2	F.S.	15.5	15.5	15.5	
20	U-2	F.S.	15.5	15.5	15.5	

0 1m

図 19 SB-1

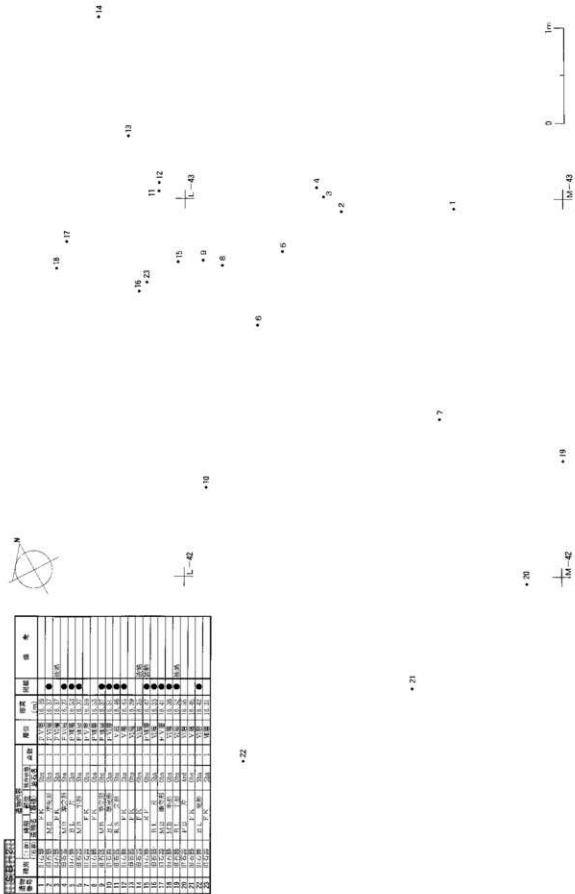


図20 SB-2

• 1



10-39

• 5

• 3

• 2

層位	遺物		層位	調査者	備考
	種類	数量			
1	土器	1	V	10.10	●
2	土器	1	V	10.10	●
3	土器	1	V	10.10	●
4	土器	1	V	10.10	●
5	土器	1	V	10.10	●
6	土器	1	V	10.10	●
7	土器	1	V	10.10	●
8	土器	1	V	10.10	●
9	土器	1	V	10.10	●
10	土器	1	V	10.10	●
11	土器	1	V	10.10	●
12	土器	1	V	10.10	●
13	土器	1	V	10.10	●
14	土器	1	V	10.10	●
15	土器	1	V	10.10	●
16	土器	1	V	10.10	●
17	土器	1	V	10.10	●
18	土器	1	V	10.10	●
19	土器	1	V	10.10	●
20	土器	1	V	10.10	●
21	土器	1	V	10.10	●
22	土器	1	V	10.10	●
23	土器	1	V	10.10	●
24	土器	1	V	10.10	●
25	土器	1	V	10.10	●
26	土器	1	V	10.10	●
27	土器	1	V	10.10	●
28	土器	1	V	10.10	●
29	土器	1	V	10.10	●
30	土器	1	V	10.10	●
31	土器	1	V	10.10	●
32	土器	1	V	10.10	●
33	土器	1	V	10.10	●
34	土器	1	V	10.10	●
35	土器	1	V	10.10	●
36	土器	1	V	10.10	●
37	土器	1	V	10.10	●
38	土器	1	V	10.10	●
39	土器	1	V	10.10	●
40	土器	1	V	10.10	●

• 4

• 6

• 7

• 8

• 11

• 10



10-40

• 12

10-39

図21 SB-3

SB-2 (図20・26・28 表11・17・21 図版4・6)

位置：K-42・43、L-41-43区 **検出層位**：V-VI・FV-FVII層 **標高**：16.3~16.6m
規模：約9.8×約4.3m

調査：包含層調査中旧石器が出土した。遺物が集中して出土すると予想し、周囲の包含層をⅡ2層上面まで掘り下げた。集中域はなく散在的な出土で、出土地点を計測し取り上げた。

遺物・時期：旧石器が23点出土した。細石刃(MB)、円形搔器(RS)、二次加工のある剥片(RF)等がある。

SB-3 (図21・27 表11・17・21 図版4・6)

位置：N-39、O-39・40区 **検出層位**：V-VI・FV-FVII層 **標高**：16.5~16.8m
規模：約5.6×約3.0m

調査：包含層調査中旧石器が出土した。遺物が集中して出土すると予想し、周囲の包含層をⅡ2層上面まで掘り下げた。集中域はなく散在的な出土で、出土地点を計測し取り上げた。

遺物・時期：旧石器が12点出土した。石刃(BL)、搔器(ES)等がある。

(末光)

7 擬似焼土 (図9・10 表12)

焼土は概要でも述べたとおり、すべて千歳市梅川4遺跡(北埋調報253)で調査・報告された「擬似焼土」であると判断した。これらは表12にまとめて掲載する。

(末光)

8 道跡**Ⅲ層上面の道跡** (図9・22 表13 図版4)

Ⅱ層(Ta-a)除去後、P-S-16・17、T-17区のⅢ層上面でTa-aが筋状に堆積する部分が見られた。これを除去したところ、幅60~80cm、深さ2~4cm、底面が概ね平坦な凹みが見られた。

一般的に遺構とされる道跡は、曲線的な凹みで底面が深く断面は弧状を呈し、上記の特徴と一致しない。また、この凹みの西側部分はキャタピラ痕がみられL-19区付近まで続いていた。さらに、K-M-21・25区にはコンクリート塊を含む大規模な攪乱があり、筋状の痕跡はこの攪乱に関連する建設機械等の車輪痕であると考えられる。

しかし、周辺調査でアイヌ文化期の集落跡が確認されており、この時期の道跡である可能性も否定し難いため記録した。(鎌田)

現代の道跡 (図9・12・23 表13 図版4)

表土除去時に、調査区を東西方向に横切る幅4m程度の凹みが筋状に認められた。東西調査区外は森林でこの凹みが続いてみられ、西側は南長沼用水で行き止まりとなる。

幅や明瞭に凹む断面形態から、獣道等ではなく人為的に構築された道跡であると考えられる。Ⅰ層とⅡ層を切って構築されていることから1739年より新しく、南長沼用水に切られていることから、用水が造られた以前であると判断される。東南及び北西側の調査区壁で土層断面図(図12・23)を作成し、Ⅲ層地形測量図(図9)に平面を復元し記録した。(末光)

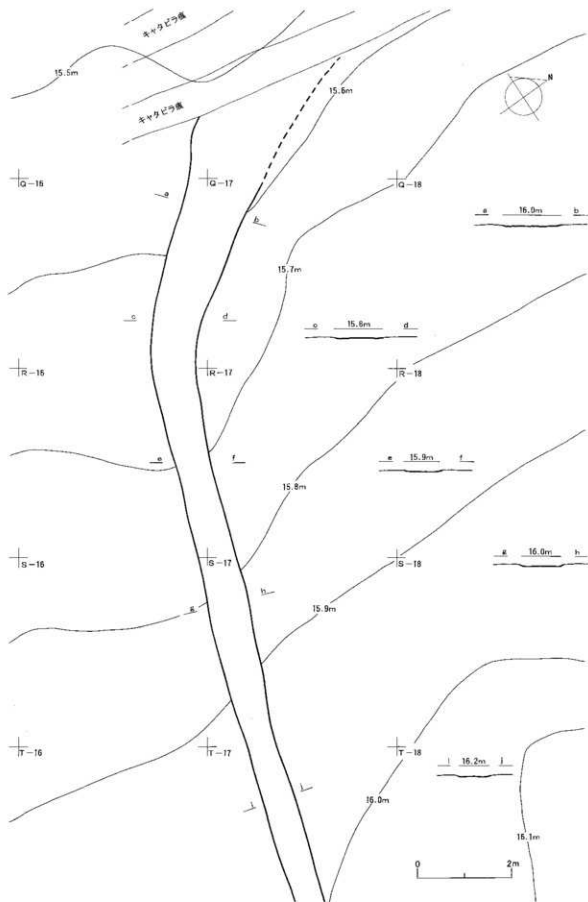


図22 III層上面の道跡

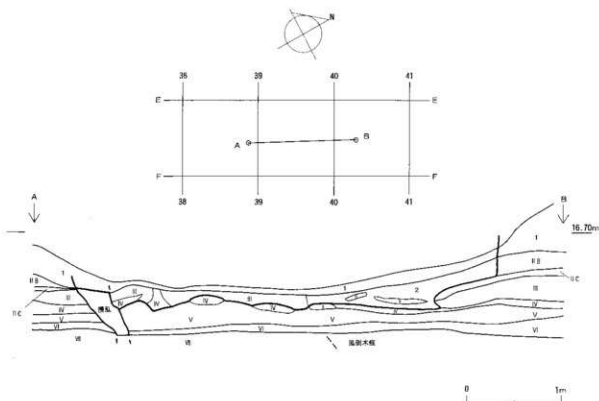


図23 現代の道跡

9 出土遺物

(1) 土器

復原土器

UPS-1 (図24-1 表14・18 図版5)

1は風倒木痕内のⅢ層中からまとめて出土し、135点(小破片65点を含む)のうち、包含層出土分も含む59点が接合し復原した。口縁部は緩やかに外反し曲線的に底部へとつながる浅鉢である。外面はLR斜行縄文が施され底部付近では縦走気味になり、剥離面も認められる。口唇部断面は切り出し形を呈し、内面にかけて縦位にLR燃紐刻みが施文される。底部外面にも縄文が観察される。V群c類タンネットウL式に相当する。

LPS-1 (図24-2 表14・19 図版5)

2は風倒木痕内のV層中にまとめて出土し、15点(小破片3点を含む)と、範囲確認調査で出土した破片も接合し復原した浅鉢である。大きく外反する口縁部から曲線的に底部へとつながる器形を呈する。外面はRL縦走縄文で、口縁部～胴部には平行・波状の沈線文が複数施され工字文風の文様がみられる。外面は赤色顔料の付着が部分的に認められる。口唇部はRL縄文で、口縁部付近の内面にはLR縄線文・沈線文が認められる。底部外面は間隔が広い条が観察される。V群c類タンネットウL式に相当する。

図化していない土器

LFC-1 (表15)

表15に示すように、V群c類と推測される土器が3点(一次分類:未分類・胴部・小破片)出土し

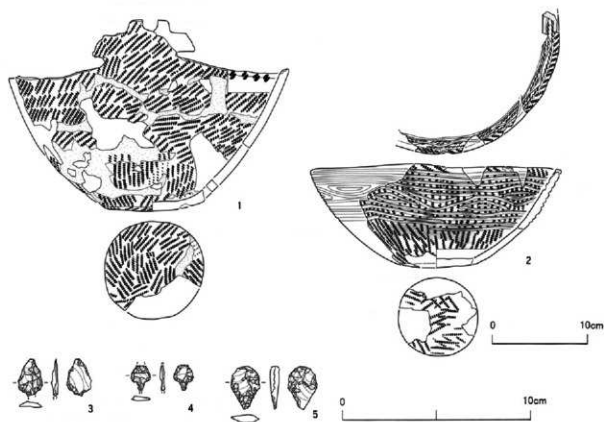


図24 UPS-1・LPS-1・LFC-1出土の遺物

たが、小破片のため図化して掲載していない。

(2) 剥片石器群

LFC-1 (図24-3~5 表16・20 図版5)

3・4は有茎の石鎌である。3は基部を破損する。腹面は、周縁に加工が施され剥離面を広く残す。4は小型で先端部と基部を破損する。5はスクレイパーで、背面の下縁と腹面の左側縁部に加工が認められる。3~5は黒曜石製である。

(3) 旧石器群

SB-1 (図25・28 表21・22・23 図版6)

1はたたき石で割れ口が使用痕と推測するが、自然壊かもしれない。石材は細粒で硬質な砂岩である。2は磨減が著しいため、断定できないが磨製石斧と推測するものである。3は頁岩製の石器(BU)で、石刃を素材とし背面左側部分は原礫面を残し、背面下端部付近に彫刀面がみられる。広郷型の細石刃核の可能性もある。4はエンドスクレイパー(ES)で、頁岩製の石刃を素材とし下端部に調整が施される。5~9は石刃(BL)である。5は頁岩製で下端部分を破損する。6は頁岩製で背面左側縁部が被熱する。7は頁岩製で上下両端部分を破損する。8は頁岩製で打面側部分が残存する。9は黒曜石製で上下両端部を破損する。

24・25は頁岩製の細石刃核削片(MSP)である。24は被熱の痕跡と調整痕がみられ、断面形状からファーストスボールと考えられる。25は背面に先行する削片の剥離面がみられる。

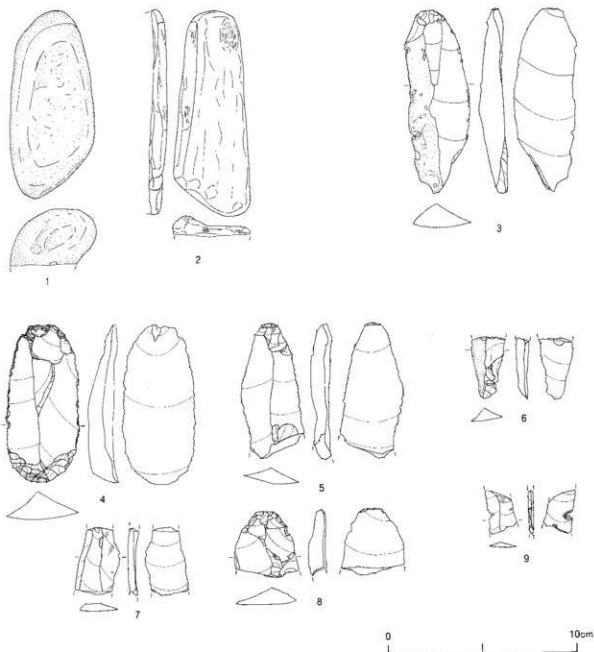


図25 SB-1出土の石器

26～28は、黒曜石製の細石刃（MB）である。26は両側縁が曲線的なものである。27は比較的大きめのもので下端部を破損する。28は下端部を破損する。

SB-2（図26・28 表21 図版6）

10は頁岩製のエンドスクレイパー（ES）で、背面周縁に二次調整が施される。11～15は石刃（BL）である。11は頁岩製で下端部を破損する。12は背面左側縁部に明瞭な二次加工が認められる。13は頁岩製で背面に石核調整時の剥離痕を残す稜付である。14は上下両端部を破損し背面左側縁部に二次加工が施される。15は上下両端部を大きく破損する。

16は二次加工のあるフレイク（RF）で被熱している。17は頁岩のフレイク（FK）である。

29～34は細石刃（MB）である。29は下端部を破損する。30は上下両端部を破損する。31は上端部

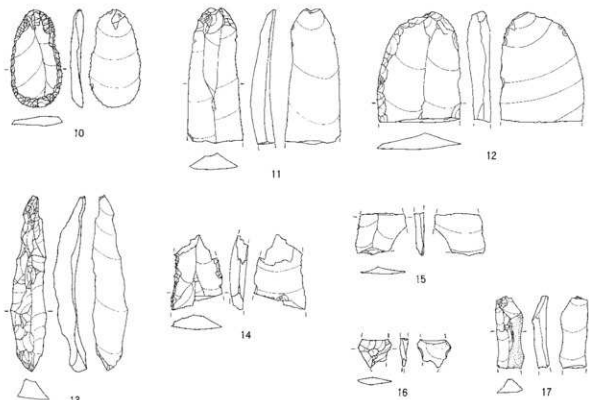


図26 SB-2出土の石器

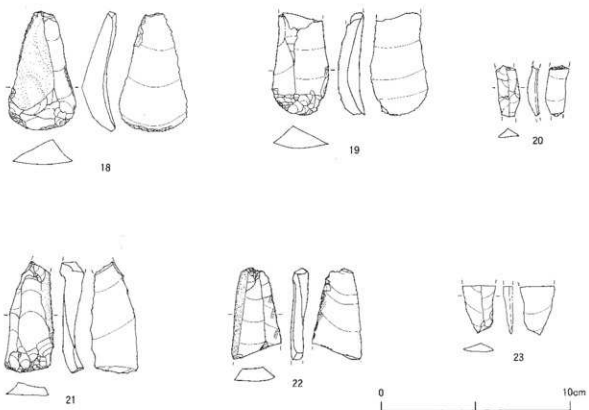


図27 SB-3出土の石器

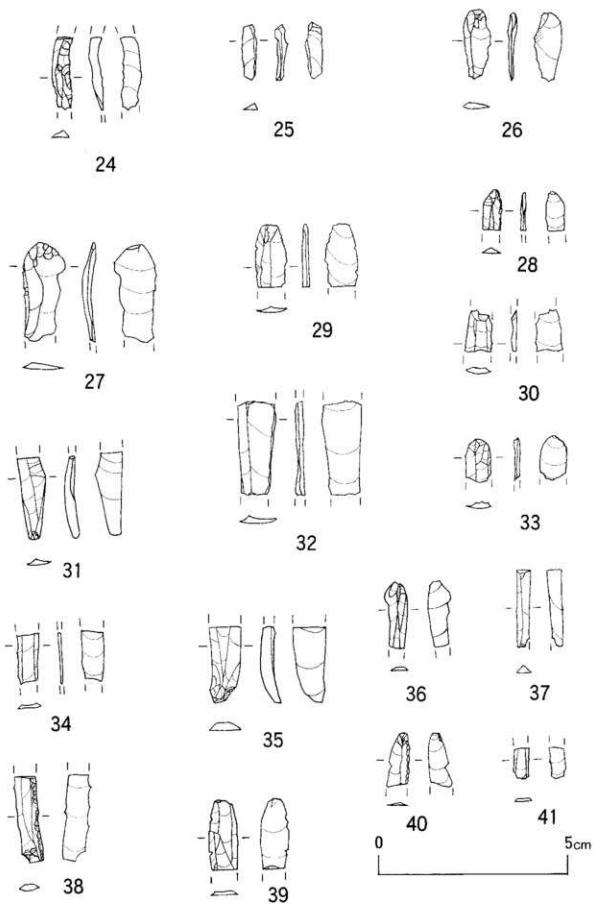


図28 S B・包含層出土の削片・細石刃

を破損する。32は比較的大きなもので上下両端部を破損する。33は下端部を破損し重量は0.1g以下である。34は上下両端部を破損する。

S B-3 (図27 表21 図版6)

18・19はエンドスクレイパー（ES）である。18は背面左側部分に原礫面を残し、右側縁部にも一部二次加工が施される。19は石刃素材で上端部を破損する。

20～23は石刃（BL）である。20は黒曜石製で上下両端部を破損する。21は頁岩製で背面の下端部には剥離面及び調整痕が観察される。22は黒曜石製で背面左側縁部に原礫面を残す。23は頁岩製で上端部を破損する。 (末光)

表7 土坑一覧表

遺構名	回	図版	グリッド	検出層位	平面形態	規模 (m)					主な出土遺物	備考
						確謬面		坑底面		最大深		
						長径	短径	長径	短径			
LP-1	15	2	S-20区	V2層	楕円形	0.92	0.78	0.55	0.42	0.23	無	
LP-2	15	2	S-22区	V2層	不整な楕円形	0.96	0.81	0.57	0.45	0.35	無	
LP-3	16	2	J-19区	V2層	楕円形	0.92	0.88	0.64	0.55	0.14	無	
LP-4	16	3	M-24・25区	V2層	卵形	(1.23)	(1.08)	(0.96)	(0.88)	0.32	無	試掘坑に切られる

表8 Tピット一覧表

遺構名	回	図版	グリッド	平面形態	規模 (m)					主な出土遺物	備考
					確謬面		底面		最大深		
					長径	短径	長径	短径			
TP-1	17	3	P-32・33区	不整な長楕円形	3.03	0.89	2.89	0.46	0.24	無	掘りかけのTピット
TP-2			L-32区		*					風倒木痕と判明	

表9 土器（破片）集中一覧表

遺構名	回	図版	グリッド	検出層位	規模(m)		点数	出土遺物	備考
					長さ	幅			
UPS-1	18	3	R-35区	風倒木痕 (FⅢ層)	0.38	0.32	135	V群土器	
LPS-1	18		R-41区	風倒木痕 (FⅤ層)	0.15	0.13	15	V群土器	試掘坑に切られる

表10 フレイク・チップ集中一覧表

遺構名	回	図版	グリッド	検出層位	規模(m)		点数	出土遺物	備考
					長さ	幅			
LCF-1	17	3	L-26区	V1層	1.47	1.36	2,537	土器、石鏃、スクレイパー、 U・Rフレイク、フレイク	

表11 旧石器ブロッカー一覧表

遺構名	回	図版	グリッド	検出層位	規模(m)		点数	出土遺物	備考
					長さ	幅			
SB-1	19	4	Q-40・41区	V-VI・ FⅤ層	約4.8	約3.7	21	MB・MSP・BL・BU・E S・磨製石斧・たつき石・FK	
SB-2	20	4	K-42・43区、 L-41～43区	V-VI・ FⅤFⅥ層	約9.8	約4.3	23	MB・BL・RS・RF・ FK・PB	
SB-3	21	4	N-39区、 O-39・40区	V-VI・ FⅤFⅥ層	約5.6	約3.0	12	BL・ES・FK	

表12 擬似焼土一覧表

遺構名	グリッド	検出層位	平面形態	規模 (m)			色調	野外土性	層序	粘着性	堅密度	備考
				長さ	幅	層厚						
L F-1	N-25区	Ⅲ層	楕円形	0.31	0.25	0.03	暗赤褐色 (2.5YR3/2)	壤土	明確	弱	堅密度	Ⅳ層の門の裏層
L F-1	Q-20区	V 2層	円形	0.56	0.51	0.02	暗赤褐色 (2.5YR3/2)	埴壤土	判然	中	軟	
L F-2	O-24区	F層 (V 2層面)	小角形 (扇形)	0.56	0.32	0.02	暗赤褐色 (2.5YR3/3)	埴土	明確	中	軟	風割本層内
L F-3	T-24区	F層 (V 2層面)	楕円形	0.68	0.61	0.02	暗赤褐色 (2.5YR3/4)	壤土	判然	なし	中	風割本層内
L F-4	G-28・29区	F層 (V 2層面)	小角形 (扇形)	0.48	0.27	0.02	暗赤褐色 (2.5YR3/2)	壤土	明確	弱	軟	風割本層内
L F-5	T-16・17区	F層 (V 2層面)	不整形	0.96	0.58	0.22	赤褐色 (2.5YR4/6) 暗赤褐色 (2.5YR3/2)	埴土 埴土	明確 判然	弱 強	堅 軟	風割本層内
L F-6	U-21区	F層 (V 2層面)	楕円形	0.20	0.16	0.03	暗赤褐色 (2.5YR3/4)	壤土	明確	弱	軟	風割本層内
L F-7	H-21・22区	本相層瓦 (Ⅲ層面)	楕円形	0.28	0.22	0.01	暗赤褐色 (2.5YR3/2)	壤土	明確	弱	軟	
L F-8	H-21・22区	本相層瓦 (Ⅲ層面)	楕円形	0.21	0.16	0.01	暗赤褐色 (2.5YR3/2)	壤土	明確	弱	軟	
L F-9	L-16区	F層 (Ⅲ層面)	不整形楕円形	0.90	0.51	0.17	暗赤褐色 (2.5YR3/2)	壤土	明確	弱	軟	風割本層内
L F-10	K-16区	F層 (Ⅲ層面)	長楕円形	0.41	0.13	0.09	暗赤褐色 (2.5YR3/2)	壤土	明確	弱	軟	風割本層内
L F-11	Q-18区	F層 (Ⅲ層面)	不整形	0.81	0.34	0.07	暗赤褐色 (2.5YR3/3)	壤土	明確	弱	軟	風割本層内
L F-12	K-17区	F層 (Ⅲ層面)	小角形 (扇形)	0.71	0.37	0.03	暗赤褐色 (2.5YR3/3)	壤土	明確	弱	堅	風割本層内
L F-13	F-28区	F層 (Ⅲ層面)	不整形	0.45	0.20	0.10	赤褐色 (2.5YR4/6) 暗赤褐色 (2.5YR3/2)	砂壤土 埴土	明確 判然	弱 強	堅 軟	風割本層内
L F-14	I・J-22区	F層 (V 2層面)	不整形楕円形 (板目形)	0.33	0.19	0.02	暗赤褐色 (2.5YR3/6)	壤土	明確	中	堅	風割本層内
L F-15	J-23・24区	F層 (V 2層面)	楕円形 (扇形)	0.42	0.31	0.01	暗赤褐色 (2.5YR2/3)	壤土	判然	弱	堅	風割本層内
L F-16	J-24・25区	F層 (Ⅲ層面)	楕円形	(0.23)	(0.15)	0.02	暗赤褐色 (2.5YR2/2)	壤土	明確	弱	堅	風割本層内
L F-17	J-23区	F層 (Ⅲ層面)	橢圓形	0.74	0.30	0.05	暗赤褐色 (2.5YR3/2)	壤土	明確	弱	堅	風割本層内
L F-18	T-27区	F層 (V 2層面)	楕円形	0.32	0.20	0.12	暗赤褐色 (2.5YR3/6)	壤土	判然	弱	軟	風割本層内
L F-19	L-25区	F層 (V 2層面)	不整形	1.91	0.44	0.01	暗赤褐色 (2.5YR3/2)	壤土	明確	弱	軟	風割本層内
L F-20	J・K-25区	F層 (V 2層面)	楕円形	0.51	0.29	0.01	暗赤褐色 (2.5YR3/2)	壤土	明確	弱	堅	風割本層内
L F-21	R-26区	F層 (Ⅲ層面)	楕円形	0.43	0.38	0.04	暗赤褐色 (2.5YR3/2) 暗赤褐色 (2.5YR2/4)	埴土 壤土	明確 判然	弱 強	軟 軟	風割本層内
L F-22	R-26区	F層 (Ⅲ層面)	不整形	0.44	0.28	0.05	暗赤褐色 (2.5YR3/4) 暗赤褐色 (2.5YR2/3)	埴土 壤土	明確 判然	弱 強	軟 軟	風割本層内
L F-23	Q-25区	F層 (V 2層面)	不整形	0.52	0.45	0.02	暗赤褐色 (2.5YR3/4)	壤土	判然	弱	軟	風割本層内
L F-24	U-32・33区	F層 (Ⅲ層面)	円形	0.31	0.29	0.12	暗赤褐色 (2.5YR4/6)	壤土	明確	弱	軟	風割本層内
L F-25	R-22・23区	F層 (Ⅲ層面)	円形	0.36	0.32	0.08	暗赤褐色 (2.5YR4/6)	壤土	明確	弱	軟	風割本層内
L F-26	S-29区	F層 (Ⅲ層面)	円形	0.36	0.31	0.04	暗赤褐色 (2.5YR3/6)	壤土	判然	弱	軟	風割本層内
L F-27	T-27区	F層 (Ⅲ層面)	楕円形	0.22	0.15	0.05	暗赤褐色 (2.5YR3/4)	壤土	明確	弱	軟	風割本層内
L F-28	T-31・32区	F層 (Ⅲ層面)	楕円形	0.51	0.41	0.12	暗赤褐色 (2.5YR3/3)	壤土	明確	弱	軟	風割本層内
L F-29	S-31・32区	F層 (Ⅲ層面)	楕円形	0.49	0.31	0.17	暗赤褐色 (2.5YR3/2)	壤土	明確	弱	軟	風割本層内
L F-30	S-32区	F層 (Ⅲ層面)	不整形 (橢圓形)	0.20	0.07	0.06	暗赤褐色 (2.5YR3/2)	埴土	明確	弱	堅	風割本層内
L F-31	P-23区	F層 (Ⅲ層面)	不整形	0.44	0.19	0.07	暗赤褐色 (2.5YR3/4)	シルト質壤土	明確	弱	堅	風割本層内
L F-32	N-21区	F層 (V 2層面)	不整形	2.66	1.17	0.02	暗赤褐色 (2.5YR2/2)	シルト質埴土	明確	中	堅	風割本層内 下位:L F-38
L F-33	L-28区	F層 (Ⅲ層面)	不整形	0.30	0.23	0.07	暗赤褐色 (2.5YR4/8) 暗赤褐色 (2.5YR3/4)	埴土 埴土	明確	弱	堅	風割本層内
L F-34	M・N-24区	F層 (Ⅲ層面)	不整形	0.35	0.30	0.03	暗赤褐色 (2.5YR3/2)	シルト質壤土	明確	中	堅	風割本層内
L F-35	M-20区	F層 (Ⅲ層面)	不整形	0.79	0.57	0.07	暗赤褐色 (2.5YR3/4) 暗赤褐色 (2.5YR2/3)	シルト質埴土 シルト質埴土	明確	弱	堅	風割本層内
L F-36	M-23区	F層 (Ⅲ層面)	不整形	0.18	0.13	0.02	暗赤褐色 (2.5YR2/4)	埴土	明確	中	堅	風割本層内
L F-37	K-26区	F層 (V 2層面)	扇形	0.33	0.19	0.07	暗赤褐色 (2.5YR3/2) 暗赤褐色 (2.5YR2/4)	シルト質埴土 シルト質埴土	明確	中	堅	風割本層内
L F-38	N-21区	F層 (Ⅲ層面)	不整形	1.05	0.49	0.25	暗赤褐色 (2.5YR4/6)	シルト質埴土	明確	中	堅	風割本層内 上位:L F-32
L F-39	J-27区	F層 (Ⅲ層面)	橢圓形	1.05	0.49	0.25	暗赤褐色 (2.5YR3/2)	埴土	明確	中	堅	風割本層内
L F-40	M-32区	F層 (Ⅲ層面)	楕円形	0.26	0.21	0.04	暗赤褐色 (2.5YR3/2)	埴土	明確	中	堅	風割本層内
L F-41	N-32区	F層 (Ⅲ層面)	不整形	0.48	0.36	0.10	暗赤褐色 (2.5YR3/2)	埴土	明確	中	堅	風割本層内
L F-42	E-28 E・F-29区	F層 (Ⅲ層面)	不整形	3.46	2.78	0.96	赤褐色 (2.5YR4/8) 暗赤褐色 (2.5YR3/4)	埴土 埴土	明確	弱	軟	風割本層内 下位:L F-45
L F-43	H-28区	F層 (Ⅲ層面)	不整形	0.76	0.41	0.04	暗赤褐色 (2.5YR3/2)	埴土	明確	弱	堅	風割本層内
L F-44	M-27区	F層 (Ⅲ層面)	不整形	0.80	0.44	0.03	暗赤褐色 (2.5YR3/4)	埴土	明確	弱	堅	風割本層内
L F-45	E-28 E・F-29区	F層 (Ⅲ層面)	不整形	1.84	0.75	0.34	赤褐色 (2.5YR4/8) 暗赤褐色 (2.5YR3/4)	埴土 埴土	明確	弱	堅	風割本層内 上位:L F-42

表13 道跡一覧表

道構名	図	図版	グリッド	層位	規模(m)			備考
					長さ	幅	深さ	
旧層上面の道跡	9・22	4	P-S-16・17、T-17区	III層	約18	1.2~0.4	0.02~0.04	建設機械等の走行痕?
現代の道跡	9・12・23	4	調査区外-E-39区~U-44区 ~調査区外	I層	68以上	4.0~4.6	0.68(最大)	東西方向、調査区外に続く

表14 土器(破片)集中出土器点数表

遺物種別 / 遺構名・層位		遺構名・層位	LPS-1 FV層	UPSP-1 FIII層	合計			
時期	部位				残存状態	合計	合計	
V群	口縁部 (ri)	良好	5	小計	4	小計	9	小計
		剝離					0	
		磨耗 小破片		5		4	0	
	底部 (ba)	良好		小計	3	小計	3	小計
		剝離					0	
		磨耗 小破片		0		3	0	
	胴部 (bo)	良好	7	小計	15	小計	22	小計
		剝離			48		48	
		磨耗 小破片	3	10	65	128	0	
	不明 その他	良好		小計		小計	0	小計
		剝離					0	
		磨耗 小破片		0		0	0	
小計			15		135		150	
未分類	口縁部 (ri)	良好		小計		小計	0	小計
		剝離					0	
		磨耗 小破片		0		0	0	
	底部 (ba)	良好		小計		小計	0	小計
		剝離					0	
		磨耗 小破片		0		0	0	
	胴部 (bo)	良好		小計		小計	0	小計
		剝離					0	
		磨耗 小破片		0		0	0	
	不明 その他	良好		小計		小計	0	小計
		剝離					0	
		磨耗 小破片		0		0	0	
小計			0		0		0	
土製品							0	
合計			15		135		150	

表15 LFC-1出土器点数表

遺物種別 / 遺構名・層位		遺構名・層位	LFC-1 V1層	合計		
時期	部位			残存状態	合計	合計
未分類	口縁部 (ri)	良好	小計	0	小計	
		剝離			0	
		磨耗 小破片		0		0
	底部 (ba)	良好	小計	0	小計	
		剝離			0	
		磨耗 小破片		0		0
	胴部 (bo)	良好	小計	0	小計	
		剝離			3	
		磨耗 小破片	3	3	0	3
	不明 その他	良好	小計	0	小計	
		剝離			0	
		磨耗 小破片		0		0
小計			3		3	
土製品					0	
合計			3		3	

表16 LFC-1出土石器類点数表

遺物種別 / ブロック名・層位		遺構名・層位	残存状態	LFC-1		合計
群	器種			V1層	V2層	
石器	石鏃	完形	小計	2	小計	0
		準完形		3		2
		半形	1	1	6	4
	スクレイパー	完形	小計	1	小計	1
		準完形		4		4
		半形	4	4	8	1
U・Rフレイク			4	2	17	19
合計			1,407	1,062	2,499	
合計			1,414	1,123	2,537	

表17 S B出土石器類点数表

群 遺構 遺物別/プロ/ク&・層位		SB-1						SB-2						SB-3						合計					
		V層	W層	焼層	FV層	FV層	合計	V層	W層	焼層	FV層	FV層	合計	V層	W層	焼層	FV層	FV層	合計						
M B	実形	1		1	小計	1	小計	1	小計	2	小計	1	小計	0	小計	4	小計	0	小計	0	小計	1	小計	6	合計
	実形	1		1	小計	2	小計	2	小計	2	小計	1	小計	0	小計	4	小計	0	小計	0	小計	0	小計	1	小計
	片																								
	平形	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
M C	実形				0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	平形																								
M S P	実形				2	2	2	2	2	2	2	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	実形	1		1	小計	1	小計	1	小計	1	小計	1	小計	0	小計	1	小計	0	小計	1	小計	0	小計	0	2
	片																								
	平形																								
B L	実形	1		1	小計	1	小計	1	小計	1	小計	1	小計	0	小計	1	小計	0	小計	1	小計	0	小計	1	小計
	実形	1	2	1	1	0	5	0	1	3	0	0	1	1	5	2	0	0	1	1	3	4	14	合計	
	片																								
	平形																								
B U	実形	1		1	小計	1	小計	1	小計	1	小計	1	小計	0	小計	0	小計	0	小計	0	小計	0	小計	0	0
	実形	1		1	小計	1	小計	1	小計	1	小計	1	小計	0	小計	0	小計	0	小計	0	小計	0	小計	0	0
	片																								
	平形	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
E S	実形				1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	実形	1		1	小計	1	小計	1	小計	1	小計	1	小計	0	小計	0	小計	1	小計	0	小計	1	小計	1	小計
	片																								
	平形	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	3	
R S	実形				1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	実形	1		1	小計	1	小計	1	小計	1	小計	1	小計	0	小計	0	小計	1	小計	0	小計	0	小計	0	小計
	片																								
	平形	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
群 磨製石片	実形				0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	実形	1		1	小計	1	小計	1	小計	1	小計	1	小計	0	小計	0	小計	0	小計	0	小計	0	小計	0	0
	片																								
	平形	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
女工巻石	実形				1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	実形	1		1	小計	1	小計	1	小計	1	小計	1	小計	0	小計	0	小計	0	小計	0	小計	0	小計	0	0
	片																								
	平形	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
RF				0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
FK	2	1	4	7	3	2	1	2	1	1	10	2	1	1	2	1	1	1	1	1	1	2	6	23	
P B				0	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	6	
合計	5	4	10	2	21	4	7	1	3	4	4	5	23	4	1	1	1	1	1	1	2	3	12	96	

表18 UPS-1 出土復原土器観察表

図番号	図版	出土地点	層位	遺物番号	破片点数	計測値 (cm)			重量 (g)	部位	器種	備考 (分類・型式)
						器高	口径	底径				
24	1	5	UPS-1 F III層	4	24	(29.7)	10.4	20.2	800	口縁部～底部	浅鉢	V群c類
接合破片総点数		接合・同一個体破片		UPS-1・1(3)・2(3)・3(9)・5(8)・無(11)・O-35区・F III(1)								
29		*出土地点・遺物番号・層位 (点数)										
胎土 (混和材)		繊維	少量	粒徑	粗粒	種類	岩石主体	量	中量	備考		
文様・調整		色調	使用の痕跡	その他	部位 (残存率)	文様・調整	色調	使用の痕跡	その他			
外 面	L R 無組刻み	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	黒色化 炭化物付着	*	口唇部 (30%)							
	L R 斜行縄文	にぶい黄褐色 (10YR6/3)	黒色化		突起部	口縁部 (30%)	[口唇部にかけて] L R 無組刻み ヨコナデ	にぶい黄褐色～灰黄褐色 (10YR6/4～10YR5/2)	黒色化	*		内 面
	L R 斜行縄文	にぶい黄褐色 (10YR6/3)	黒色化 炭化物付着	*	胴部上半 (25%)	ヨコナデ	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	黒色化	*			
	L R 縦走縄文	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	黒色化	*	胴部下半～底部 (30%)	ヨコナデ	にぶい黄褐色 (10YR7/2)	黒色化 炭化物付着	*			
	L R 縄文	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	黒色化 炭化物付着		丸底	底面 (70%)	ナデ	(黒褐色)	黒色化 炭化物付着	*		

表19 LPS-1 出土復原土器観察表

図番号	図版	出土地点	層位	遺物番号	破片点数	計測値 (cm)			重量 (g)	部位	器種	備考 (分類・型式)
						器高	口径	底径				
24	2	5	LPS-1 F V層	*	13	(26.6)	(11.0)	8.4	390	口縁部～底部	浅鉢	V群c類
接合破片総点数		接合・同一個体破片		範囲確認調査出土遺物：SP8730-R20・V(14)								
27		*出土地点・遺物番号・層位 (点数)										
胎土 (混和材)		繊維	?	粒徑	中粒	種類	岩石・鉱物とも (あり)	量	中量	備考		
文様・調整		色調	使用の痕跡	その他	部位 (残存率)	文様・調整	色調	使用の痕跡	その他			
外 面	R L 斜行縄文	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	*	*	口唇部 (30%)							
	R L 縦走縄文 沈線文	明黄褐色～ にぶい黄褐色 (10YR7/6～ 10YR6/3)	黒色化	工字文風 沈線文 赤色顔料	口縁部 (30%)	L R 縄文 沈線文	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	*	*			
	R L 縦走縄文 沈線文	明黄褐色～ にぶい黄褐色 (10YR7/6～ 10YR6/3)	黒色化	赤色顔料	胴部上半 (25%)	ヨコナデ	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	黒色化	*			
	R L 縦走縄文	にぶい黄褐色 (10YR7/3)	黒色化	赤色顔料	胴部下半～底部 (20～5%)	ヨコナデ	灰黄褐色 (10YR5/2)	黒色化	*			
	R L 縄文	にぶい黄褐色 (10YR7/2 ～7/4)	*	*	底面 (80%)	ヨコナデ	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	黒色化	*			

表20 LFC-1 出土剥片石器群観察表

図番号	図版	出土地点	層位	遺物番号	器種	計測値 (cm)				重量 (g)	石材 名称 色調・特徴	残存 形態	特徴的な 使用・加工痕	備考
						最大長	最大幅	最大厚						
24	3	5	LFC-1 V1層	30	石鏃	(1.95)	1.30	0.35	0.60	黒曜石	透明	準定形	破損	水洗選別で回収
24	4	5	LFC-1 V1層	30	石鏃	(1.30)	1.05	0.25	0.26	黒曜石	*	準定形	破損	水洗選別で回収
24	5	5	LFC-1 V1層	37	スクレイパー	2.30	1.50	0.50	1.58	黒曜石	*	定形	微細割痕直 破損?	水洗選別で回収

表21 S B出土旧石器群観察表(1)

採掘 区	番号	図版	出土地点	層位	遺物 番号	器種	計測値 (cm)			重量 (g)	石材		残存 形態	特徴的な 使用・加工痕	備考	
							最大長	最大幅	最大厚		名称	色調・ 特徴				
25	3	6	SB-1	M	3	BU 彫器	9.7	3.2	1.0	28.1	頁岩	母赤褐色 灰白色	完形	微細割痕 彫刻刀面割痕		
25	4	6	SB-1	FV	19	ES エンドスクレイパー	8.3	3.8	1.3	39.9	頁岩	灰黄褐色 灰白色	完形	微細割痕		
25	5	6	SB-1	M	16	BL 石刃	(7.1)	3.2	1.0	18.5	頁岩	褐色 灰白色	準完形	微細割痕	破損	
25	6	6	SB-1	M	4	BL 石刃	(3.2)	1.8	0.6	2.6	頁岩	褐色色調	片	微細割痕 破損	被熱	
25	7	6	SB-1	V	13	BL 石刃	(3.5)	2.1	0.5	3.6	頁岩	灰白色	片	微細割痕	破損	
25	8	6	SB-1	M	9	BL 石刃	(3.5)	3.4	0.9	8.4	頁岩	黄灰色	片	微細割痕	破損	
25	9	6	SB-1	FV	18	BL 石刃	(2.4)	1.6	0.2	0.8	黒曜石	●	片	微細割痕 割痕	破損	
28	24	6	SB-1	M	21	MSP 細石刃核削片	1.9	0.5	0.3	0.2	頁岩	黒色	●	●	被熱	
28	25	6	SB-1	M	15	MSP 細石刃核削片	1.5	0.4	0.2	0.1	頁岩	灰黄褐色	●	●	調整割痕	
28	26	6	SB-1	M	11	MB 礫石刃	1.8	0.7	0.2	0.2	黒曜石	●	完形	微細割痕	折れ	
28	27	6	SB-1	V	6	MB 礫石刃	2.6	1.1	0.2	0.4	黒曜石	●	準完形	微細割痕	折れ	
28	28	6	SB-1	M	20	MB 礫石刃	1.1	0.5	0.1	0.07	黒曜石	●	準完形	微細割痕	折れ	
26	10	6	SB-2	V	11	RS ラウンドスクレイパー	5.2	2.9	0.5	9.1	頁岩	褐色色	完形	微細割痕 割痕	石刃素材	
26	11	6	SB-2	FV	10	BL 石刃	(7.2)	3.0	1.1	19.1	頁岩	灰白色	準完形	微細割痕	破損	
26	12	6	SB-2	M	19	BL 石刃	(5.8)	4.4	1.2	27.2	黒曜石	●	半形	微細割痕 破損	被熱	
26	13	6	SB-2	V	22	BL 石刃	9.3	2.0	1.1	14.4	頁岩	にぶい 褐色	完形	●	●	接付
26	14	6	SB-2	FV	5	BL 石刃	(4.0)	2.8	0.8	6.3	頁岩	にぶい 褐色	片	微細割痕	破損	
26	15	6	SB-2	M	16	BL 石刃	(2.2)	2.5	0.4	2.3	頁岩	黒褐色	片	微細割痕	破損	
26	16	6	SB-2	FV	15	RF リタッドフレイク	(1.5)	1.8	0.4	0.8	黒曜石	●	●	●	破損? 被熱	
26	17	6	SB-2	V	12	FK フレイク	(3.8)	1.4	0.7	3.2	頁岩	にぶい 褐色	●	●	●	
28	29	6	SB-2	FV	2	MB 礫石刃	(1.7)	0.8	0.2	0.2	黒曜石	●	準完形	微細割痕	破損	
28	30	6	SB-2	FV	6	MB 礫石刃	(1.1)	1.0	0.1	●	頁岩	褐色色	半形	微細割痕	破損	
28	31	6	SB-2	FV	4	MB 礫石刃	(2.1)	0.7	0.2	0.3	頁岩	褐色色	準完形	破損		
28	32	6	SB-2	FV	9	MB 礫石刃	(2.4)	1.2	0.2	0.5	黒曜石	赤色部分 あり	準完形	微細割痕	破損	BL 石刃?
28	33	6	SB-2	M	18	MB 礫石刃	(1.2)	0.7	0.1	0.1	黒曜石	●	半形	微細割痕	破損	
28	34	6	SB-2	FV	17	MB 礫石刃	(1.4)	0.6	0.1	0.1	黒曜石	透明	準完形	微細割痕	破損	
27	18	6	SB-3	FV	3	ES エンドスクレイパー	6.3	3.6	1.3	23.8	頁岩	にぶい 褐色 灰褐色	完形	微細割痕		
27	19	6	SB-3	M	10	ES エンドスクレイパー	(5.4)	2.9	1.1	18.0	頁岩	灰白色	準完形	微細割痕	破損	
27	20	6	SB-3	V	1	BL 石刃	2.7	1.1	0.5	1.3	黒曜石	●	半形	微細割痕 割痕	破損	
27	21	6	SB-3	FV	5	BL 石刃	(5.9)	2.3	0.7	11.8	頁岩	灰黄褐色	準完形	微細割痕	破損	ES エンドスクレイパー?
27	22	6	SB-3	V	12	BL 石刃	4.8	2.6	0.9	8.9	黒曜石	●	半形	微細割痕	破損	
27	23	6	SB-3	FV	8	BL 石刃	(2.6)	1.8	0.5	1.4	頁岩	褐色色	半形	微細割痕	破損	

表22 S B出土旧石器群観察表(2)

採掘 区	番号	図版	出土地点	層位	遺物 番号	器種	計測値 (cm)			重量 (g)	石材		残存 形態	特徴的な 使用・加工痕	備考
							最大長	最大幅	最大厚		名称	色調・ 特徴			
25	2	6	SB-1	V	10	磨礫石片	11.9	4.0	1.0	47.7	緑色泥岩	キリーブ 灰色	準完形	割れた後、磨耗	

表23 S B出土旧石器群観察表(3)

採掘 区	番号	図版	出土地点	層位	遺物 番号	破片数 小計 合計	器種	計測値 (cm)			重量 (g)	石材		残存 形態	特徴的な 使用・加工痕	備考
								最大長	最大幅	最大厚		名称	色調・ 特徴			
25	1	6	SB-1	M	12	1 1	たたき石	9.8	4.4	3.0	159.9	砂岩	細粒硬質	完形	割れ?	

V章 包含層出土の遺物

1 概要

二年度の調査で包含層から出土した遺物は土器17,669点、石器類772点、合計18,441点であり、9割以上が土器である。包含層調査は、Ⅲ章で述べたとおり、Ⅲ層のみ調査する部分（図5の⑤）・Ⅲ～Ⅵ層を調査する部分（図5の⑥）・Ⅴ・Ⅵ層のみを調査する部分（図5の⑦・⑧）に区分けされる。

包含層出土の遺物の出土のあり方を示すにあたり、一次整理のデータ（遺物登録台帳）から出土点数表・出土分布図を作成した。

本文中で、各遺物における特定の分類・器種の占める割合、層位ごとの出土割合、掲載した量等を示すのに百分率（小数第2位を四捨五入）を用いた。

出土点数表（表24・25）

*土器（表24）

時期の内訳はⅠ群31点（0.2%）・Ⅲ群36点（0.2%）・Ⅳ群11点（0.06%）・Ⅴ群17,011点（96.3%）・Ⅵ群21点（0.1%）・未分類557点（3.2%）でⅤ群が圧倒的に多い。また、未分類のうち542点（約97%）がⅢ層出土でⅤ群c類と考えられ、本遺跡の土器は100%近くがⅤ群土器である。

出土層位ごとの内訳は、Ⅲ層出土が16,032点（90.7%）、Ⅴ1層出土が834点（4.7%）、Ⅴ2層及びⅤ層出土が389点（2.2%）、Ⅵ層出土が42点（0.2%）、風倒木痕からの出土が327点（1.9%）であり、Ⅲ層出土のものが90%以上を占める。

部位及び残存状態の特徴は、各群とも胴部が多く、残存状態はⅤ群の剥離及び小破片が多い。また、磨耗破片は少ない。

上記のことから次のようにまとめられる。本遺跡はⅢ層出土の縄文時代晩期が主体である。またⅣ層（Ta-c）を挟んでⅤ1層からも同時期のものが多い。その他Ⅰ群・Ⅲ群・Ⅳ群・Ⅵ群は断片的な出土である。

*石器類（表25）

各石器群の内訳は旧石器群30点（3.9%）・剥片石器群504点（65.3%）・磨製石器群34点（4.4%）・礫石器群15点（1.9%）・石製品7点（0.9%）・自然礫（レキ）182点（23.6%）で剥片石器群が約2/3を占め、ついで自然礫が多い。

出土層位ごとの内訳は、Ⅲ層出土が406点（52.6%）、Ⅴ1層出土が36点（4.7%）、Ⅴ2層及びⅤ層出土が210点（27.2%）、Ⅵ層出土が47点（6.0%）、Ⅵ層出土が11点（1.4%）、風倒木痕からの出土が45点（5.8%）であり、Ⅲ層出土が過半数である。ついでⅤ2層・Ⅴ層からの出土が多く、土器の出土状況とは相違がある。

上記のことから次のようにまとめられる。Ⅲ層出土が最も多いが、土器の出土状況ほど極端に偏らない。出土点数が多い器種は石鏃・スクレイパー・磨製石斧である。

遺物全体の層位的な出土状況は、全調査面積に対しⅢ層を調査しない部分が概ね半分を占めるにもかかわらず、土器・石器類ともにⅢ層出土のものが非常に多い。

出土分布図（図29～43）

土器（図29～34）

総点数・時期分類・層位・残存状態ごとの出土分布図を作成した。

「土器総点数」では、出土が平成19年度調査区に多くさらにN-27区とその周囲のグリッドに集中

表25 包含層出土石器類点数表

遺物種別 / 単位	形状	位置	埋層	V層				VI層	VII層	風船木塚				その他 （埋層不明）	合計				
				V1層	V2層	V3層	V4層			V5層	V6層	V7層	V8層						
旧石器	MB	完形	小刃		小刃	小刃	2	小刃	1	小刃	3	小刃		小刃		小刃	9	小刃	
		連続形														小刃	6		
		半形	0	0	0	1	3	1	1	4	0	0	0	0	0	1	8		
	BL	完形	小刃		小刃	1	小刃	2	小刃	1	1	小刃		小刃	1	小刃	4	小刃	
		連続形														小刃	2		
		半形	0	0	0	1	1		3	1	3	0		1	1	0	8		
	SS	完形	1	小刃		小刃	1	小刃		小刃		小刃		小刃		小刃	5	小刃	
		連続形														小刃	2		
		半形	1	1	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	3		
	ES	完形	1	小刃		小刃		小刃		小刃		小刃		小刃		小刃	1	小刃	
		連続形														小刃	0		
		半形	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1		
RS	完形	小刃		小刃	1	小刃		小刃		小刃		小刃		小刃	1	小刃			
	連続形														小刃	0			
	半形	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1			
		F K						2	1	1			2			6			
旧石器類合計			2	0	2	7	6	8	0	3	1		1	0	30				
新石器	石器	完形	26	小刃	1	小刃	6	小刃	1	小刃		小刃		小刃	1	小刃	34	小刃	
		連続形	5												小刃	8			
		半形	3	36	2	2	8	0	1	2	0	0	1	0	0	2	50		
	石・ナイフ	完形	1	小刃		小刃		小刃		小刃		小刃		小刃		小刃	0	小刃	
		連続形														小刃	0		
		半形	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1		
	つまみ付きナイフ	完形	1	小刃		小刃	2	小刃		小刃		小刃		小刃		小刃	3	小刃	
		連続形														小刃	0		
		半形	2	3	0	2	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	6		
	スクレイパー	完形	8	小刃	1	小刃	2	小刃	1	小刃		小刃		小刃	1	小刃	13	小刃	
		連続形	8												小刃	1	小刃	12	
		半形	4	25	2	1	4	2	1	0	1	0	0	1	1	5	36		
U・Rフレイク	完形	23		2	2	3	1								1	32			
	連続形														小刃	6			
	半形	268	4	19	41	10	2	8	6	3	3	3	3	3	367				
		石核													1	4			
		フレイク・チップ		2											2				
断片石器類合計			363	12	35	47	14	2	9	7	3	4	8	504					
磨製石器	完形	3	小刃		小刃	1	小刃		小刃		小刃		小刃		小刃	4	小刃		
	連続形														小刃	2			
	半形	1	11	2	10	1	3	5	2	2	0	0	1	0	4	30			
		磨石	2												1	3			
磨製石器類合計			13	2	10	5	2	0	0	0	0	1	1	34					
礫	完形	1	小刃	1	小刃		小刃		小刃		小刃		小刃		小刃	0	小刃		
	連続形														小刃	2			
	半形	1	2	1	0	3	3	0	0	0	0	0	0	0	3	6			
礫石	完形	小刃		小刃		小刃		小刃		小刃		小刃		小刃	0	小刃			
	連続形														小刃	0			
	半形	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1			
台石・石皿	完形	小刃		小刃		小刃		小刃		小刃		小刃		小刃	1	小刃			
	連続形														小刃	0			
	半形	1	1	0	1	3	3	0	0	3	0	0	0	0	7	8			
礫石器類（石皿）合計			3	1	2	6	0	0	3	0	0	0	0	15					
玉	完形	小刃		小刃	1	小刃		小刃		小刃		小刃		小刃	1	小刃			
	連続形														小刃	0			
	半形	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2				
石器製品	完形	1	小刃		小刃		小刃	2	小刃		小刃		小刃		小刃	5	小刃		
	連続形														小刃	0			
	半形	1	0	1	0	0	2	0	1	0	0	0	0	0	0	5			
石器製品合計			1	0	2	2	2	0	2	0	0	0	0	7					
加工跡のある礫	完形	小刃		小刃		小刃		小刃		小刃		小刃		小刃	0	小刃			
	片	1	4	4	8	1	1	1	0	1	1	0	0	1	1	17			
	使用跡のある礫	小刃		小刃		小刃		小刃		小刃		小刃		小刃	0	小刃			
自然礫	完形	3	小刃	3	小刃	19	小刃	4	小刃	7	小刃	1	小刃	小刃	2	小刃	30	小刃	
	片	20	23	14	17	48	67	14	18	15	22	1	1	9	10	0	0	5	7
		23	24	17	25	19	23	1	11	0	0	0	0	8	182				
合計			406	36	126	84	47	11	25	10	4	6	17	772					

する。また、R-22区等はグリッド内から多数出土しているが、周囲のグリッドからはさほど点数が認められない。

「I群土器」は調査区南側部分、特にT-18区に集中がみられる。「III群土器」は調査区全体から散在的に出土している。「IV群土器」は両年度調査区の境界付近に少数、また、G-37区に多く認められる。「V群土器」は平成19年度調査区に多く、概ね「総点数」と同様なあり方を示す。「VII群土器」はM・N-28区に集中する。「土製品」はL・M-27区にのみ認められる。「未分類土器」はほとんどがV群土器であると考えられ、平成19年度調査区において散在的、また集中するグリッドがともに認められる。

「III層」では「土器総点数」と同様なあり方を示す。30ラインより北東側はIII層を調査しない範囲である。「V1層」では平成19年度調査区で散在的及び集中するグリッドがともに認められる。「V2層」では平成19年度調査区全体から散在的な出土である。「V層」では調査区全体から散在的な出土である。「VI層」ではまばらで、P-35区に集中がみられる。「風倒木痕（F層）」ではL-29区やT-30区のような集中するグリッドが認められるが、他は散在的である。

「良好」・「剥離」・「小破片」では概ね「土器総点数」と同様なあり方を示す。「磨耗」では平成19年度調査区に散在的に少数認められる。

石器類 (図34~43)

石器類総点数・群・器種・層位ごとの出土分布図を作成した。

「石器類総点数」ではL-16区やN-28区とその周辺のグリッドに集中があり、調査区のほぼ全体に分布が認められる。

土器総点数

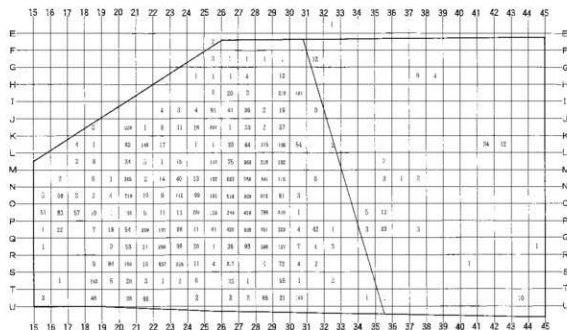


図29 包含層出土遺物分布図(1)

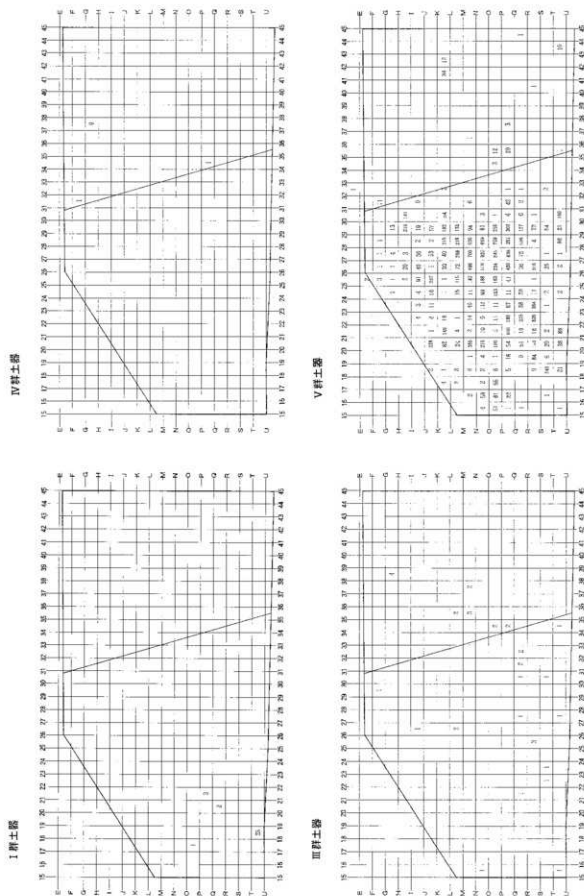
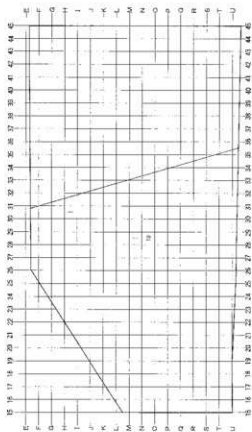
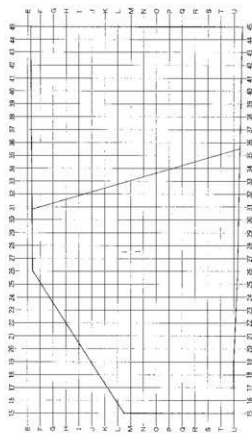


図30 包含層出土遺物分布図(2)

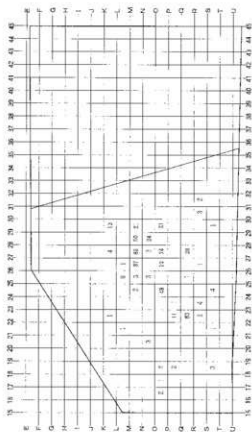
埋封土層



土留層



未分類土層



埋層

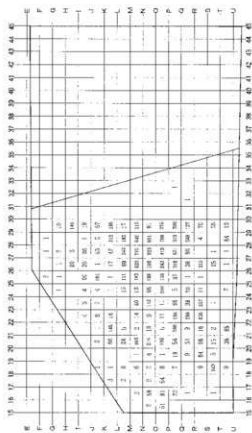


図31 包含層出土遺物分布図 (3)

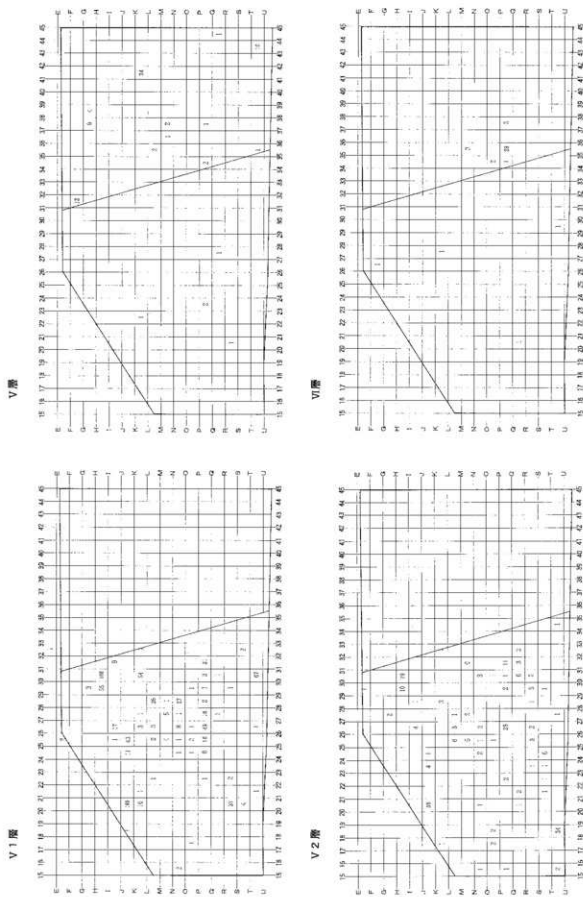
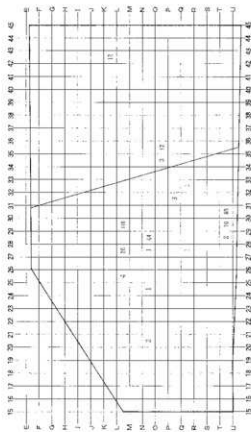
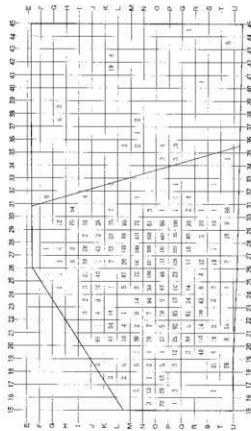


図32 包含層出土遺物分布図(4)

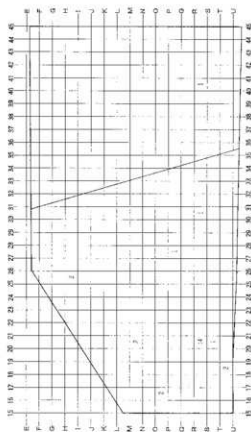
瓦葺本瓦(左層)



瓦葺



その他(雑瓦)



雑瓦

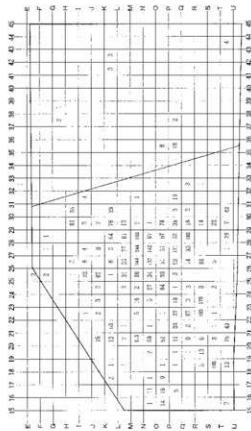
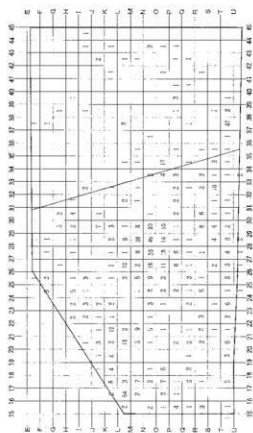
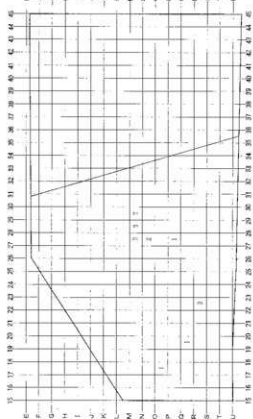


図33 包含層出土遺物分布図 (5)

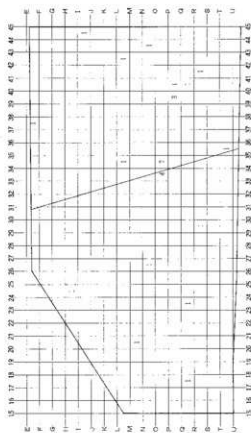
石器類の分布



磨石



旧石器群



小石片

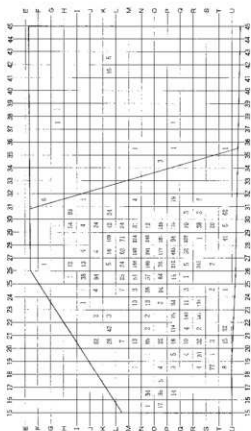
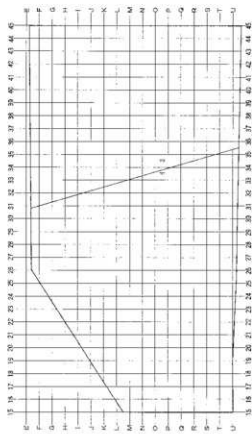
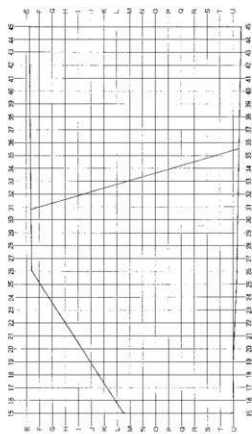


図34 包含層出土遺物分布図(6)

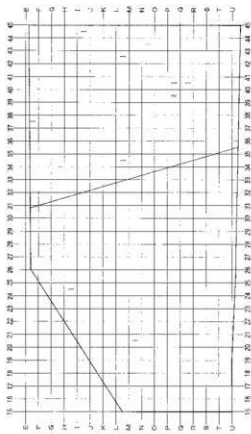
MB 磁石刃



ES 環器



BL 石刃



SS 附器

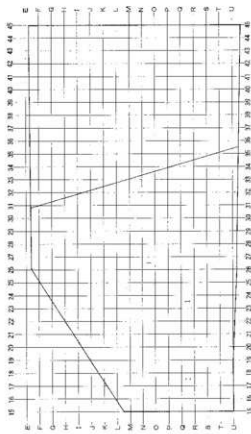


图35 包含層出土遺物分布图 (7)

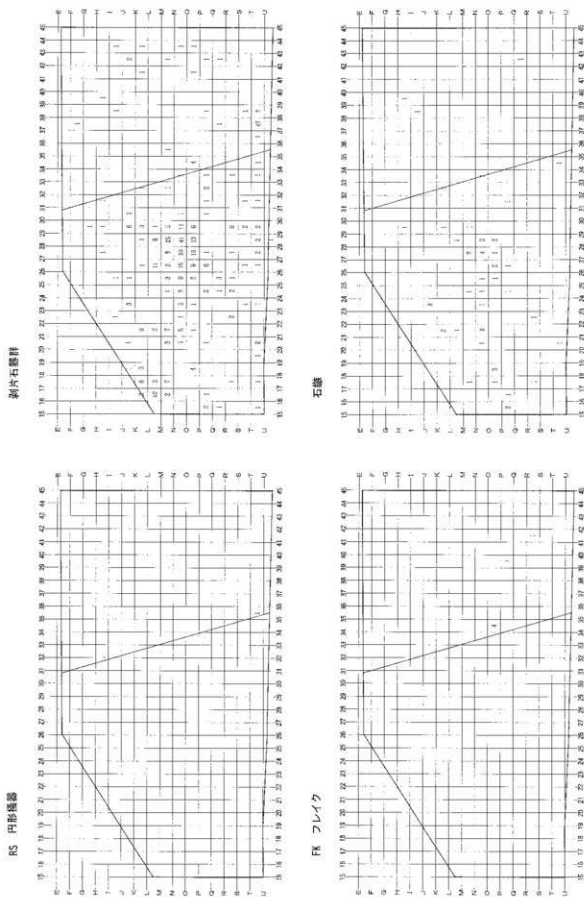
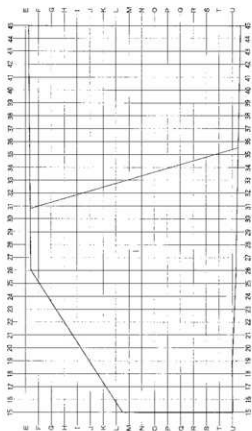
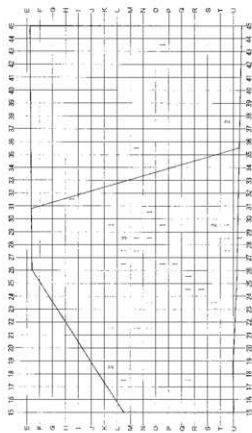


図36 包含層出土遺物分布図(8)

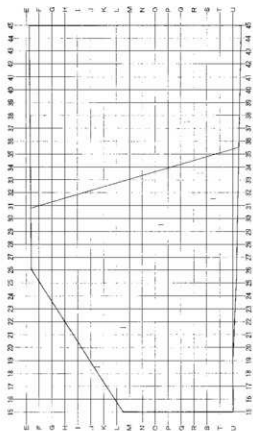
石槌



スクレイパー



つまみ付きナイフ



U・Rフレイク

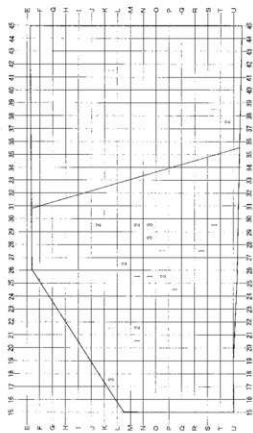


図37 包含層出土遺物分布図 (9)

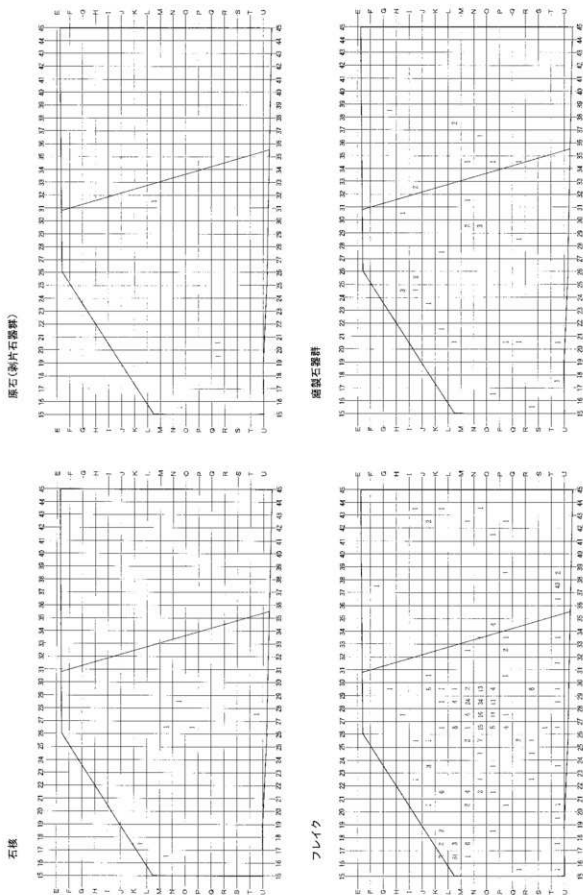
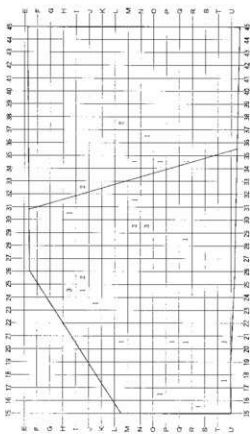
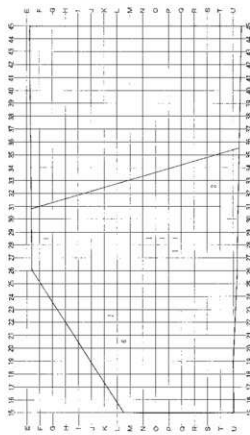


図38 包含層出土遺物分布図 (10)

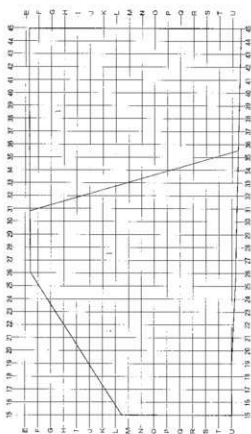
磨製石斧



磨石器群



磨製石斧原石



たつき石

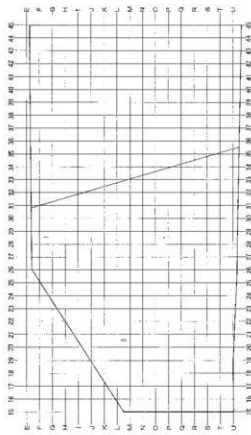


図39 包含層出土遺物分布図 (11)

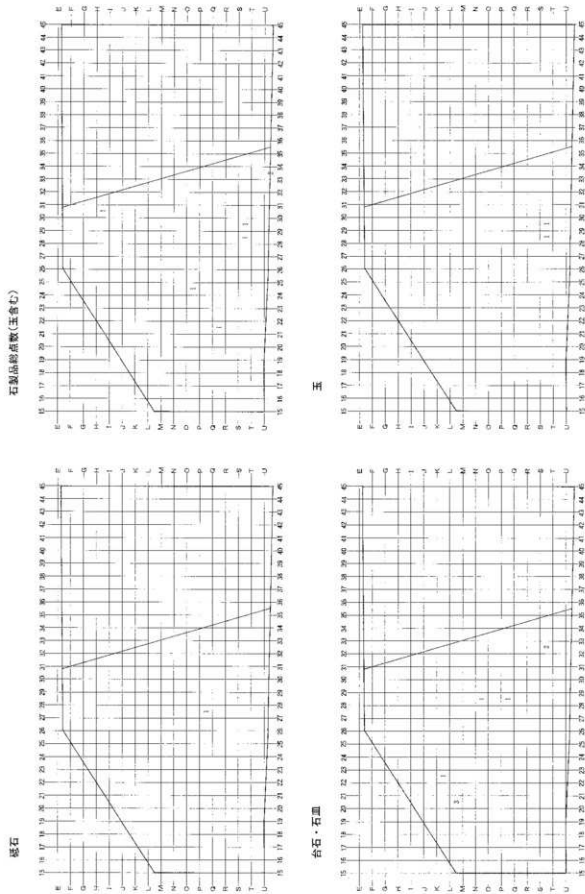
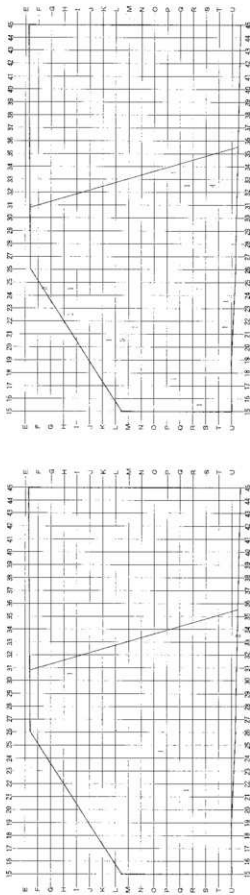
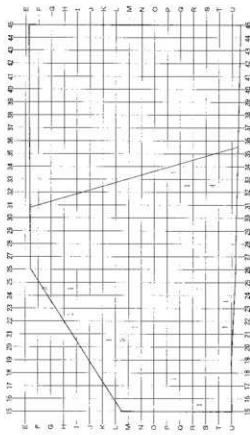


図40 包含層出土遺物分布図 (12)

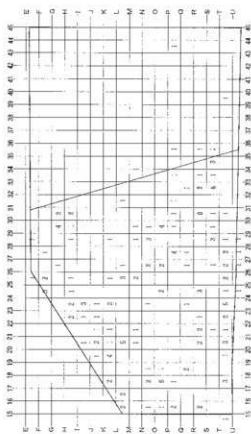
石製品 (玉以外)



加工・使用痕のある骨



硬砂産物



骨 (自然産)

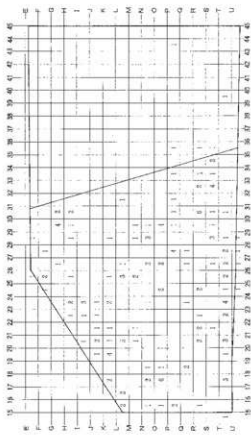


図41 包含層出土遺物分布図 (13)

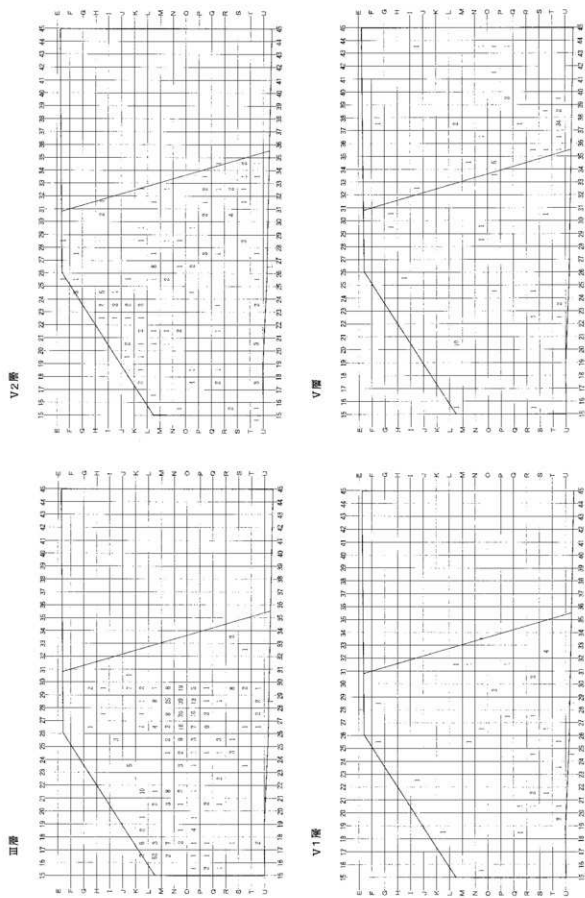
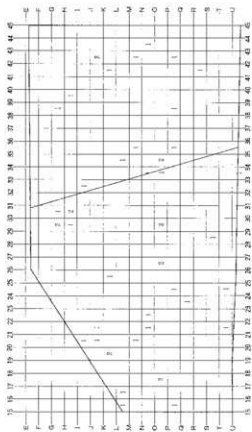
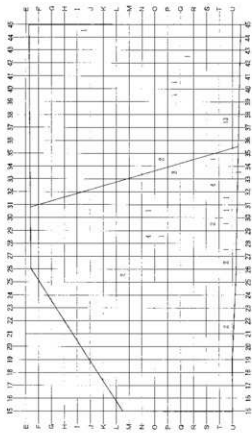


図42 包含層出土遺物分布図 (14)

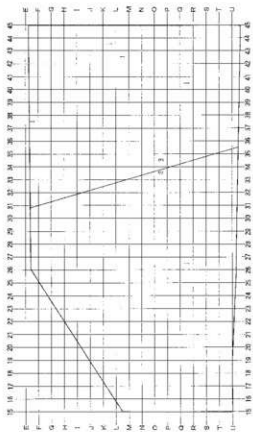
切跡



風明木風(1層)



埋層



その他(埋紙)

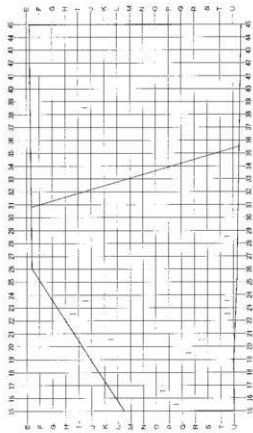


図43 包含層出土遺物分布図 (15)

「旧石器群」は散在的な出土でO-33・34区にやや集中する。「MB 細石刃」はO-33・34区にのみ認められる。「BL 石刃」は平成20年度調査区に多く散在的な出土である。「ES 搔器」はR-29区から1点の出土である。「SS 削器」は平成19年度調査区に散在的に認められる。「RS 円形搔器」はT-35区から1点の出土である。「FK フレイク」は平成20年度調査区にのみ少数認められる。

「剥片石器群」は「石器類総点数」とほぼ同様なあり方を示す。「石鏃」は平成19年度調査区からの出土が多く、極端に集中するグリッドはみられない。「石錐」はM-27区から1点の出土である。「つまみ付きナイフ」は少数が散在する。「スクレイパー」は調査区全体に認められるが、平成19年度調査区に多い。「U・R フレイク」は散在的である。「石核」は平成19年度のみからの出土で散在的である。「フレイク」は調査区全体に認められるが、L-16区、M・N-24区、T-37区に集中するグリッドがみられる。「原石（剥片石器群）」は平成19年度調査区から少数の出土である。

「磨製石器群」は調査区全体に散在的な出土である。「磨製石斧」は「磨製石器群」とほぼ同様である。「磨製石斧原石」はK-21・27区、G-38区からそれぞれ1点の出土である。

「礫石器群」は平成19年度調査区で少数が散在する。「たつき石」はF-28区、L-20区、O-28区からの出土である。「砥石」はP-27区から1点の出土である。「台石・石皿」は平成19年度調査区に散在的に認められる。

「石製品総点数（玉含む）」は平成19年度調査区に少数が散在的に認められる。「玉」はS-28・29区からそれぞれ1点ずつの出土である。「石製品（玉以外）」はH-30区、O-24区、Q-21区、U-33区からの出土である。

「礫総点数」では平成19年度調査区に多く散在的である。「加工・使用痕のある礫」は平成19年度調査区に散在的である。「礫（自然礫）」は「礫総点数」とほぼ同様なあり方を示す。

「Ⅲ層」では、平成19年度調査区に限られ、L-16区、N-28区とその周囲のグリッドに集中する。「V 1層」では、平成19年度調査区に散在的に出土がみられる。「V 2層」では、平成19年度調査区に出土が認められる。「V層」及び「VI層」では、調査区全体に散在的に認められる。「VII層」では、「旧石器群」とほぼ同様な在り方を示す。「風倒木痕（F層）」は、調査区の中央付近から、東側よりにみられる。

遺物の分布のあり方については、次のようにまとめられる。調査対象とする層の違いもあり、一概にはいえないが、土器・石器類ともに、平成19年度調査区のⅢ層からの出土が多い。一方、旧石器群は、平成20年度調査区に多く分布が認められる。本遺跡の主な時期は、Ⅲ・V層出土のV群土器と石器類であり、調査区の中央～南側部分を中心にみられる。もう一つは旧石器群で、旧石器ブロック（SB）も考慮すると平成20年度調査区を中心にみられ、これらの時期以外の遺物は断片的といえる。

2 土器

(1) 復原土器 (図44～51 表26～66 図版7～14)

*Ⅲ層出土の復原土器 (1～33)

33個体を復原した。復原土器の総破片数は1,229点で出土総点数の7.0%である。1は椀文土器の鉢、2～16は深鉢、17～24は鉢、25～30は浅鉢、31・32は舟形土器、33は壺形土器である。

鉢（椀文土器）

1は大きく開く口縁部から底部へと直線的にすばまる器形を呈し、外面にはタテハケがみられる。

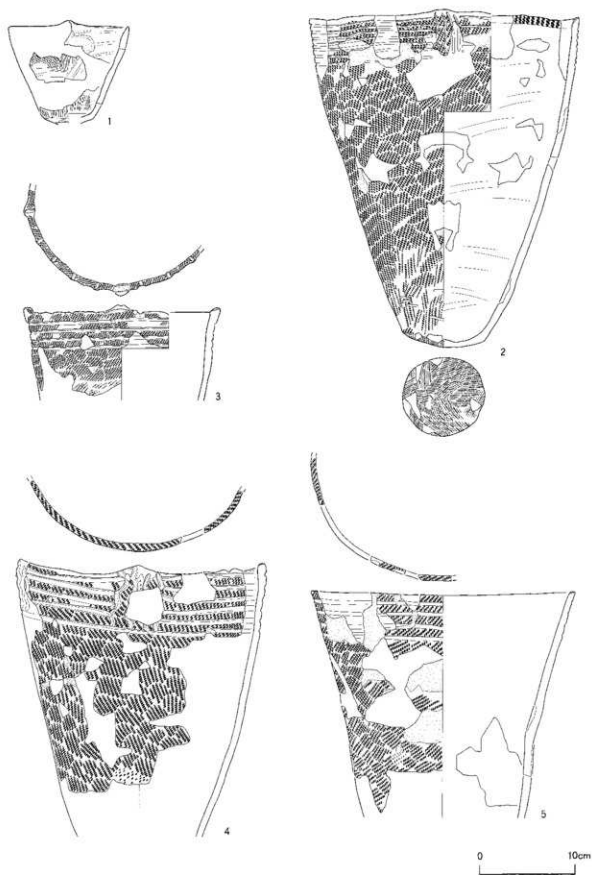


図44 包含層出土の復原土器（1）

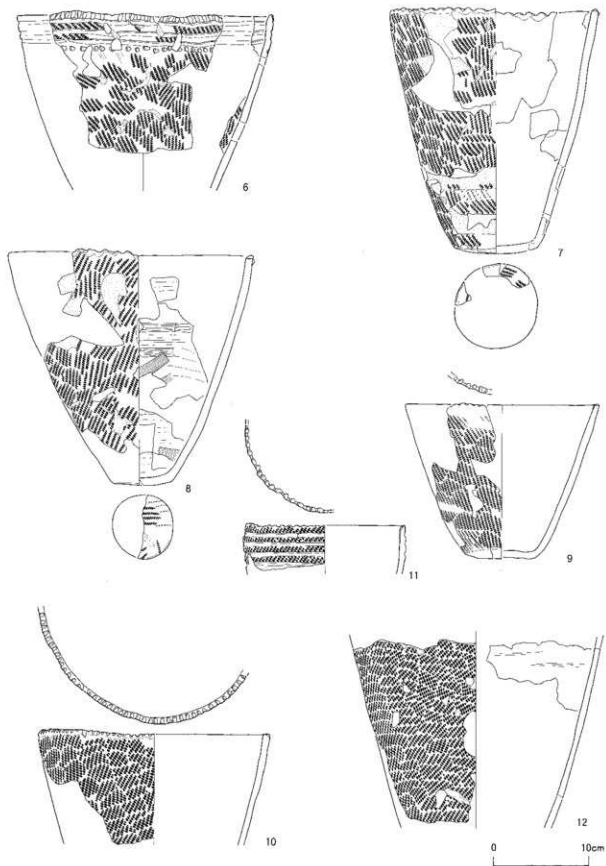


図45 包含層出土の復原土器（2）

深鉢形土器

2は直立気味の口縁部から底部へと若干曲線的にすぼまる器形を呈する。外面にはL R縦走縄文が施され、口縁部には横走沈線文と垂下する直線的な複数の沈線文がある。口唇部～内面にかけてはL R燃紐刻みが施され、胴部下位～底部付近はRの条と沈線文がみられる。3は直立気味の口縁部から胴部へ至る器形を呈し、外面はL R斜行縄文と複数の沈線文がある。口縁部は小突起を有し、L R縄文と棒状工具による刻みが施される。4は波状口縁で、若干内湾する口縁部から曲線的に胴部へ至る器形である。外面はR L縄文が施され、口縁部には横走沈線文と曲線的な蛇行沈線文がみられる。口唇部はR L縄文である。5は開口する口縁部から胴部中位まで直線的にすぼまり、そこから直線的に胴部下位へ至る器形を呈する。外面は剥離面が目立ち、地文はR L縦位回転施文と考えられる。口縁部には平行沈線文が施される。6は若干内湾する口縁部から底部へと直線的にすぼまる器形を呈する。外面はR L斜行縄文で、口縁部には平行沈線文及び刺突文列が施される。口唇部から外面にかけては棒状工具による刻みがみられる。7は直立気味の口縁部から緩やかに底部へと至る器形を呈する。外面は剥離面が目立ち、R L縦走縄文が施される。口唇部の棒状工具による施文により、口縁部は小波状が連続する形態を呈する。8は直立気味の口縁部から底部へと曲線的にすぼまる器形を呈する。外面はL R縦走縄文で、指あるいは棒状工具による口唇部の施文で、口縁部は小波状が連続する形態である。底外面にも条が観察される。9は開口する口縁部から直線的に底部につながる器形を呈する。鉢に分類する方が適切かもしれない。外面はR L縦走縄文が施され、口唇部は棒状工具による刻みがある。10は口縁部から直線的に胴部中位へと至る器形で、外面は縦走気味のL R縄文、口唇部は棒状工具による刻みが施される。11は直立気味の口縁部で、外面はL R縄文地に平行沈線文が施される。口唇部上の棒状工具による施文により、口縁部は小波状が連続してみえる。12は胴部から直線的に底部へすぼまる器形と推測され、外面はL R縄文が施される。13は直立気味の胴部上位から直線的にすぼまる器形を呈し、外面にはL R斜行縄文が施される。14は緩やかにふくらむ胴部から曲線的に底部へと至る器形を呈する。外面はR L縦走縄文で、底外面にもR L縄文がみられる。15は直線的に底部へとすぼまる器形で顕著な丸底を呈する。L R縄文が外面は横走気味、底外面は羽状を呈するよう施される。16は曲線的に底部へとつながる器形を呈し、丸底で下面観は楕円形である。外面及び底外面にL R縄文が施される。

2～16はV群c類タンネットウL式に相当する。

鉢形土器

17は曲線的に開口縁部から緩やかにふくらみながら底部へ至る器形を呈する。外面はL R斜行縄文で、口縁部は複数の横走沈線文、突起部は垂下する蛇行沈線文が施される。口唇部から内面にかけて一部縄文がある。18は上面観が不整な楕円形で、直立する口縁部から曲線的に底部に至る器形を呈する。山形の突起が二個一組で認められ穿孔が施される。外面はL R斜行縄文地に曲線的な沈線文がみられる。底部は丸底で縄文と指頭による圧痕文がある。19は大きく開口縁部から曲線的に底部に至る器形で突起部を有する。外面は剥離面が目立ち、口縁部はL R縄文地に曲線的な沈線文が施される。口唇部はR L縄文と棒状工具による刻み、突起部分は指頭による凹みがみられる。内面にも突起部分を中心に沈線文が施される。20は開口する口縁部から底部へと直線的にすぼまる器形で、外面はR L縄文、口唇部から内面にかけてはR L燃紐刻みが施される。21は開口する口縁部から直線的に底部へ至る器形を呈し、口唇部、外面、底外面にR L縄文が施される。22はミニチュア土器で、成形痕と考えられる指頭圧痕がみられる。23は開口する口縁部から胴部へとすぼまる器形を呈し、外面にR L縄文が施される。口唇部は棒状工具による施文がある。24は胴部下位～底部でL R縄文がみられる。

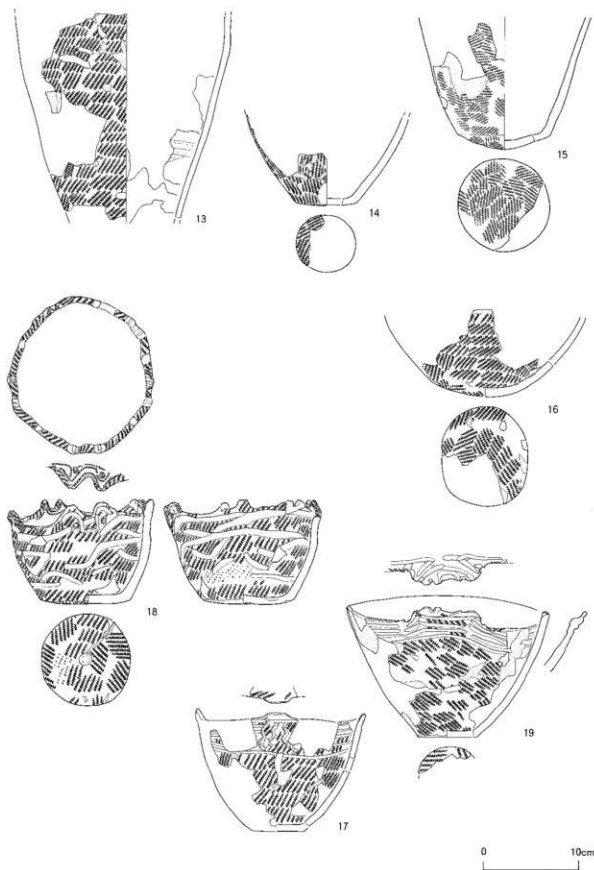


図46 包含層出土の復原土器(3)

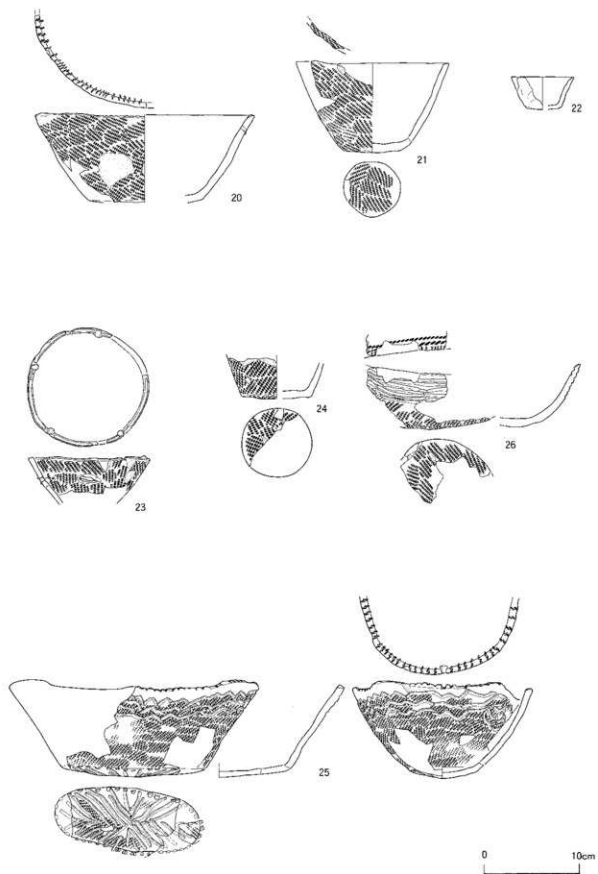


図47 包含層出土の復原土器（4）

17~24はV群c類タンネトウL式に相当する。

浅鉢形土器

25は大きく開口する口縁部から直線的に底部に至る器形を呈し、上面観は楕円形である。外面はLR縄文と山形沈線文が施され、口唇部はLR捻紐と棒状工具により施文される。底部は丸底で縄文と沈線文がみられ、胴部との境には刺突文を列状に施し区画する意図がうかがえる。26は開口する口縁部から曲線的に底部へと至る器形を呈する。口縁部は無文地に複数の横走沈線文があり、胴部はLR、底外面はRL縄文が施される。内面はRL縄線文がみられる。27は大きく開く口縁部から曲線的に底部へとつながる器形で、上面観は楕円形様で短径部分は直線を呈すると推測する。外面はRL縄文で、口唇部から内面にかけてL捻紐刻み、刺突文、沈線文、円形刺突文が組み合わされて施される。28は大きく開口する口縁部から曲線的に底部へと至る器形で、外面はLR斜行縄文がみられる。口唇部から内面にかけて捻紐刻み、棒状工具による刻み、捻紐圧痕文、沈線文が施される。29は大きく開く口縁部から曲線的に底部に至る器形で、上面観は縦長の六角形を呈すると推測する。外面はLR縄文で、口唇部から内面にかけては捻紐刻み、棒状工具による刻み、R縄線文、円形刺突文が組み合わされて施される。30は大きく開く口縁部から曲線的に底部へと至る器形で、外面はLR縄文がみられる。口唇部は突起を有し、LR原体による縄文及び捻紐圧痕文が施される。

25~30はV群c類タンネトウL式に相当する。

舟形土器

31は直立気味の口縁部から胴部へと直線的につながり、そこから曲線的に底部へとすはまる器形を呈する。上面観は楕円形で、突起を有し直下の外面に粘土が貼付けられる。外面はLR縄文、口縁部は工字文風の沈線文で、この内部には横位の縄線文がみられる。また、沈線文内に赤色顔料が付着している部分がある。32は曲線的に反外する頸部から胴部・底部へと至る器形で、上面観は楕円形を呈する。頸部はRL縄文がみられ、胴部上半は無文帯で刻みが施された段で区画され、その下半はRL縄文地に曲線的な沈線文が施される。底外面はRL縄文と沈線文状の調製痕がみられる。

31・32はV群c類タンネトウL式に相当する。

壺形土器

33は頸部から胴部上位(肩部)で、すはまった頸部から胴部へと曲線的にふくらむ器形を呈する。頸部は上下を沈線文により区画された無文帯で、胴部上位はRL縄文地に横走する沈線文が施される。

33はV群c類タンネトウL式に相当する。

*V1・V2・V層出土の復原土器(34~39)

6個体を復原した。復原土器の総破片数は286点で出土総点数の1.6%である。34~37は深鉢、38は鉢、39は皿形土器である。

深鉢形土器

34は直立する頸部から緩やかに底部へと至る器形である。外面はRL縄文地に横走する直線的な沈線文と山形の沈線文がみられ、半円状の沈線文が複数入れ子状に組み合わされた文様も施される。35は直立する口縁部から若干頸部ですはまり、そこからわずかにふくらんで直線的に底部に至る器形で、口縁部はL縄線文と垂下する沈線文がみられる。頸部の器形の変化点には刺突文列があり、胴部はRL縄文である。口唇部はL捻紐と棒状工具による施文が観察され、口縁部は小波状が連続する形態である。36は胴部から直線的に底部へと至る器形で、外面及び底外面にRL縄文が施される。37は直立気味の胴部から底部へとつながる筒形の器形を呈し、外面と底外面にLR縄文が施される。

34~36はV群c類タンネトウL式、37はⅢ群b類葎ヶ岡式に相当する。

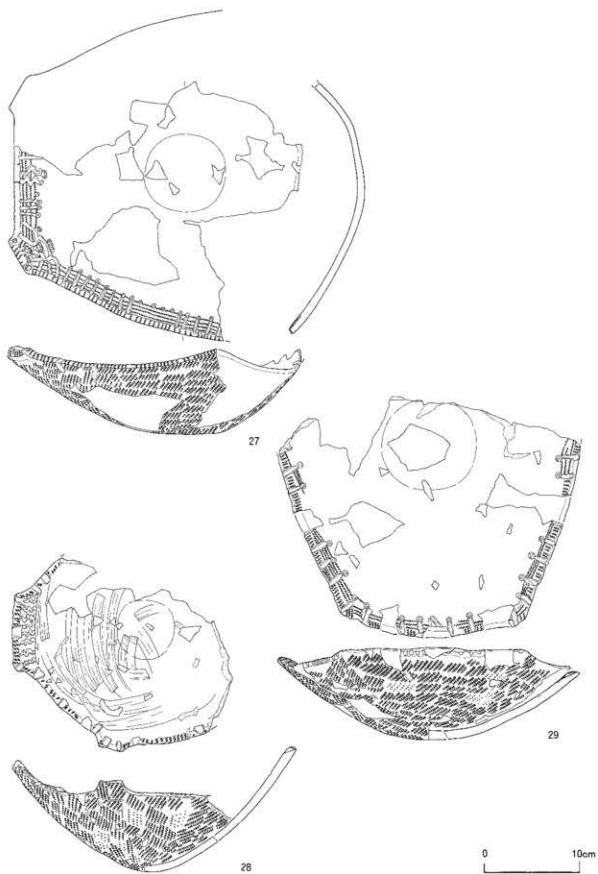


図48 包含層出土の復原土器（5）

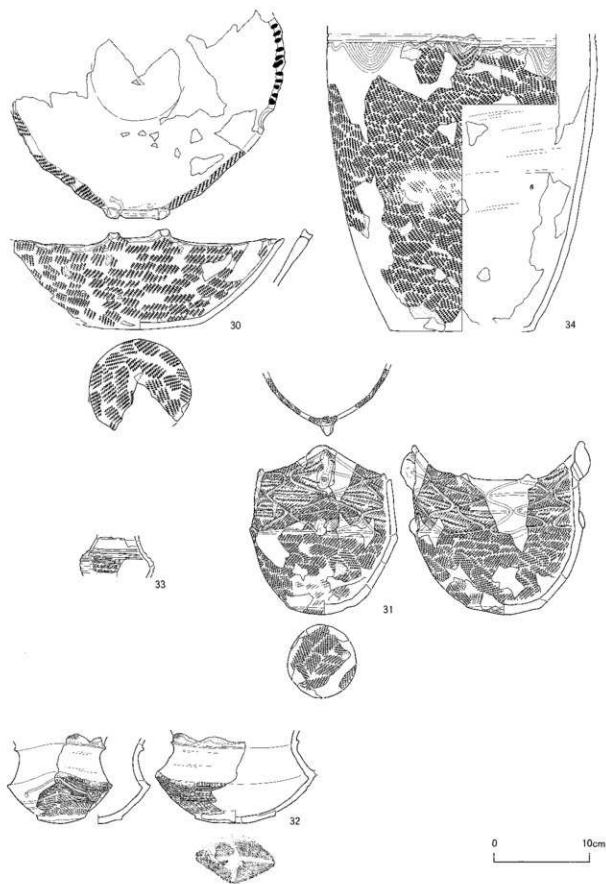


図49 包含層出土の復原土器（6）

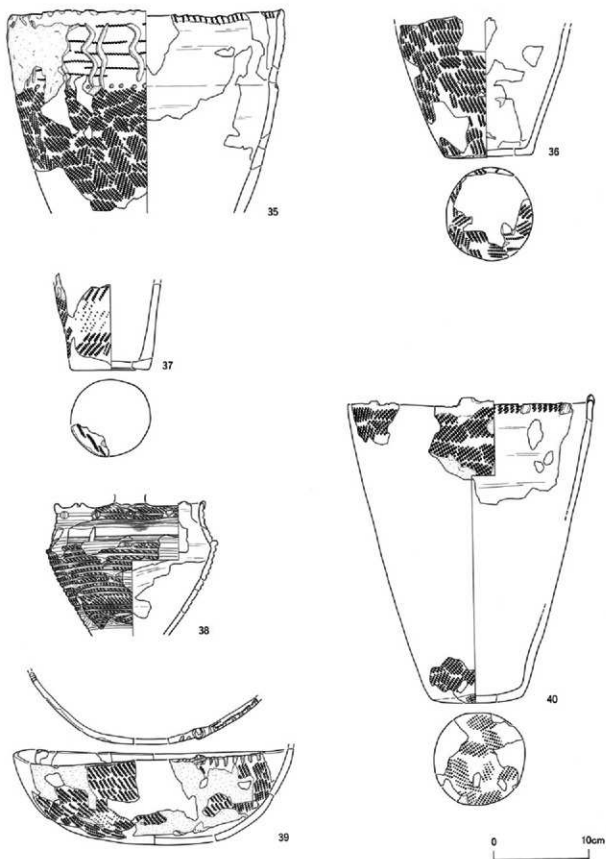


図50 包含層出土の復原土器（7）

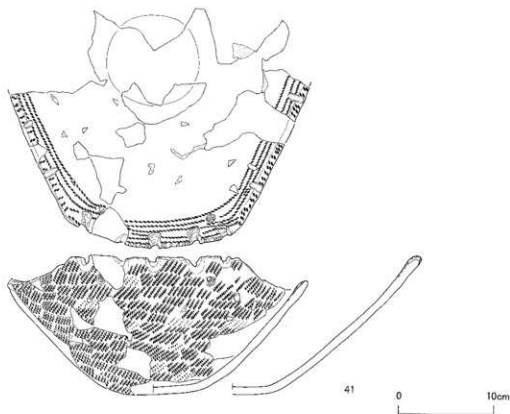


図51 包含層出土の復原土器(8)

鉢形土器

38は若干内湾する口縁部から肩部へとふくらみ、そこから直線的に底部へすはまる器形を呈する。口縁部はR L縄文地に粘土の貼付と平行沈線文がみられ、頸部は上下を沈線文で区画された無文帯である。胴部上位は縄文地に複数の横走沈線文があり、これらの沈線文間に縦位の短い沈線文が組み合わされて施される。中位は縄文帯で下位は曲線的な工字文風の沈線文がみられる。また、赤色顔料が付着する部分もある。

38はV群c類タンネトウL式に相当する。

皿形土器

39は緩やかに開口する口縁部から曲線的に底部へ至る器形で、外面はR L縦走縄文である。口唇部は小突起を有しL撚紐痕文がみられ、外面にかけての部分は棒状工具による刻みが施される。

39はV群c類タンネトウL式に相当する。

*風倒木痕(F層)出土の復原土器(40・41)

2個体復原した。復原土器の総破片数は96点で出土総点数の0.5%である。40は深鉢、41は浅鉢である。

深鉢形土器

40は直立気味の口縁部から直線的に底部に至る器形と推測する。L R縄文が外面と底外面にみられ、口唇部は小突起を有し、内面にかけての部分に棒状工具による刻みとL R撚紐刻みが施される。

40はV群c類タンネトウL式に相当する。

浅鉢形土器

41は大きく開口する口縁部から底部へと直線的に至る器形で、上面観は楕円形様で短径部分が直線

を呈すると推測する。外面はL R縄文で、口唇部から内面にかけてR L撚紐刻み、棒状工具による刻み、L RとR Lの縄線文が施される。

41はV群c類タンネットウL式に相当する。

(2) 破片土器 (図52~58 表67 図版15~18)

破片土器の掲載分の総破片数は333点で土器総点数の1.9%である。

* III層出土の破片土器 (1~46)

1~41は口縁部、42~45は底部、46は胴部破片である。

口縁部破片

1はR L縄文地に平行沈線文と曲線的な沈線文があり、口唇部には撚紐刻みが施される。2は無文地に平行沈線文と縦方向に弧状の沈線文がみられ、口唇部は刻み様の大きな凹みと撚紐刻みが施される。3はR L縄文地に平行沈線文がみられ、口唇部は縄文と棒状工具による刻みが施される。4はL R縄文地に平行沈線文がみられ、口唇部には撚紐刻みが施される。5はL R縄文地に平行沈線文が施され、口唇部に縄文と棒状工具による刻みがみられる。6はR L縄文地に平行沈線文がみられ、口唇部の施文は撚紐と棒状工具による刻みである。7はL R縄文に平行沈線文がみられ、口唇部の施文は撚紐と棒状工具による刻みである。8はR Lの縦位回転施文と考えられ平行沈線文が施される。9もL Rの縦位施文と平行沈線文が施され、口唇部は縄文と指頭圧痕による刻みがみられる。10は外面にR L縄文と沈線文がみられ内面にも沈線文が施される。口唇部の施文は撚紐と棒状工具による刻みである。11は口縁部にL 撚糸文と楕円形の沈線文が施され、刺突文を有する貼付帯により胴部の無文部分と区画される。12はR L縄文地に縦方向の沈線文が認められる。13はL R縄文地に沈線文と刺突文が施され、口唇部は縄文である。14は口唇部直下の外面に横方向の条痕文がみられ、その下位部分はR L縄文が施される。口唇部は刺突文風の刻みがみられる。15はL R縄文で口唇部は撚紐刻みが施される。16は外面と口唇部にL R縄文がみられる。17は外面がL R縄文で口唇部は撚紐及び棒状工具による刻みが施される。浅鉢であるかもしれない。18は突起を有し、R L縄文、沈線文、穿孔が施される。口唇部は指頭による凹みとR L撚紐刻みがみられる。19は突起を有しR L縄文と沈線文が施される。口唇部の施文は縄文と棒状工具による刻みである。20は突起部でL R縄文と沈線文が施される。口唇部は磨耗し不明瞭な条が観察される。21は外面にR L縄線文と沈線文がみられ、口唇部は棒状工具による刻みが施される。22はR L縄文地に沈線文がみられ一部は縦位に短いものが施される。口唇部は沈線文が観察される。23は外面に粘土の貼付と沈線文がみられ口唇部は無文である。24は小型で外面に沈線文が施され口唇部は無文である。25は外面及び口唇部に沈線文が施される。26は突起部で粘土貼付、穿孔、R 縄線文が外面に施され、口唇部はL R縄文である。27は外面にR L縄文、L R縄線文、沈線文が施され、無文帯を有する。口唇部は沈線文と撚紐刻みがみられる。28は外面にL・Rの縄線文と沈線文が施され、口唇部は細かな刻みがみられる。29は外面にL R縄文及び刺突文が施され、無文部分が横環する。口唇部はL R縄文と刻みである。30は口唇部直下の器面が無文で、その下位部分はR L縦走縄文が施される。31は外面にL R縄文、内面にR 縄線文、口唇部に縄文、刻み、刺突文が施される。32は比較的大きな破片で、外面はR L縄文、内面は沈線文と円形刺突文、口唇部はR L縄文と刻みが施される。33は大きさの異なる突起を有し、外面にはL R縄文地に粘土の貼付、放射状の沈線文が施される。口唇部から内面にかけて縄線文、刻み、刺突文が観察される。34は外面がR L縄文で突起部分は無文である。口唇部から内面にかけて縄線文、刻み、刺突文、沈線文が施される。35は緩やかな突起を有し外面はR L縄文である。口唇部から内面にかけて、縄線文、沈線文、刻みが施される。37は外

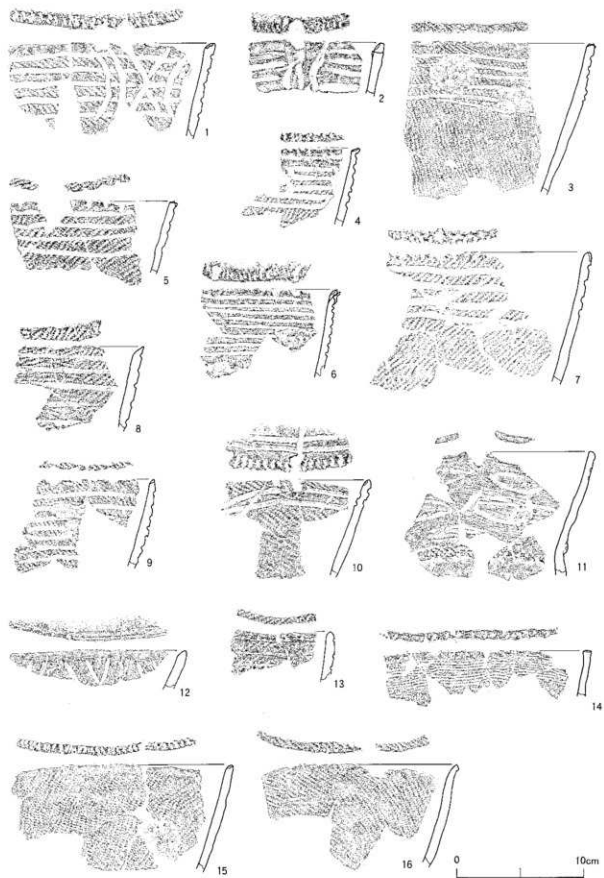


図52 包含層出土の破片土器 (1)



図53 包含層出土の破片土器（2）

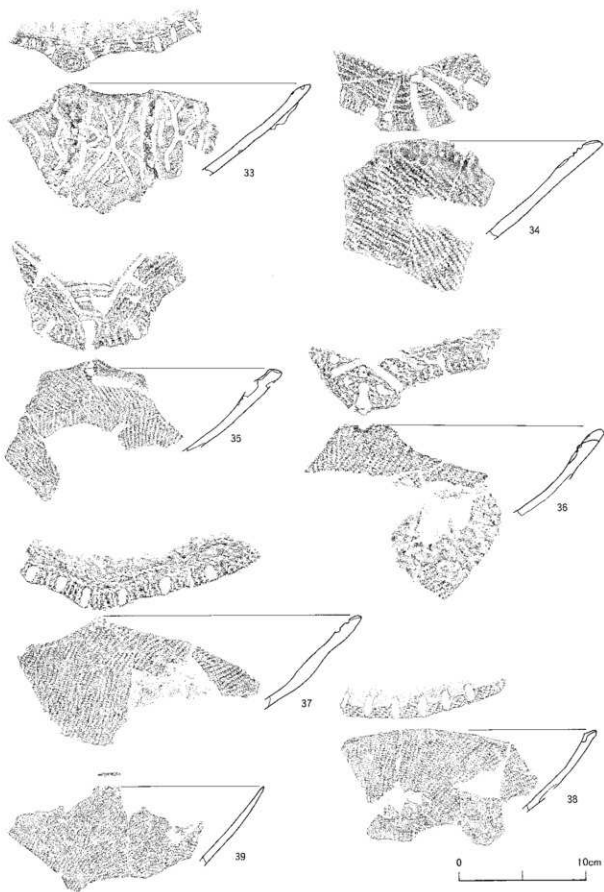


図54 包含層出土の破片土器(3)

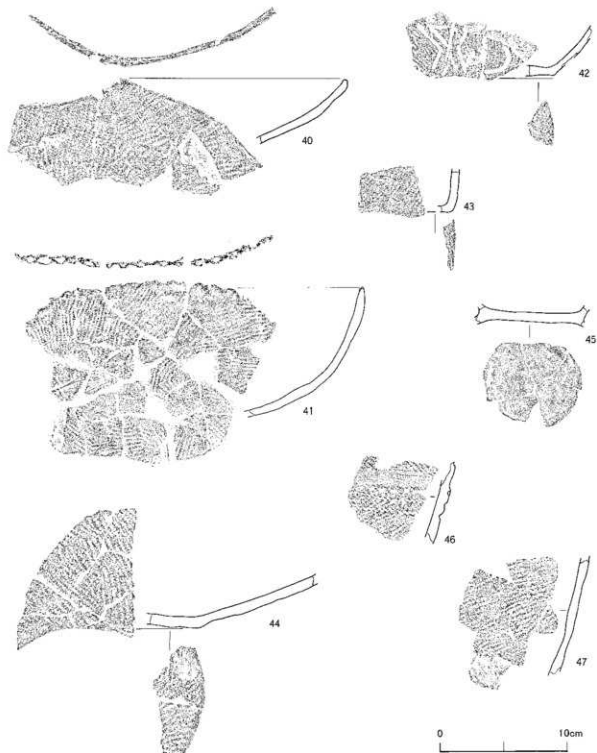


図55 包含層出土の破片土器（4）

面がL R縄文で、口唇部から内面にかけて縄線文と刻みが施される。38は外面がL R縄文で、口唇部から内面にかけてL R縄文と刻みが施される。39・40は外面がL R縄文で口唇部と内面は無文である。41は口縁部から底部まで接合したもので、外面にL R縄文が施される。指頭による口唇部の施文により、口縁部は小波状が連続する形態を呈する。

1～41はV群c類タンネットウ式に相当する。

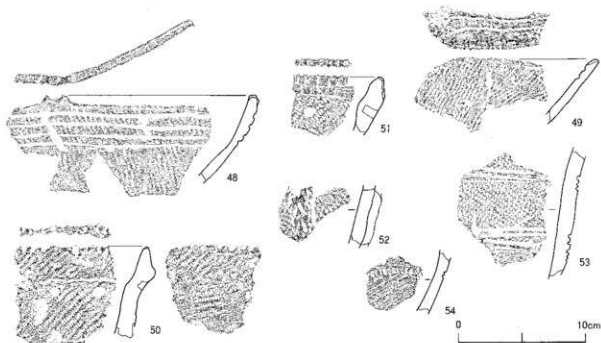


図56 包含層出土の破片土器 (5)

底部破片

42はR L縄文地に沈線文が施され、底外面にも縄文がみられる。43は胴部と底外面にL R縄文が施される。44は胴部と底外面にR L縄文が施される。45は底外面が上げ底で胴部分が残存しない。

42～44はV群c類タンネトウL式に相当し、45はV群と推測される。

胴部破片

46は外面にL R縄文が施され無文部分を有し、縄文地に縄線文と刺突文がみられる。47はL R縄文が施される。

46・47はV群c類タンネトウL式に相当する。

*** V層出土の破片土器 (48～54・57)**

48～51・57は口縁部、52・53・54は胴部である。

口縁部破片

48は外面にR L縄文と平行沈線文がみられ、口唇部は小突起を有し無文である。49は外面がL R縄文で口唇部から内面にかけてR L縄線文と刻みが施される。50は口縁部が肥厚し断面が三角形を呈する。内外面にL R縄文、口唇部に刺突文が施される。また、外面に円形刺突文がみられる。51は口縁部が肥厚し、口唇部とその直下の外面には押し文が施される。その下位はL R縄文地に円形刺突文が施される。57は外面と口唇部にL R縄文が施され内面には沈線文が観察される。

48・49・57はV群c類タンネトウL式、50はIV群a類タブコブ式、51はIII群b類北筒式に相当する。

胴部破片

52はR L縄文地に垂下する貼付が施され、この上に爪の押捺施文がみられる。53は複節L R L縄文地に、半截竹管状工具を用いた平行沈線文が施される。54はL右巻きの捺糸文がみられ、絡糸体圧痕文が施される。

52・53はIII群b類萩ヶ岡式に、54はI群b類東銅路IV式に相当する。

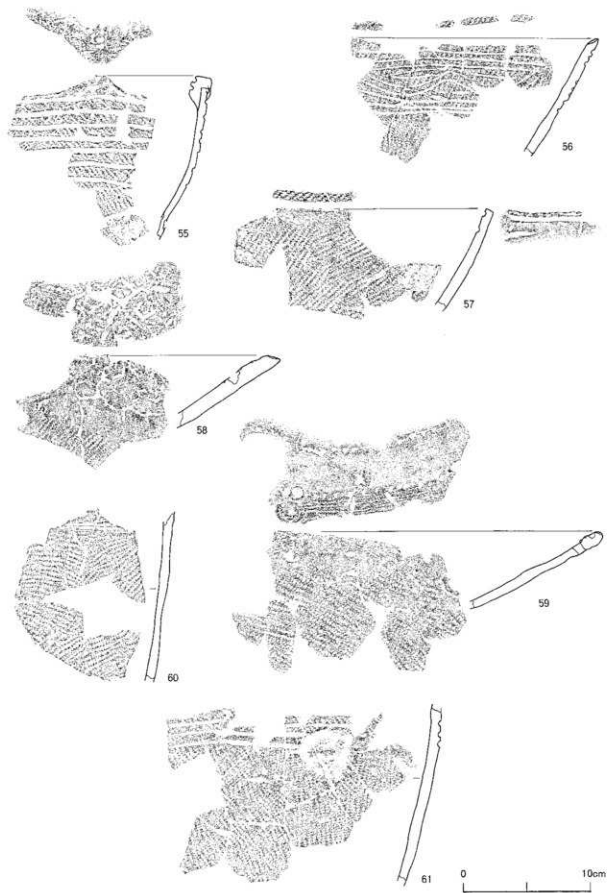


図57 包含層出土の破片土器（6）

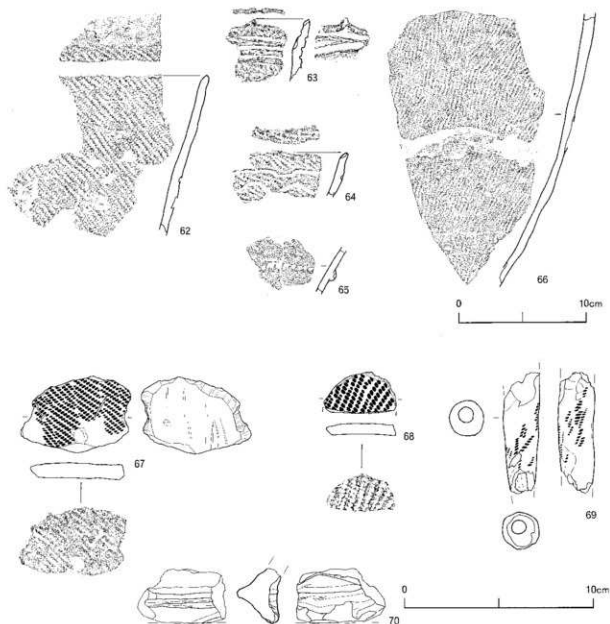


図58 包含層出土の破片土器（7）・土製品等

*異なる層位出土のものが接合した破片土器（55・56・58～61）

55・56・58～61は異なる層位出土のものが接合した破片で、55・56・58・59は口縁部、60・61は胴部である。

口縁部破片

55は外面にR L縄文と平行沈線文がみられ、口唇部は粘土貼付による突起を有する。内面は棒状工具による施文がみられる。56はL R縄文地に平行沈線文と曲線的な沈線文が組み合わされて施され、工字文風である。また、口唇部は縄文である。58は外面に広く無文部分を有し、口唇部から内面にかけて縄線文、縄端圧痕文、刺突文、沈線文が施される。59は口唇部直下の外面が無文でその下にR L縄文がみられる。口唇部はLの縄線文と刻み、内面は棒状工具による刺突文が施される。

55・56・58・59はV群c類タンネットウL式に相当する。

胴部破片

60は上位に沈線文、下位はLRの縦位回転施文が施される。61は上位に平行沈線文、下位はRL縄文が施される。

60・61はV群c類タンネットウL式に相当する。

* VI層出土の土器 (62)

62はVI層出土の口縁部で外面と内面にはRL縄文が施される。V群c類タンネットウL式に相当する。

* I層出土の土器 (63)

63はI層出土の口縁部で外面はLR縄文地に沈線文が施され、内面にも沈線文が観察される。V群c類タンネットウL式に相当する。

* 風倒木痕 (F層) 出土の土器 (64~66)

64~66は風倒木痕 (F層) からの出土で、64は口縁部破片、65・66は胴部破片である。

口縁部破片

64はRL縄文地に曲線的な沈線文が施され、口唇部は縄文と棒状工具による刻みがある。V群c類タンネットウL式に相当する。

胴部破片

65は外面に刺突文を有する貼付帯とL縄文が施される。66は外面にLR縦走縄文が施される。

65・66はV群c類タンネットウL式に相当する。

(3) 土製品等 (図58 表68 図版18)

土製品等の掲載分の総点数は4点で、出土土器総点数の0.02%である。

67はV群c類の胴部破片で、左右両側端部が打ち欠きによりえぐれている。「土器片鍾」であるかもしれない。68はV群c類の破片が円形に加工され、半分が残存したと考えられる。69は筒状を呈する注口部で浅い縄文が施される。70はV層からの出土で、断面は辺がわずかに内湾する三角形を呈し、特殊な器形の底部破片と推測する。

3 石器類

(1) 旧石器群 (図28・59・60 表69 図版19)

Ⅲ層から2点、V2層・V層から9点、VI層から6点、Ⅶ層から8点、風倒木痕内から5点出土した。本石器群における掲載率は73%である。

細石刃 (MB) (図28-35~40)

細石刃等小型の旧石器は原寸で掲載するため、旧石器ブロック (SB) 出土のものも含め第IV章9節図28に集約した。

35はやや湾曲し上端部側を破損する。36は黒曜石製で下端部を破損する。37は頁岩製で断面が三角形を呈する。38は上端部を破損し背面右側縁部に微細な剥離痕がみられる。39は黒曜石製で下端部を破損する。40は下端部を破損し背面右側縁部には微細な剥離痕が認められる。41は黒曜石製で上端部を破損する。

石刃 (BL) (図59-1~11)

1は頁岩製で腹面右側縁に一部微細な剥離痕がみられる。2は黒曜石製で上下端部を破損する。3は黒曜石製で被熱し、背面両側縁部には二次調整が認められる。4は頁岩製で背面上端部から右側縁部にかけて二次調整が認められる。5は頁岩製で背面の両側縁部に二次加工が観察される。6・7

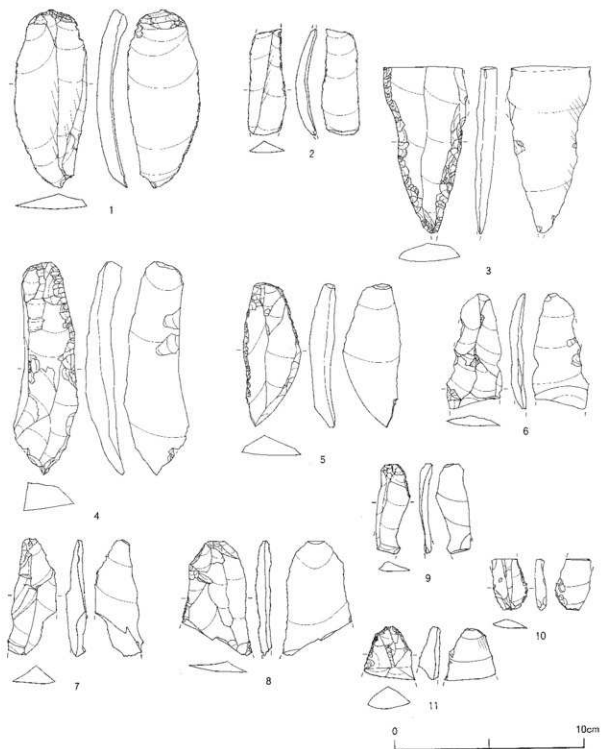


図59 包含層出土の旧石器(1)

は頁岩製で下端部を破損する。8はやや幅広く頁岩製、下端部を破損する。9は頁岩製で背面右側縁部が湾曲する。10は頁岩製で腹面には被熱による「焼けはじけ」がみられる。11は頁岩製で下端部側を大きく破損する。

サイドスクレイパー(S S)(図60-12~14)

12は背腹両面の稜が磨滅している。Ⅲ層出土で縄文時代のものである可能性がある。13は背面に広

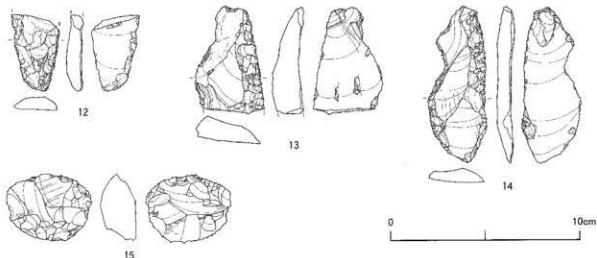


図60 包含層出土の旧石器(2)

く原稜面を残し同面右側縁部には二次調整が施される。14は黒曜石製で背面の右側縁部は湾曲し、同面両側縁部に二次加工がみられる。

ラウンドスクレイパー (RS) (図60-15)

15は背面下縁に調整がみられる。素材は横長剥片である。

(2) 剥片石器群 (図61・62 表70 図版19・20)

「石鏃」(16-38)

Ⅲ層から36点、V1層から2点、V2層から8点、VI層から2点、風倒木痕内から1点出土した。残存状態の割合は完形68%、準完形16%、半形12%、片4%で、本器種における掲載率は46%である。

16は二等辺三角形を呈し基部が内湾する。17は有茎で腹面に剥離面を大きく残す。18は有茎で背面に槓状剥離がみられる。19は二等辺三角形を呈し背面に先行剥離面を残す。20は二等辺三角形を呈し平基である。21は基部が若干内湾する。22は細長い二等辺三角形を呈し槓状剥離がみられる。23は有茎で両側縁は曲線的に先端部へと収束する。24は有茎で左右非対称の形態を呈する。25は基部が内湾し曲線的な側縁である。26は有茎で菱形を呈し背腹両面に剥離面を残す。27は二等辺三角形を呈し腹面は周縁部のみ二次調整が施される。28は基部が直線的に内湾する。29は二等辺三角形を呈し基部が内湾する。30は基部を破損し腹面右側縁には比較的大きな剥離痕が観察される。31・32は基部が曲線的に内湾し、31は頁岩製、32は黒曜石製である。33は有茎で腹面に剥離面を残す。34は茎の一部を破損し左右非対称の形態を呈する。35は有茎で背腹両面に剥離面を残す。36は黒曜石製で両側縁部は曲線的である。37は上下両端部破損し背面には一部原稜面を残し、腹面は槓状剥離がみられる。38は小型で五角形を呈する。

「石鏃」(39)

V層から残存状態が完形のものが1点出土した。39は黒曜石製で鏃部の断面は方形を呈するので、スクレイパーかもしれない。

「つまみ付きナイフ」(40-42)

Ⅲ層から3点、V2層から2点、V層から1点出土した。残存状態の割合は完形50%、半形50%で、本器種における掲載率は50%である。

40は横長で頁岩製、背面に一部原稜面を残す。41は縦長で背腹両面に調整が施される。槓状剥離が

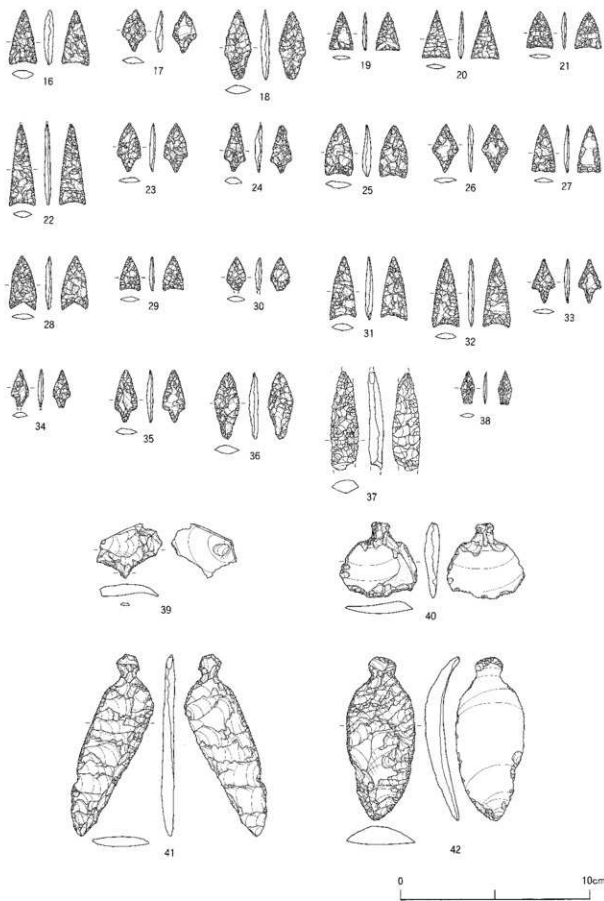


図61 包含層出土の剥片石器(1)

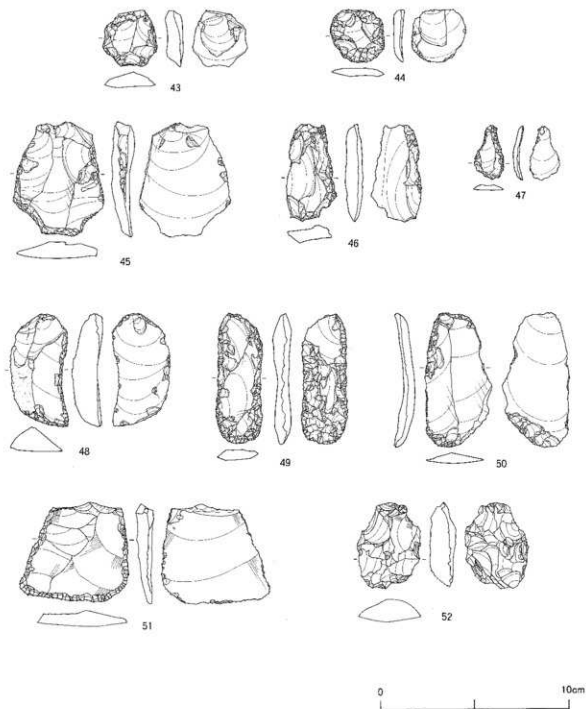


図62 包含層出土の剥片石器（2）

顕著である。42は黒曜石製で背面にのみ二次加工が施される。

「スクレイパー」(43～52)

Ⅲ層から25点、V1層から2点、V2層・V層から4点、Ⅵ層から1点、風刺木痕内から3点出土した。残存状態の割合は完形36.1%、準完形33.3%で、半形13.8%、片16.7%で、本器種における掲載率は27.8%である。

43・44は黒曜石製のラウンドスクレイパーである。背面に二次調整が施され、腹面には打点側からの大きな桶状剥離がみられる。45は縦長剥片を素材とし両側縁と下端部に刃部が設けられる。46は横

長剥片を素材とし背面と腹面の右側縁部に刃部が作出される。47は小型で背面に二次調整が施される。48は背面に原礫面を有し同面右側縁部と下縁に刃部が設けられる。49は黒曜石製で背腹両面に二次加工が施される。50は縦長剥片を素材とし背面左側縁部と下端部に刃部を有する。51は黒曜石製で背面両側縁部と下端部に刃部が作出される。52は背腹両面に比較的大きな剥離面が多数みられ、石核を素材とするものである。

(3) 磨製石器群 (図63 表71 図版20)

「磨製石斧」(53~57)

Ⅲ層から11点、V1層から2点、V2層・V層から15点、VI層から2点、風倒木痕内から1点出土した。残存状態の割合は完形13.3%、準完形6.7%、半形13.3%、片66.7%で、本器種における掲載率は16.7%である。

53は大型で基部側を破損する。54は接合したもので蛇紋岩製である。55は基部側を破損し全体的に丹念な研磨が施される。56は片岩製で基部側を破損する。57は基部で緑色泥岩製である。

(4) 礫石器群 (図63・64 表72 図版20・21)

「たたき石」(58~60)

Ⅲ層から2点、V1層から1点、V層から3点出土した。残存状態の割合は準完形33.3%、半形50%、片16.7%で、本器種における掲載率は50%である。

58は範囲確認調査時に出土し接合したものである。硬質な砂岩製で下端部にたたき痕がみられる。59は緑色泥岩製で下端部には刃部を有する。表裏両面及び側面に多数のたたき痕が認められるので、磨製石斧の転用品であると推測する。60は砂岩製で下端部にたたき痕、上部は破損面が認められる。

「砥石」

V2層から1点出土しているが、残存状態の分類が「片」で小さいため掲載していない。

「台石」(61)

Ⅲ層から1点、V2層・V層から4点、風倒木痕内から3点出土した。残存状態の割合は完形12.5%、片87.5%で、本器種における掲載率は12.5%である。

61は安山岩製、表裏両面に平滑化した面があり、周囲に多数の敲打痕がみられる。出土状況の写真を掲載した(図版4)。

(5) 石製品 (図64 表73 図版21)

Ⅲ層から1点、V2層・V層から2点、VI層から2点、風倒木痕内から2点出土した。石製品における掲載率は42.9%である。

「玉」(62・63)

62はV2層出土で完形である。下端面に別の穿孔の痕跡が認められ、一つの原因を複数ヶ所穿孔し量産した可能性を推測する。63は風倒木痕内出土で上部を一部破損する。概ね円形を呈し丹念に研磨され製作されている。これらは肉眼での鑑定では石材を特定できなかったため、自然科学的手法による岩石鑑定を行い「タルク岩(滑石)」との結果を得た。その内容はVI章に掲載した。

「棒状原石」(64)

64は縦長で背面に原礫面を残す。腹面左側上部には加工が施されるので、スクレイパーやU・Rフレイクであるかもしれない。

(末光正卓)

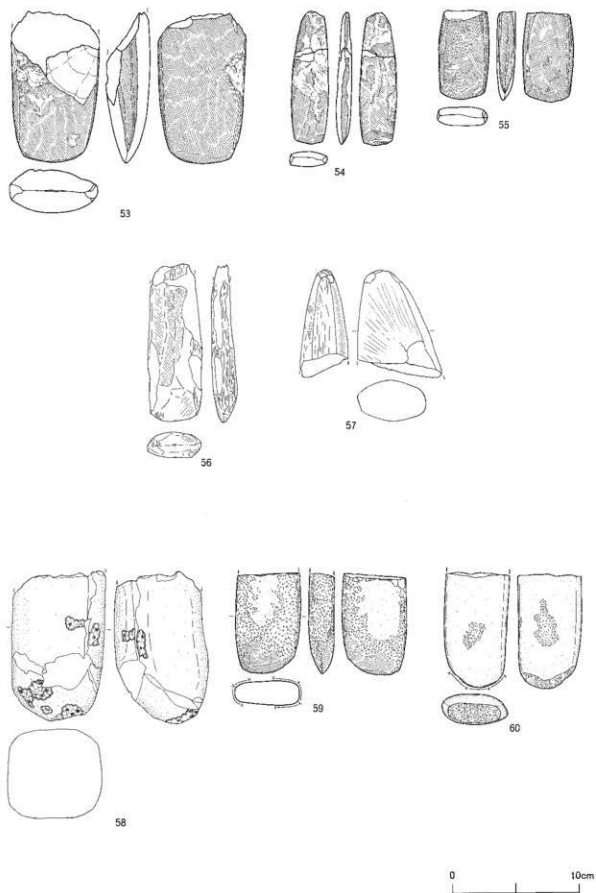


図63 包含層出土の磨製・礫石器（1）

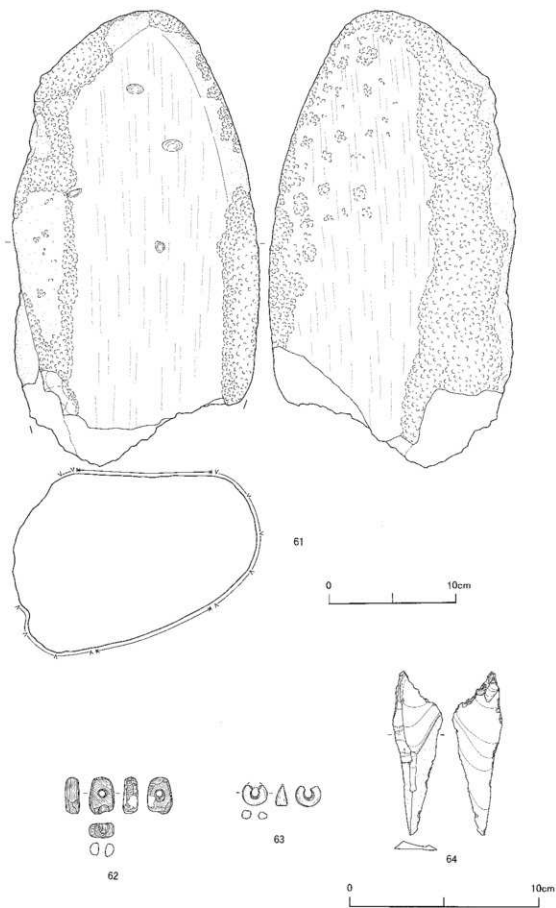


図64 包含層出土の礫石器（2）・石製品

表42 N-28区出土復元土器観察表

図番	図名	出土地点	層位	形状	計測	計測値 (cm)	重量 (g)	部位	器種	備考(分類・型式)
46	17	10	N-28区	■	鉢	口径 13.0 高さ 17.0 底径 10.0	430	1周部 +底面・裏面	鉢	V群+類
保管庫所在地: 総合・同一個体破片 観察者氏名: *北土地区画(表)										
N-28・表(1)										
土器	土器名(図名)	形状	色	特徴	使用の痕跡	その他	文様・装飾	色	使用の痕跡	その他
外	1. 復元土器 1.1 復元土器 1.2 復元土器 1.3 復元土器	鉢	黒色化	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)
内	2. 復元土器 2.1 復元土器 2.2 復元土器	鉢	黒色化	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)

表43 P-29区出土復元土器観察表

図番	図名	出土地点	層位	形状	計測	計測値 (cm)	重量 (g)	部位	器種	備考(分類・型式)
46	18	10	P-29区	■	鉢	口径 11.0 高さ 15.0 底径 9.0	500	1周部 +底面・裏面	鉢	V群+類
保管庫所在地: 総合・同一個体破片 観察者氏名: *北土地区画(表)										
P-29・表(1)										
土器	土器名(図名)	形状	色	特徴	使用の痕跡	その他	文様・装飾	色	使用の痕跡	その他
外	1. 復元土器 1.1 復元土器 1.2 復元土器 1.3 復元土器	鉢	黒色化	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)
内	2. 復元土器 2.1 復元土器 2.2 復元土器	鉢	黒色化	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)

表44 L-28区出土復元土器観察表

図番	図名	出土地点	層位	形状	計測	計測値 (cm)	重量 (g)	部位	器種	備考(分類・型式)
47	19	10	L-28区	■	鉢	口径 13.0 高さ 22.0 底径 10.0	940	1周部 +底面・裏面	鉢	V群+類
保管庫所在地: 総合・同一個体破片 観察者氏名: *北土地区画(表)										
L-28・表(1)										
土器	土器名(図名)	形状	色	特徴	使用の痕跡	その他	文様・装飾	色	使用の痕跡	その他
外	1. 復元土器 1.1 復元土器 1.2 復元土器 1.3 復元土器	鉢	黒色化	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)
内	2. 復元土器 2.1 復元土器 2.2 復元土器	鉢	黒色化	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)

表45 O-25区出土復元土器観察表

図番	図名	出土地点	層位	形状	計測	計測値 (cm)	重量 (g)	部位	器種	備考(分類・型式)
47	20	10	O-25区	■	鉢	口径 16.0 高さ 23.0 底径 11.0	690	1周部 +底面・裏面	鉢	V群+類
保管庫所在地: 総合・同一個体破片 観察者氏名: *北土地区画(表)										
O-25・表(1)										
土器	土器名(図名)	形状	色	特徴	使用の痕跡	その他	文様・装飾	色	使用の痕跡	その他
外	1. 復元土器 1.1 復元土器 1.2 復元土器 1.3 復元土器	鉢	黒色化	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)
内	2. 復元土器 2.1 復元土器 2.2 復元土器	鉢	黒色化	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)

表46 O-27区出土復元土器観察表

図番	図名	出土地点	層位	形状	計測	計測値 (cm)	重量 (g)	部位	器種	備考(分類・型式)
47	21	10	O-27区	■	鉢	口径 9.7 高さ 16.2 底径 6.0	300	1周部 +底面・裏面	鉢	V群+類
保管庫所在地: 総合・同一個体破片 観察者氏名: *北土地区画(表)										
N-27・表(1)										
土器	土器名(図名)	形状	色	特徴	使用の痕跡	その他	文様・装飾	色	使用の痕跡	その他
外	1. 復元土器 1.1 復元土器 1.2 復元土器 1.3 復元土器	鉢	黒色化	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)
内	2. 復元土器 2.1 復元土器 2.2 復元土器	鉢	黒色化	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)

表47 P-19区出土復元土器観察表

図番	図名	出土地点	層位	形状	計測	計測値 (cm)	重量 (g)	部位	器種	備考(分類・型式)
47	22	10	P-19区	■	鉢	口径 3.5 高さ 6.6 底径 3.0	27.4	1周部 +底面・裏面	鉢(小型)	V群+類
保管庫所在地: 総合・同一個体破片 観察者氏名: *北土地区画(表)										
P-19・表(1)										
土器	土器名(図名)	形状	色	特徴	使用の痕跡	その他	文様・装飾	色	使用の痕跡	その他
外	1. 復元土器 1.1 復元土器 1.2 復元土器 1.3 復元土器	鉢	黒色化	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)
内	2. 復元土器 2.1 復元土器 2.2 復元土器	鉢	黒色化	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)

表48 O-29区出土復元土器観察表

図番	図名	出土地点	層位	形状	計測	計測値 (cm)	重量 (g)	部位	器種	備考(分類・型式)
47	23	11	O-29区	■	鉢	口径 13.0 高さ 12.8	300	1周部 +底面・裏面	鉢	V群+類
保管庫所在地: 総合・同一個体破片 観察者氏名: *北土地区画(表)										
P-29区(表(1)), Q-27区(表(1))										
土器	土器名(図名)	形状	色	特徴	使用の痕跡	その他	文様・装飾	色	使用の痕跡	その他
外	1. 復元土器 1.1 復元土器 1.2 復元土器 1.3 復元土器	鉢	黒色化	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)
内	2. 復元土器 2.1 復元土器 2.2 復元土器	鉢	黒色化	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)

表49 M-29区出土復元土器観察表

図番	図名	出土地点	層位	形状	計測	計測値 (cm)	重量 (g)	部位	器種	備考(分類・型式)
47	24	11	M-29区	■	鉢	口径 14.3 高さ 17.4	100	1周部 +底面・裏面	鉢?	V群+類
保管庫所在地: 総合・同一個体破片 観察者氏名: *北土地区画(表)										
P-29区(表(1)), Q-27区(表(1))										
土器	土器名(図名)	形状	色	特徴	使用の痕跡	その他	文様・装飾	色	使用の痕跡	その他
外	1. 復元土器 1.1 復元土器 1.2 復元土器 1.3 復元土器	鉢	黒色化	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)
内	2. 復元土器 2.1 復元土器 2.2 復元土器	鉢	黒色化	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)	口縁部(10%)

表58 N-24区出土復元土器観察表

国	器名	出土地点	層位	形状	口径	高さ	容量	底径	底形	備考(分類・型式)
50	33	N-24区	Y	4	13.0	*	30	10.0	楕円形	V群+類
器名(分類・型式)		綜合・筒一領碎破片		*北土層・黄土層						*
加土	編	?	軽	細粒	焼	灰白色	少	少	備考	
文様・図柄		色	使用の顔	その他	焼	文様・図柄	色	使用の顔	その他	
外	1. 表面	白	黄褐色	黄褐色	*	無文	ナナ?	白	*	*
内	1. 表面	白	黄褐色	黄褐色	*	無文	ナナ?	白	*	*
底	1. 表面	白	黄褐色	黄褐色	*	無文	ナナ?	白	*	*

表59 J-20区出土復元土器観察表

国	器名	出土地点	層位	形状	口径	高さ	容量	底径	底形	備考(分類・型式)
50	34	J-20区	Y	14	31.0	*	110.0	1.80	楕円形	V群+類
器名(分類・型式)		綜合・筒一領碎破片		*北土層・黄土層		J-20区(表12), J-20区・V1(10), V2(9)				
加土	編	?	軽	細粒	焼	灰白色	少	少	備考	
文様・図柄		色	使用の顔	その他	焼	文様・図柄	色	使用の顔	その他	
外	1. 表面	白	黄褐色	黄褐色	*	無文	ナナ?	白	*	*
内	1. 表面	白	黄褐色	黄褐色	*	無文	ナナ?	白	*	*
底	1. 表面	白	黄褐色	黄褐色	*	無文	ナナ?	白	*	*

表60 H-30区出土復元土器観察表

国	器名	出土地点	層位	形状	口径	高さ	容量	底径	底形	備考(分類・型式)
50	35	H-30区	Y	12	22.0	(29.4)	1.80	1.00	楕円形	V群+類
器名(分類・型式)		綜合・筒一領碎破片		*北土層・黄土層		H-20区・V(3), H-20区・V(110), H-30・V(13), V(21), H-20区・V(12)				
加土	編	?	軽	細粒	焼	灰白色	少	少	備考	
文様・図柄		色	使用の顔	その他	焼	文様・図柄	色	使用の顔	その他	
外	1. 表面	白	黄褐色	黄褐色	*	口縁部(70%)	ナナ?	白	*	*
内	1. 表面	白	黄褐色	黄褐色	*	口縁部(70%)	ナナ?	白	*	*
底	1. 表面	白	黄褐色	黄褐色	*	口縁部(70%)	ナナ?	白	*	*

表61 N-25区出土復元土器観察表

国	器名	出土地点	層位	形状	口径	高さ	容量	底径	底形	備考(分類・型式)
50	36	N-25区	Y	8	15.0	*	0.1	0.05	楕円形	V群+類
器名(分類・型式)		綜合・筒一領碎破片		*北土層・黄土層		M-25区・V(12)				
加土	編	?	軽	細粒	焼	灰白色	少	少	備考	
文様・図柄		色	使用の顔	その他	焼	文様・図柄	色	使用の顔	その他	
外	1. 表面	白	黄褐色	黄褐色	*	胴中位(35%)	ナナ?	白	*	*
内	1. 表面	白	黄褐色	黄褐色	*	胴中位(35%)	ナナ?	白	*	*
底	1. 表面	白	黄褐色	黄褐色	*	胴中位(35%)	ナナ?	白	*	*

表62 G-38区出土復元土器観察表

国	器名	出土地点	層位	形状	口径	高さ	容量	底径	底形	備考(分類・型式)
50	37	G-38区	Y	3	10.3	*	18.4	2.20	楕円形	黄群+類
器名(分類・型式)		綜合・筒一領碎破片		*北土層・黄土層		G-38区・V(4)				
加土	編	?	軽	細粒	焼	灰白色	少	少	備考	
文様・図柄		色	使用の顔	その他	焼	文様・図柄	色	使用の顔	その他	
外	1. 表面	白	黄褐色	黄褐色	*	口縁部(70%)	ナナ?	白	*	*
内	1. 表面	白	黄褐色	黄褐色	*	口縁部(70%)	ナナ?	白	*	*
底	1. 表面	白	黄褐色	黄褐色	*	口縁部(70%)	ナナ?	白	*	*

表63 M-28区出土復元土器観察表

国	器名	出土地点	層位	形状	口径	高さ	容量	底径	底形	備考(分類・型式)
50	38	M-28区	Y	11	13.4	(16.9)	0.80	0.60	楕円形	V群+類
器名(分類・型式)		綜合・筒一領碎破片		*北土層・黄土層		M-28区(表11), M-27区(表15), V(19), M-30区(表13), V(110), N-25区(表11), V(12)				
加土	編	?	軽	細粒	焼	灰白色	少	少	備考	
文様・図柄		色	使用の顔	その他	焼	文様・図柄	色	使用の顔	その他	
外	1. 表面	白	黄褐色	黄褐色	*	口縁部(90%)	ナナ?	白	*	*
内	1. 表面	白	黄褐色	黄褐色	*	口縁部(90%)	ナナ?	白	*	*
底	1. 表面	白	黄褐色	黄褐色	*	口縁部(90%)	ナナ?	白	*	*

表64 J-20区出土復元土器観察表

国	器名	出土地点	層位	形状	口径	高さ	容量	底径	底形	備考(分類・型式)
50	39	J-20区	Y	15	19.3	(29.6)	(16.0)	8.00	楕円形	V群+類
器名(分類・型式)		綜合・筒一領碎破片		*北土層・黄土層		J-20区・V(134), V(217)				
加土	編	?	軽	細粒	焼	灰白色	少	少	備考	
文様・図柄		色	使用の顔	その他	焼	文様・図柄	色	使用の顔	その他	
外	1. 表面	白	黄褐色	黄褐色	*	口縁部(90%)	ナナ?	白	*	*
内	1. 表面	白	黄褐色	黄褐色	*	口縁部(90%)	ナナ?	白	*	*
底	1. 表面	白	黄褐色	黄褐色	*	口縁部(90%)	ナナ?	白	*	*

表65 T-30区出土復元土器観察表

国	器名	出土地点	層位	形状	口径	高さ	容量	底径	底形	備考(分類・型式)
50	40	T-30区	Y	8	12.4	(26.2)	0.7	1.40	楕円形	V群+類, 黄定区
器名(分類・型式)		綜合・筒一領碎破片		*北土層・黄土層		T-30区・V(134)				
加土	編	?	軽	細粒	焼	灰白色	少	少	備考	
文様・図柄		色	使用の顔	その他	焼	文様・図柄	色	使用の顔	その他	
外	1. 表面	白	黄褐色	黄褐色	*	口縁部(25%)	ナナ?	白	*	*
内	1. 表面	白	黄褐色	黄褐色	*	口縁部(25%)	ナナ?	白	*	*
底	1. 表面	白	黄褐色	黄褐色	*	口縁部(25%)	ナナ?	白	*	*

表69 包含層出土旧石器群観察表

調査 区画 /調査 区画	調査 区画	出土地点	層位	遺物 番号	器種	計測値 (cm)			重量 (g)	石材	特徴 色調・特徴	採取 場所	特徴的な 使用・加工痕	備考
						最大長	最大幅	最大厚						
28	36	O-345V	Ⅴ*	●	MB 礫石刀	12.0	0.9	0.2	0.3	礫石	少研磨跡	●	礫石	
28	36	O-345V	Ⅴ*	●	MB 礫石刀	11.8	0.6	0.1	0.09	礫石	●	●	●	
28	37	O-345V	Ⅴ*	●	MB 礫石刀	11.3	0.4	0.2	0.1	頁岩	褐色色	●	●	
28	39	O-345V	Ⅴ*	●	MB 礫石刀	12.3	0.6	0.2	0.3	礫石	少研磨跡	●	●	
28	39	O-345V	Ⅴ*	●	MB 礫石刀	11.9	0.8	0.1	0.2	礫石	●	●	●	
28	40	O-345V	Ⅴ*	●	MB 礫石刀	11.4	0.6	0.1	0.08	礫石	●	●	●	
28	41	O-345V	Ⅴ*	●	MB 礫石刀	10.1	0.4	0.1	0.07	礫石	●	●	●	
59	1	H-242E	V/2	1	BL 石刀	9.4	3.9	1.6	33.3	頁岩	褐色色	●	●	
59	2	19 M-202E	Ⅴ	3	BL 石刀	15.0	2.0	1.1	6.9	礫石	少研磨跡	●	●	
59	3	19 I-445E	F Ⅴ*	●	BL 石刀	18.8	4.3	1.1	232.0	●	●	●	●	
59	4	19 L-342E	Ⅴ*	●	BL 石刀	11.3	3.2	1.5	66.8	頁岩	褐色色	●	●	
59	5	19 L-424E	Ⅴ*	●	BL 石刀	7.8	3.0	1.4	22.9	頁岩	黄褐色	●	●	
59	6	19 N-432E	Ⅴ*	●	BL 石刀	6.2	2.9	0.7	10.1	頁岩	褐色色	●	●	
59	7	19 E-472E	Ⅴ*	●	BL 石刀	16.2	2.4	1.0	9.5	頁岩	緑-こげ茶色	●	●	
59	8	19 P-392E	F Ⅴ*	●	BL 石刀	8.3	3.7	0.8	12.3	頁岩	灰白色	●	●	
59	9	19 P-402E	F Ⅴ*	●	BL 石刀	14.7	1.7	0.6	3.4	頁岩	褐色色	●	●	
59	10	19 O-462E	Ⅴ*	●	BL 石刀	12.7	1.9	0.5	2.2	頁岩	緑-こげ茶色	●	●	
59	11	19 P-392E	V	●	BL 石刀	12.8	2.7	1.1	6.5	頁岩	灰色	片	●	
60	12	19 N-252E	Ⅴ	2	SS? サイドスクレイパー	14.0	7.5	0.9	9.9	礫石	●	●	●	
60	13	19 U-172E	V/2	1	SS? サイドスクレイパー	15.0	12.7	1.7	205.8	礫石	少研磨跡	●	●	
60	14	19 U-282E	V/2	1	SS? サイドスクレイパー	8.3	3.1	0.9	20.4	礫石	赤茶色分あり	●	●	
60	15	19 T-282E	V	●	RS サウンドスクレイパー	3.6	4.5	1.9	24.2	礫石	研磨痕あり	●	●	

表70 包含層出土剥片石器群観察表

調査 区画 /調査 区画	調査 区画	出土地点	層位	遺物 番号	器種	計測値 (cm)			重量 (g)	石材	特徴 色調・特徴	採取 場所	特徴的な 使用・加工痕	備考
						最大長	最大幅	最大厚						
61	17	H-292E	Ⅴ	●	石錐	2.3	1.3	0.3	1.4	礫石	●	●	●	
61	17	H-K-212E	V/2	9	●	2.3	1.3	0.4	0.8	礫石	●	●	●	
61	18	19 K-302E	V/2	1	石錐	13.4	1.4	0.4	1.8	礫石	●	●	●	
61	19	L-212E	V/2	2	石錐	2.0	1.2	0.2	0.3	●	●	●	●	
61	20	19 N-242E	V/2	6	●	2.4	1.5	0.3	0.7	チャート	褐色色	●	●	
61	21	19 L-282E	Ⅴ	2	石錐	2.0	1.4	0.3	0.6	礫石	●	●	●	
61	22	19 M-172E	Ⅴ	2	石錐	14.3	1.4	0.3	1.6	礫石	●	●	●	
61	23	19 M-272E	Ⅴ	●	石錐	2.4	1.3	0.3	0.8	礫石	●	●	●	
61	24	19 M-292E	Ⅴ	2	石錐	12.0	1.4	0.3	1.5	礫石	●	●	●	
61	25	19 N-252E	Ⅴ	5	石錐	2.7	1.5	0.5	1.7	●	●	●	●	
61	26	19 N-272E	Ⅴ	2	石錐	2.5	1.4	0.3	0.7	礫石	●	●	●	
61	27	19 N-272E	Ⅴ	●	石錐	2.5	1.2	0.3	0.7	礫石	透明	●	●	
61	28	19 O-182E	Ⅴ	1	石錐	2.5	1.4	0.3	1.1	●	●	●	●	
61	29	19 O-262E	Ⅴ	4	石錐	1.8	1.1	0.3	0.4	礫石	●	●	●	
61	30	19 O-282E	Ⅴ	5	石錐	11.8	1.0	0.4	0.5	礫石	少研磨跡	●	●	
61	31	19 P-252E	Ⅴ	2	石錐	3.4	1.4	0.4	1.4	●	●	●	●	
61	32	19 P-312E	Ⅴ	1	石錐	3.7	1.4	0.3	1.5	頁岩	灰白色	●	●	
61	33	19 P-312E	V/1	1	石錐	2.3	1.2	0.3	0.5	礫石	●	●	●	
61	34	19 P-172E	Ⅴ	1	石錐	12.0	1.9	0.3	0.4	礫石	●	●	●	
61	35	19 T-192E	V/2	3	石錐	2.4	1.2	0.4	0.8	礫石	●	●	●	
61	36	19 T-342E	V/2	1	石錐	3.5	1.2	0.5	1.8	●	●	●	●	
61	37	19 H-392E	Ⅴ*	●	石錐	15.1	1.4	0.7	5.0	礫石	●	●	●	
61	38	19 I-362E	F Ⅴ*	●	石錐	1.7	0.7	0.2	0.2	●	●	●	●	
61	39	19 M-272E	Ⅴ	3	石錐	2.5	1.3	0.7	5.3	●	●	●	●	
61	40	20 P-182E	V/2	1	つまみ付ナイフ	4.9	4.1	0.8	9.5	頁岩	褐色色	●	●	
61	41	20 J-182E	V/2	1	つまみ付ナイフ	9.7	4.4	0.7	19.9	頁岩	灰白-褐色	●	●	
61	42	20 S-312E	V/2	1	つまみ付ナイフ	8.7	3.7	1.8	28.0	礫石	●	●	●	
62	43	20 K-292E	Ⅴ	2	サウンドスクレイパー	3.0	3.9	1.0	7.5	礫石	赤茶色分あり	●	●	
62	44	20 O-362E	V/1	1	サウンドスクレイパー	2.5	2.9	0.6	6.1	礫石	赤茶色分あり	●	●	
62	45	20 K-212E	Ⅴ	1	スクレイパー	6.1	4.9	1.2	20.8	礫石	●	●	●	
62	46	20 L-282E	Ⅴ	3	スクレイパー	5.2	2.7	1.0	11.8	礫石	●	●	●	
62	47	20 N-252E	Ⅴ	3	スクレイパー	2.9	1.6	0.6	1.3	礫石	少研磨	●	●	
62	48	20 O-362E	F	1	スクレイパー	6.0	3.1	1.2	24.3	礫石	●	●	●	
62	49	20 O-262E	V/2	8	スクレイパー	6.9	2.5	1.0	16.7	礫石	●	●	●	
62	50	20 O-242E	Ⅴ	1	スクレイパー	7.1	3.6	1.1	18.9	礫石	●	●	●	
62	51	20 M-352E	Ⅴ*	●	スクレイパー	5.3	3.7	0.9	23.7	●	●	●	●	
62	52	20 T-392E	F Ⅴ*	●	スクレイパー	4.5	3.3	0.5	17.3	●	●	●	●	

表71 包含層出土磨製石器群観察表

調査 区画 /調査 区画	調査 区画	出土地点	層位	遺物 番号	器種	計測値 (cm)			重量 (g)	石材	特徴 色調・特徴	採取 場所	特徴的な 使用・加工痕	備考
						最大長	最大幅	最大厚						
63	53	20 H-302E	V/2	2	磨製石斧	11.0	7.0	3.5	600	片岩	緑褐色	●	●	
63	54	20 N-292E	Ⅴ	8	磨製石斧	10.5	3.0	1.2	492	礫石	褐色	●	●	
63	55	20 O-292E	V/2	1	磨製石斧	7.1	2.9	1.5	86	緑色頁岩	●	●	●	
63	56	20 N-362E	V	●	磨製石斧	16.2	2.8	1.3	51	片岩	灰色	●	●	
63	57	20 I-352E	V*	●	磨製石斧	15.7	4.5	1.9	75	緑色頁岩	●	●	●	

表72 包含層出土礫石器群観察表

調査 区画 /調査 区画	調査 区画	出土地点	層位	遺物 番号	器種	計測値 (cm)			重量 (g)	石材	特徴 色調・特徴	採取 場所	特徴的な 使用・加工痕	備考		
						最大長	最大幅	最大厚								
63	58	20 SP/NO-L20	V	●	3	たたき石	17.8	4.9	4.9	261	砂岩	灰白色 硬質	手形	たたき石 破損		
63	59	20 P-262E	V	1	1	たたき石	18.0	5.2	2.1	173	緑色頁岩	ナリノブ灰色	●	たたき石 破損		
63	60	20 O-292E	Ⅴ	3	1	たたき石	19.1	5.2	2.4	185	砂岩	白-灰色	●	たたき石 破損		
64	61	21 N-292E	F	12	1	1	玉	36.0	10.5	14.1	1,000	安山岩	褐色色	●	たたき石 破損	

表73 包含層出土石製品観察表

調査 区画 /調査 区画	調査 区画	出土地点	層位	遺物 番号	器種	計測値 (cm)			重量 (g)	石材	特徴 色調・特徴	採取 場所	特徴的な 使用・加工痕	備考
						最大長	最大幅	最大厚						
64	62	21 S-282E	V/2	1	玉	1.95	1.30	0.75	3.2	チャルコ (燧石)	●	●	●	
64	63	21 S-292E	F	4	玉	11.05	1.35	0.60	1.1	チャルコ (燧石)	●	●	●	
64	64	21 O-242E	Ⅴ	1	棒状磨石	8.70	2.05	0.85	9.2	礫石	●	●	●	

表74 岩石分類体系表

火成岩		優白岩 (酸性)	中性岩 (中性)	優黒岩 (塩基性岩)	超塩基性岩
火山岩	火山噴出物 多孔質	溶岩(地表に出たマグマが冷えて固まったもの)			
	ガラス質(非結晶質) 石基のみ	浮岩(軽石)	岩さい(スコリア)		*
	斑状組織 微晶 石基	黒曜岩(石)	*		*
半深成岩	斑状組織 微晶 細晶	流紋岩	安山岩	玄武岩	*
深成岩	等粒状組織 完結晶	石英斑岩	ヒン岩	輝緑岩	*
	二酸化ケイ素(ケイ酸 SiO ₂)	66%以上	52~66%	52%以下	45%以下
	有色造岩鉱物(色指数)	10%以下	10~30%	30%以上	60~70%以上
	主体的な有色造岩鉱物	黒雲母	輝石 角閃石 カンラン石		カンラン石 (蛇紋石)
	主体的な無色造岩鉱物	石英;斜長石	斜長石		*

堆積岩

火山砕屑岩	: 火山噴出物から構成される	
火山角礫岩	: 32mm以上の火山噴出物(火山岩塊) 50%以上含む	
凝灰角礫岩	: 32mm以上の火山噴出物(火山岩塊) 50%未満含む	
火山凝結灰岩	: 2~32mmの火山噴出物(火山灰) から主体的に構成される	
凝灰岩(溶結凝灰岩)	: 2mm以下の火山噴出物(火山灰) から主体的に構成される	
砕屑岩	: 丸みを帯びた鉱物片、岩片等から構成され、「磨理」がみられる	
礫岩	: 粒度区分上の礫を50%以上含む	
角礫岩	: 含有する礫が角ばっている(直角~角礫状)もの	
砂岩	: 粒度区分上の砂を50%以上含む	
泥岩	: 粒度区分上の泥(シルト・粘土) 50%以上から構成される	
	: 粒度区分から「シルト岩」と「粘土岩」に分けられる	
頁岩	: 泥岩のうち、固結が強いもの	
	珪質頁岩	: 頁岩のうち、透明な石英(ケイ酸SiO ₂)部分を含むもの
	粘板岩・千枚岩	: 堆積岩と変成岩の中間的なもの
有機岩	チャート	: 遊晶質石英(SiO ₂) ・有機質(生物遺体) ・無機質

変成岩

: 変成鉱物から構成される。結晶質		
接触(熱)変成岩	: 熱による変成作用を受けたもの	
	ホルンフェルス	: 堆積岩が熱変成作用を受け、微粒状組織となったもの
広域変成岩	: 熱・圧力による変成作用を受けたもの	
	片岩	: 再結晶化により「片理」がみられるもの
	片麻岩	: 再結晶化が進行し、「斑状変晶」や「片麻状組織」がみられるもの

●石英質(ケイ酸SiO₂)の岩石・鉱物の便宜的な分類体系

堆積岩	チャート	: チャートのうち、明瞭な貝殻状断口を呈するもの 火打ち石
	フリント	
	珪質頁岩	
変成岩	珪岩(珪石)	: 珪質の岩石が、熱・圧力による変成作用を受け、無微粒の石英集合体となったもの
鉱物	水晶	: 無色透明の石英 結晶質
	碧玉	: 隠微品質の石英で酸化鉄を多量に含む 不透明 暗緑~緑褐色
	玉髄	: 隠微品質の石英で比較的均質なもの 淡褐~灰色
	めのう	: 隠微品質 繊維状・繻状 不透明 玉髄の一種

*一次整理においては、便宜的に次のように分類する
珪酸を含むものは、概ね「チャート」に統一し、透明か、不透明かで、頁岩と区別した

VI章 自然科学的分析

石器及び玉類の岩石学的分析
(千歳市オルイカ2遺跡)

報 告 書

平成20年 3月

アースサイエンス株式会社

はじめに

本報告書は「石器及び玉類の岩石学的分析」についてのものです。蛍光X線（XRF）分析および電子線マイクロアナライザ（EPMA）分析にあたっては、北海道教育大学 札幌校の岡村聡教授ならびに菅原いよ氏の御指導・御協力をいただきました。記して感謝申し上げます。

2008年 3月
アースサイエンス株式会社
担当者 加藤 孝幸

オルイカ2遺跡分析試料一覧

	試料 番号	遺構・ 包含層	層位	肉眼鑑定	写真撮影	XRF	EDS
1	オ2-1	S-28	V2	○	○	○	○
2	オ2-2	S-29	V2	○	○		
合 計				2	2	1	1

1. 肉眼鑑定

オリイカ2遺跡出土の玉2点について肉眼鑑定を行った。資料の写真を図1-1 また鑑定結果を表1-1に示す。

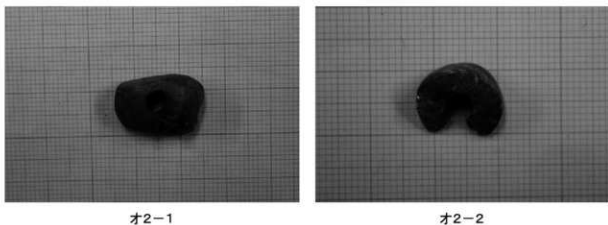


図1-1 オリイカ2遺跡出土の玉

表1-1 オリイカ2遺跡出土の玉の肉眼鑑定

	試料 番号	遺構・ 包含層	層位	岩石名	備 考
1	オ2-1	S-28	V2	タルク岩	帯褐緑灰色，細粒，ち密，スピネル含む。 原岩は蛇紋岩。
2	オ2-2	S-29	V2	タルク岩	帯褐帯緑灰白色，細粒，ち密，自形および他形の スピネル含む，原岩は蛇紋岩。

2. 全岩化学分析

2-1 分析装置及び分析条件

分析には北海道教育大学札幌校のフィリップス社製蛍光X線 (XRF) 分析装置 MagiX を使用した。各元素の測定条件を表 2-1 に示す。X線管球はエンドウィンドウ型の Rh 管球を用いた。測定環境はヘリウム環境中で測定している。測定時間は一試料につき約 23 分である。

試料及び定量操作：試料は未処理のものをそのまま測定試料とした。試料測定用プラスチック製カップに、一重のポリプロピレンフィルムを装着し、試料を入れた。中の試料が動かないようにフタをして、金属ホルダーに入れ試料室にセットし測定を行った。定量分析はフィリップス社製のソフト IQ+ を用いファンダメンタルパラメータ法 (FP 法) によって行った。

なお、本装置では、Na-U の元素が定量可能であり、C, N, O といった軽元素は検出できない。

本試料の測定で用いた FP 法は、標準試料を用いた検量線法とは異なり、分析線の強度が試料の組成と基礎的定数 (ファンダメンタルパラメータ) の関数として記述できるという考え方を基礎とした理論計算法である。この方法は、出所不明の未知試料の分析や、試料の形状・重量に関係なく前処理なしで定量できるメリットがある。

表2-1 各元素の測定条件

	Analytical element		Crystal	Detector	kV	mA	Angle (2θ)	Counting time (s)
	K α	L α						
1	Mo-Pr		LiF 200	Scint.	60	50	9.5-21	115
2	Zn-Mo	Re-Am	LiF 220	Scint.	60	50	27.5-62	345
3	V-Cu	Pr-W	LiF 220	Duplex	50	60	61-126	650
4	K-V	In-Ce	LiF 200	Flow	24	125	76-146	175
5	P-Cl	Zr-Ru	Ge 111	Flow	24	125	91-146	22
6	Si-Si	Rb-Sr	PE 002	Flow	24	125	100-115	5
7	Al-Al	Br-Br	PE 002	Flow	24	125	130-147.04	5.68
8	Na-Mg	Zn-Se	PX1	Flow	24	125	20-30.05	2.68

Scint.;シンチレーション検出器,

Duplex;ガスフロー検出器とXeシールド型のタンデム型検出器,

Flow;ガスフロー検出器

2-2 分析結果

分析結果を表 2-2 に示す。分析値 (重量%) は 100% にノーマライズしてある。下段は注目する元素の原子数、原子比である。

表2-2 オルイカ2遺跡出土の玉の全岩化学組成

試料番号	オ2-1
MgO	30.92
Al ₂ O ₃	2.40
SiO ₂	59.80
P ₂ O ₅	
SO ₂	0.07
K ₂ O	0.09
CaO	0.15
TiO ₂	0.15
Cr	
MnO	6.16
Fe ₂ O ₃	
Co	
Ni	0.25
Zn	
Sr	
Zr	
合計	100.0
Si	7.609
Fe	0.590
Fe/(Fe+Mg)	0.09
推定岩石	タルク岩

3. 鉱物分析

3-1 分析方法

構成鉱物の化学分析は、走査型電子顕微鏡とそれに付設のエネルギー分散型X線分析装置試料は(EDS)によった。装置は北海道教育大学札幌校の電子顕微鏡(JEOL JSM-T330A)に付設したOxford社製Link ISIS300である。加速電圧は15kV、補正はZAF補正によった。試料は前処理として、炭素蒸着を行った。これは非導電性試料に炭素を真空蒸着することによって電子線放射による試料面の帯電を防ぐ効果がある。この炭素膜は測定後アセトンやアルコールにて容易に取り除くことができる。電子線は最小領域2~3ミクロンまで絞り込むことができ、試料中鉱物の微小領域の化学分析が可能である。電子線放射によって発生する元素特有の波長を示す固有X線を検出することによって元素の定性・定量分析を行うが、正確な定量分析を行うためには、試料表面を平滑にする必要がある。今回の分析試料は穿孔されたリングの形状をもっているが、測定にあたっては、出来るだけ平滑な部分を選んで非破壊分析を行った。合計重量が100%近くにならない場合が多いが、分析結果から推定される予想鉱物の理想化学式との対応は概ね良い。

3-2 分析結果

EDSによる鉱物の分析結果を表3-1に示す。

表3-1 オルイカ2-1の鉱物分析値

	1	2	3	4	5	6
SiO ₂	64.70	62.80	66.52	63.83	64.47	64.18
TiO ₂	0.48	0.00	0.00	0.14	0.08	0.22
Al ₂ O ₃	2.21	6.55	2.20	1.41	2.29	1.59
FeO	3.02	4.71	5.53	3.68	3.09	3.27
MnO	0.01	0.00	0.21	0.12	0.00	0.00
MgO	28.18	23.96	24.58	28.88	29.26	29.27
CaO	0.18	0.66	0.00	0.29	0.32	0.25
Na ₂ O	0.70	0.29	0.39	1.21	0.39	0.85
K ₂ O	0.33	1.34	0.26	0.28	0.09	0.33
Cr ₂ O ₃	0.15	0.04	0.08	0.00	0.00	0.00
NiO	0.04	0.00	0.35	0.15	0.11	0.08
原子比	22	22	22	22	22	22
Si	7.914	7.730	8.163	7.872	7.87	7.878
Ti	0.044	0.000	0.000	0.013	0.01	0.021
Al	0.318	0.951	0.317	0.204	0.33	0.230
Fe	0.309	0.485	0.568	0.379	0.32	0.336
Mn	0.001	0.000	0.022	0.013	0.00	0.000
Mg	5.139	4.396	4.496	5.310	5.33	5.355
Ca	0.023	0.086	0.000	0.038	0.04	0.033
Na	0.166	0.070	0.094	0.290	0.09	0.202
K	0.052	0.210	0.041	0.043	0.01	0.051
Cr	0.014	0.004	0.008	0.000	0.00	0.000
Ni	0.004	0.000	0.035	0.015	0.01	0.008
Total	13.984	13.932	13.742	14.179	14.010	14.113
鉱物名	タルク	タルク	タルク	タルク	タルク	タルク

Ⅷ章 まとめ

1 調査成果の概要

オリカ2遺跡は、南長沼用水の南東側部分の「A・B・C地区」と北西側部分の「平成19・20の両年度調査区」までを範囲とするが、遺構や遺物からは別の遺跡として捉えた方が妥当である。

前者は平成14・16年度に調査を行い「千歳市オリカ2遺跡」（北埋調報189集）と「千歳市オリカ2遺跡（2）」（北埋調報221）を刊行しているので、詳細はこれらを参照していただきたい。本章では、平成19・20年に行った北西側部分の調査の成果についてまとめる。

(1) 遺構

遺構は土坑、Tピット、土器（破片）集中、フレイク・チップ集中、旧石器ブロックを調査し、これら以外に擬似焼土と遺跡の調査も行った。

土坑はV層で4基確認され、いずれも平面がほぼ楕円形を呈し壁と坑底が曲線的なものである。遺物の出土は無いが縄文時代晩期後葉と考えている。

TP-1は浅く掘りかけのものと考えられ、縄文時代中期～後期と推測される。

土器（破片）集中UPS-1・LPS-1は、平成20年度の調査で遺構に準ずるものとして個別の番号を付し調査したもので、風倒木痕内に土器がまとめて出土したものである。平成19年度の調査では土器の出土状況を記録していない。

フレイク・チップ集中はV1層で径1.5mの範囲に位置していた。出土土器や層位から縄文時代晩期後葉と考える。

旧石器ブロックはSB-1・2・3を調査した。いずれも散在的に出土し層位的にもV～VI層・風倒木痕内の堆積層から広く出土しているため、平面的・層位的に「集中域」を示さない。細石刃核等の遺物の出土もなく時期や性格を明確にできないが、後期旧石器時代の細石刃石器群であるといえる。

擬似焼土は46ヶ所確認した。Ⅲ層で1ヶ所（UF-1）、Ⅳ層（Ta-c）下位で45ヶ所（LF-1～45）である。平成19年度は焼土との認識で調査したが、当センターで調査した千歳市梅川4遺跡の報告書（北埋調報253）が平成20年度末に刊行され、同書の「口絵3」や「Ⅵ章2節 梅川4遺跡の「擬似焼土」の成因について」（197～200頁）の内容と本遺跡の焼土の調査結果を検討した。

梅川4遺跡における擬似焼土の特徴は次のとおりである（前掲書）。

- ・「風倒木痕のくぼみ等」にある
- ・「赤褐色の土塊」
- ・「分布範囲に炭化材等を伴わない」

擬似焼土とは「土壌の風化作用や風倒木埋積過程で生じた酸化作用などによって生じた可能性」（前掲書）のある赤色土の塊で人為的な遺構でないといえる。

本遺跡ではUF-1はⅣ層の凹みにあり、LFのうちLF-1はV2層中の凹みで、LF-7・8はⅥ層面の木根攪乱、これら以外はすべてV層調査面の風倒木痕内に位置する（表12）。色調も極暗赤褐色・暗赤褐色・赤褐色のいずれかで、炭化物や炭化材が伴うものはない。これらのことから平成19年度に調査した焼土は、すべて「擬似焼土」であると判断した。平成20年度の調査でもこの赤褐色土の塊は認められたため、トレンチで断面を確認し「焼土」と「擬似焼土」を明確に区別して調査した。結果、人為的な焼土は認められず、これら擬似焼土は十数ヶ所で記録は作成しなかった。

Ⅲ層上面の道跡は、平成19年度の調査でT a - aの筋状の堆積状況がみられた。建設機械の走行跡と推測するが、アイヌ文化期の道跡である可能性も考慮し、調査・報告を行った。

現代の道跡は、平成20年度の調査で調査区を東西方向に横切る凹みを確認した。調査区壁の断面を記録しこの地点をつなぎ図上で復原した。1739年以降で南長沼用水が造られるまで利用されたものであろう。

(2) 土器

土器は遺構から153点、包含層から17,669点出土した。土器は遺構出土分も含め100%近くがⅢ層出土のV群c類の大洞A・A'式に並行する「タンネトウL式」である。これらの特徴は次のとおりである。

- ・深鉢以外に鉢・浅鉢・舟形・壺形土器の特殊な器形がある。
- ・文様として口唇部から内外面にかけて撚紐圧痕文・撚紐刻み・縄線文・棒状工具あるいは指頭による刻み・沈線文等がみられる。
- ・深鉢土器等に複数の横走沈線文に加え蛇行沈線文が施されるものがある。
- ・浅鉢土器は口唇部から内面にかけて突起部分を中心に先に述べた文様を組み合わせた装飾的な施文がみられる。
- ・舟形土器や壺形土器等にみられる複数の平行沈線文は「工字文」風に施されている。

また、Ⅳ層(T a - c)下位のV層からも出土している。Ⅲ層・V層と層位的には区切られるが、土器型式に差は認められない。

その他の時期はV層から断片的に出土した。縄文時代早期(I群b類)の東銅路Ⅳ式、中期(Ⅲ群b類)の萩ヶ岡式の胴部中位～底部が1個体、破片では萩ヶ岡1式・萩ヶ岡2式・北筒式がある。後期(Ⅳ群a類)はタブコブ式の口縁部がある。また、擦文土器(V群)の鉢形土器がⅢ層から1個体出土した。

(3) 石器類

石器類は遺構から2,592点、包含層から772点出土した。遺構出土のものはフレイク・チップ集中(L F C - 1)・旧石器ブロック(S B - 1・2・3)で、旧石器及び剥片石器群である。

包含層出土の石器類は、V章で述べたように剥片石器群が約2/3を占め、Ⅲ層出土が過半数を占める。Ⅲ層出土の石器類は縄文時代晩期後葉のものとする。ついで出土が多いのはV2層で、Ⅳ層(T a - c)直下のV1層からの出土よりも多い。V2層出土の石器群の多くは縄文時代晩期後葉と推測される。

(4) 遺跡の性格について

本遺跡はⅢ層から縄文時代晩期後葉の遺物が多く出土したが、対照的にⅢ層で遺構は確認できなかった。また、V層の遺構は住居跡や炉跡等の定住を示すものではなく、集落跡ではないといえる。

調査区は全面的に風倒木痕が多数みられ、石鏝や磨製石斧が多く出土していることから、本遺跡はかつて森林であり、狩猟や木材の伐採のため利用された場所であったと推測する。その時期は主に縄文時代晩期後葉であろう。また、細石刃削片が出土していることから、旧石器時代に石器製作が行われた可能性が考えられる。

(末光正卓)

写 真 图 版



平成19年度調査状況（南西から）



平成20年度調査状況（南東から）



平成19年度調査区完掘状況（西から）



平成20年度調査区完掘状況（北東から）



基本層序（U-21区 西北から）



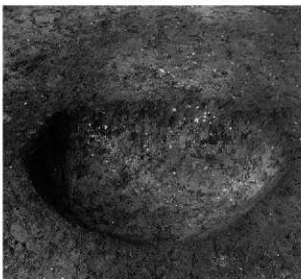
LP-1 土層断面 (南西から)



LP-1 完掘状況 (南西から)



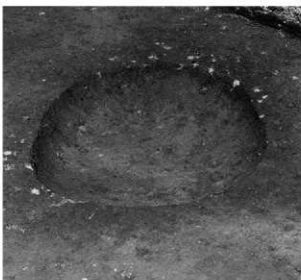
LP-2 土層断面 (南西から)



LP-2 完掘状況 (南西から)



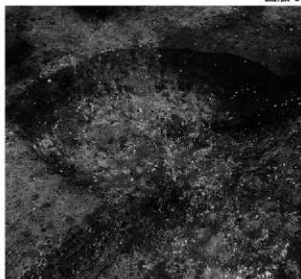
LP-3 土層断面 (西から)



LP-3 完掘状況 (西から)



L P-4 土層断面 (西南から)



L P-4 完掘状況 (西から)



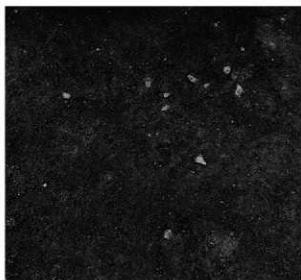
T P-1 土層断面 (南東から)



T P-1 完掘状況 (東南から)



UPS-1 (東から)



LFC-1 (南西から)



SB-1 (東から)



SB-2 (北東から)



SB-3 (北東から)



台石出土状況 (北から)



Ⅲ層上面の道跡 (西北から)



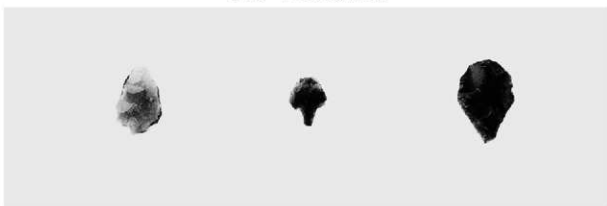
現代の道跡 (南東から)



UPS-1 出土の復原土器



LPS-1 出土の復原土器



LFC-1 出土の石器類



S B ・包含層出土の旧石器群 (削片・細石刃は1/1)



N-28区出土の復原土器



R-19区出土の復原土器



M-26区出土の復原土器



P-21区出土の復原土器



P-27区出土の復原土器



〇-28区出土の復原土器



P-21区出土の復原土器



S-18区出土の復原土器



N-28区出土の復原土器



P-27区出土の復原土器



P-29区出土の復原土器



Q-28区出土の復原土器



O-28区出土の復原土器



N-24区出土の復原土器



J-25区出土の復原土器



L-27区出土の復原土器



N-28区出土の復原土器



P-29区出土の復原土器



L-28区出土の復原土器



O-25区出土の復原土器



O-27区出土の復原土器



P-19区出土の復原土器



〇-29区出土の復原土器



M-29区出土の復原土器



R-23区出土の復原土器



M-29区出土の復原土器



N-23区出土の復原土器



〇-28区出土の復原土器



J-27区出土の復原土器



P-21区出土の復原土器



L-29区出土の復原土器



N-28区出土の復原土器



S-26区出土の復原土器



N-24区出土の復原土器



H-30区出土の復原土器



J-20区出土の復原土器



N-25区出土の復原土器



G-38区出土の復原土器



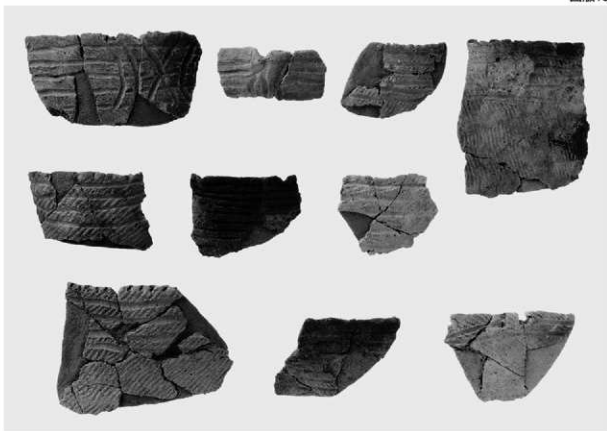
M-28区出土の復原土器



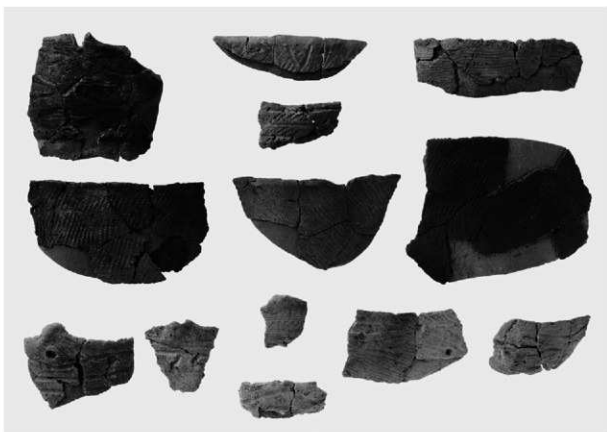
T-30区出土の復原土器



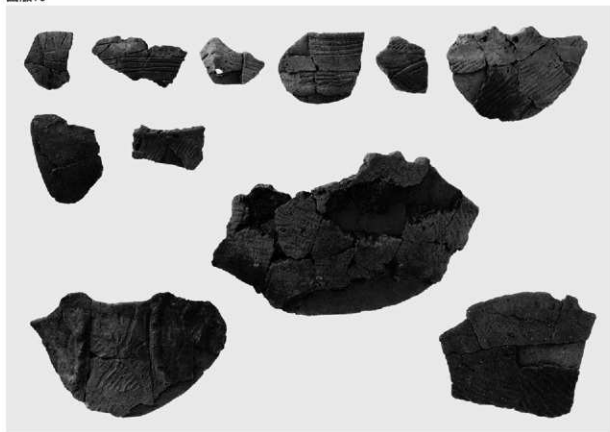
J-20区出土の復原土器



包含層出土の破片土器（1）



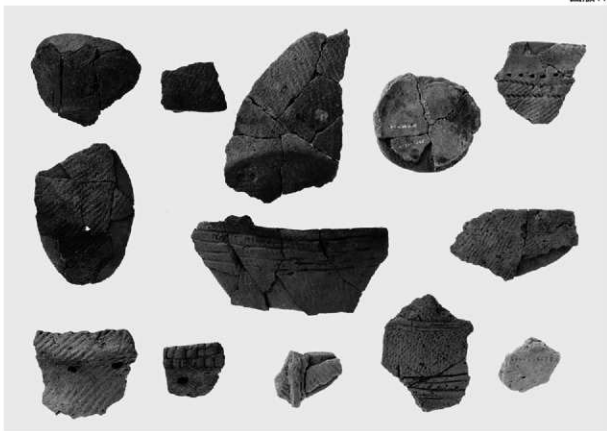
包含層出土の破片土器（2）



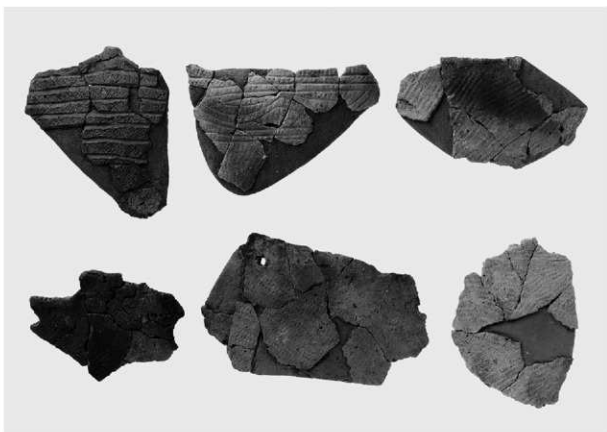
包含層出土の破片土器（3）



包含層出土の破片土器（4）



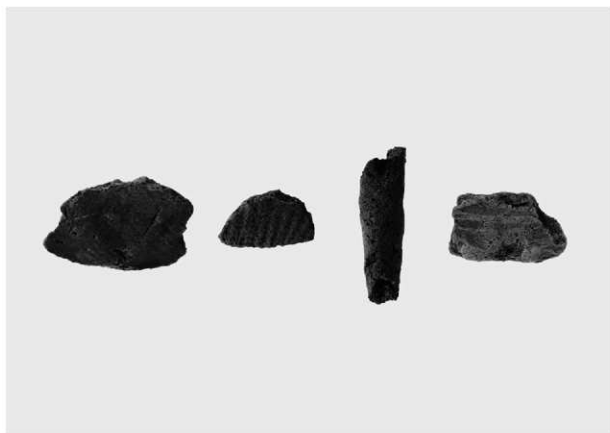
包含層出土の破片土器（5）



包含層出土の破片土器（6）



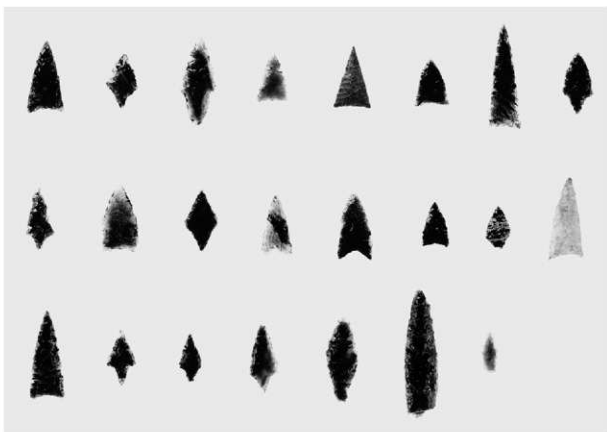
包含層出土の破片土器（7）



包含層出土の土製品等



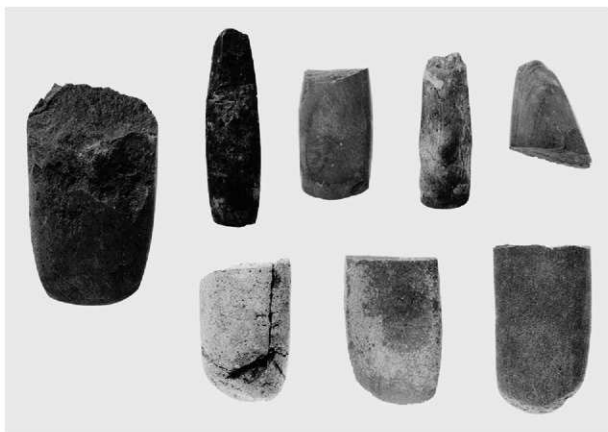
包含層出土の旧石器群



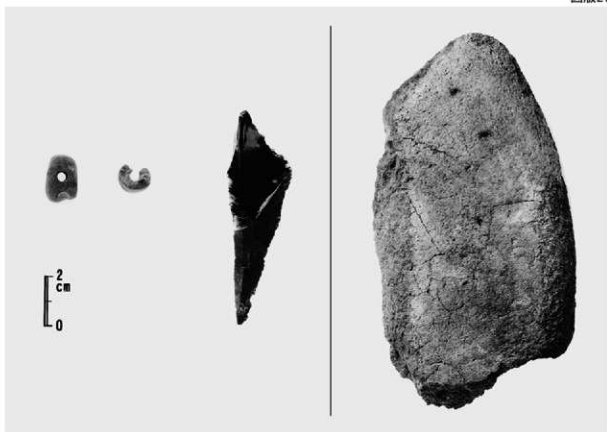
包含層出土の剥片石器群(1)



包含層出土の剥片石器群（2）



包含層出土の磨製・礫石器群（1）



包含層出土の礫石器群（2）・石製品

引用参考文献

論文・書籍等

- 大久保雅弘・藤田至則 1984 『地学ハンドブック・新訂版』 築地書館
大場利夫・石川 徹 1967 『千歳遺跡』 千歳市教育委員会
加藤晋平・鶴丸俊明 1980 『図録石器の基礎知識Ⅰ-先土器(上)』 柏書房
菅野三郎・奥村 清 1978 『地学の調べ方』 地学のガイドシリーズ1 コロナ社
木下亀城・小川留太郎 1967 『標準原色図鑑全集6 岩石鉱物』 保育社
小山正忠・竹原秀雄 1967 『新版標準土色帖』 日本色研事業株式会社
鈴木道之助 1981 『図録石器の基礎知識Ⅲ縄文』 柏書房
永田方正 1981 『北海道蝦夷語地名解』(1984復刻 草風館)
長見義三 1976 『ちとせ地名散歩』 北海道新聞社
松浦武四郎著 高倉新一郎校訂 秋葉実解説 1982 『丁巳東西蝦夷山地理取調日誌 下』 北海道出版企画センター
松浦武四郎『東西蝦夷山川取調図』(1985 『アイヌ地名資料集成』別冊 草風館)
松浦武四郎著 秋葉実解説 1988 『武四郎蝦夷地紀行』 北海道出版企画センター

団体・組織刊行物

- 泉郷郷土史編纂委員会 1992 『郷土史ケヌフチ物語』
旧石器文化談話会 2000 『旧石器考古学辞典』 学生社
札幌開発建設部札幌新道建設事務所 2002 『道央圏連絡道路事業』
更科源蔵編 1969 『千歳市史』
千歳市史編さん委員会 1983 『増補千歳市史』
千歳市農業協同組合 1984 『千歳市農業協同組合史』(創立三十周年)
ベドロジスト懇談会 1984 『土壌調査ハンドブック』 博友社

(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書(北埋調報)等

- 北海道埋蔵文化財センター 1982 『千歳市ママチ遺跡』 北埋調報9
北海道埋蔵文化財センター 1987 『千歳市ママチ遺跡(3)』 北埋調報36
北海道埋蔵文化財センター 1999 『千歳市キウス遺跡4(3)』 北埋調報134
北海道埋蔵文化財センター 1999 『千歳市柏台1遺跡』 北埋調報138
北海道埋蔵文化財センター 2002 『千歳市チブニー1遺跡・チブニー2遺跡』 北埋調報173
北海道埋蔵文化財センター 2003 『千歳市オルイカ1遺跡』 北埋調報188
北海道埋蔵文化財センター 2003 『千歳市オルイカ2遺跡』 北埋調報189
北海道埋蔵文化財センター 2004 『千歳市オルイカ1遺跡(2)』 北埋調報206
北海道埋蔵文化財センター 2004 『千歳市チブニー2遺跡(2)』 北埋調報207
北海道埋蔵文化財センター 2005 『千歳市オルイカ2遺跡(2)』 北埋調報221
北海道埋蔵文化財センター 2005 『調査年報17』 平成16年度
北海道埋蔵文化財センター 2006 『千歳市チブニー2遺跡(3)』 北埋調報225
北海道埋蔵文化財センター 2007 『千歳市祝梅川上田遺跡・梅川2遺跡』 北埋調報238
北海道埋蔵文化財センター 2008 『調査年報19』 平成18年度
北海道埋蔵文化財センター 2008 『千歳市キウス5遺跡(8)』 北埋調報251
北海道埋蔵文化財センター 2008 『千歳市キウス9遺跡』 北埋調報252
北海道埋蔵文化財センター 2008 『千歳市梅川4遺跡(1)』 北埋調報253
北海道埋蔵文化財センター 2009 『調査年報21』 平成20年度

報告書抄録

ふりがな	ちとせし おるいかに いせき							
書名	千歳市 オルイカ2遺跡(3)							
副書名	一般国道337号千歳市新千歳空港関連工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書(北埋調報)							
シリーズ番号	第267集							
編著者名	三浦正人・鎌田望・末光正卓							
編集機関	(財)北海道埋蔵文化財センター (http://www.domaibun.or.jp)							
所在地	〒069-0832 北海道江別市西野幌685番地1 (011)386-3231 mail@domaibun.or.jp							
発行年月日	西暦2010年3月12日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 東経 (M-20杭)	調査期間	調査面積	調査原因	
		市町村	遺跡番号					
おるいかに オルイカ2遺跡	ほっかいどう ちとせし 北海道千歳市 中央 395-64外、1196-6外、 395-21・67・69・75～79・ 87・89・90・92	01224	A-03 280	日本測地系		20070517 ～ 20070912	4,200㎡	道路建設 (一般国道337号千歳市新千歳空港関連工事)に伴う事前調査
				42°	141°			
				51′	42″			
				37″	57″			
		世界測地系		20080820 ～ 20081015		3,220㎡		
				42°	141°			
				51′	42″			
				46″	43″			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
オルイカ2	散布地	縄文時代晩期 旧石器時代	土坑：4基 Tピット：1基 土器(破片)集中：2ヶ所 フレイク・チップ集中：1ヶ所 旧石器ブロック：3ヶ所		擦文土器1個体 縄文時代晩期 土器・石器類 細石刃、削片、 石刃、搔器、削 器、円形搔器等			

(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第267集

千歳市 オルイカ2遺跡 (3)

平成22 (2010) 年3月12日

編集・発行 財団法人 北海道埋蔵文化財センター
〒069-0832 北海道江別市西野幌685番地1
TEL(011)386-3231 FAX(011)386-3238
[URL] <http://www.domaibun.or.jp/>
[E-mail] mail@domaibun.or.jp

印刷 岩橋印刷株式会社
〒063-8580 札幌市西区西町南18丁目1番34号
TEL(011)669-2510 FAX(011)669-2600
[URL] <http://www.iwashashi-printing.co.jp/>
[E-mail] soumu@iwahashi-printing.co.jp

